機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　古しえの鉄の巨人に乗る介入者

アルトアイゼン・リーゼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　古しえの鉄の巨人に乗る介入者

【Ｎコード】
Ｎ８３６６Ｕ

【作者名】
アルトアイゼン・リーゼ

【あらすじ】
神のミスで殺され、謝れる主人公、そして彼は転生し新たな世界に旅立つ　主人公と主人公の財団は凄いチートです

神

え～と・・・まず落ち着こう・・・って落ち着けるか～！！なんだよこの状況！いやいや！！どんだけカオスなんだよ！何で俺が血みどろで腹とか裂けてて腕とか足に関してはあり得ない方向に曲がってるんだよ！自分で言うのは何だが俺は持ち前の冷静さとクールさと悪運と勝負運と賭け好きで、リアル、キョウスケ・ナンブって、言われてるんだぜ俺！だけどキョウスケ中尉好きなんだけど、極稀にこの二つ名は名誉なんだが不名誉なんだかわからなくなる事がある・・・

「いや、名誉な事だと思いますよ？」

声をかけられたので振り向いてみると、・・・言葉で表現するのがめちゃくちゃ難しい美女がいた、表すとすれば・・・特上の特上ってとこか？いやまだたんないな、なんかこう神々しいオーラがあるって言うかなんというか・・・

「び、美女だなんて／／／お世辞でも嬉しいです／／／」

「？言葉に出てか？」

「いえ、私、読心術が使えるので」

「なるほどな、わかったが出来れば心は読まないでくれると助かる」

「あ、すみません嫌ですよね、勝手に心の中見られるのって、すみませんもうしません、そして貴方にひとつお知らせしなければならない事があります」

「ん？なんだ俺が死んだなら解るぞ？明らかにあれじゃどんな奴でも死んでるからな」

やっと俺は落ち着く事が出来て普通に喋る事が出てるようになった

「いえ、そうではなくて・・・私のミスで貴方を殺してしまったんです・・・」
「な・・・に・・・？」
「私は自分で言うのもなんですけど最高神のオーディンと申します、私が休憩中に読書をしていると時に誤ってカッターを落としてしまって、貴方に直撃してしまったんです」
「なっ！オ、オーディンってこんなにも美しい女性だった事に驚きだ・・・」
「び、美女だなんて／／／ってそうじゃなくて！何で怒らないですか！？貴方はまだ死ぬはずではない人だったんですよ！？」
「誰にもミスという事ある、まあ少し心残りがあるが、貴女を攻めるつもりはない」「あ、あなた・・・や、優しすぎますよ、グスッ・・・」
「な、泣かないでくれ、貴女がわざとやった訳ではない事位解っている、さあ俺を黄泉の世界って奴に連れて行ってくれ」
「い、いえ！貴方に黄泉の国にいくなって選択肢はありません！貴方にあるのは転生するか、神化してわ、私と一緒に暮らすかって選択肢だけです！！！／／／」

・・・・・・は？いやまてよ、転生はまだわかるでも神化して一緒に暮らすって何だよ！？？おかしくだろ？何だこの神は俺を混乱という名のブラックホールに陥れたいのか？

「・・・まて、聞きたい事がある、転生するのは何処の世界で、そして、神化して暮らすってどういう事だよ！！？」
「転生するのはＳＥＥＤの世界です、い、一緒に暮らすっていうのは、その・・・さ、さっきの貴方の優しさで貴方の事が好きになっちゃったからです／／／」
「・・・転生プリーズ・・・」

「え！私と暮らすのは駄目なんですか！」
「暮らすにしてもあなたのことはあまり知らないしもう一度人生がスタートすんならその世界で死んでから暮らすのも悪くない」
「え！！じゃあ我慢すれば貴方と暮らせるんですか！？」
「そういう事だ、まあまずはお互いを知る事からだが・・・後、ＳＥＥＤの世界は危険だ、能力と、機体を貰えるか？」
「あ、はい！もちろんです！」
「ではまず、身体能力ＭＡＸ、運もＭＡＸにしてくれ、ＳＥＥＤを持っていて、スーパーコーディネイター以上の能力をくれ、後、設定はナチュナルで、オーブで１８で財団を設立した男、その財団は、建前上はオーブだが、その影響力は、地球圏だけではプラントにもあると言うものにしてくれ、裏では、極秘にＰＴやアシュセイヴァー、ヴァイスセイヴァー、ソウルゲイン、ヴァイサーガ、グルンガストシリーズ、ダイナミック・ゼネラル・ガーディアン、を開発している事にしてくれ、そして機体だが、やはり、アルトアイゼン・リーゼにしてくれ、動力源は、ＧＮドライブ、時流エンジンを追加して、Ｉフィールド、ＰＳ装甲も付けてくれ、最後に、武装は左腰にアルトが持てるサイズの斬艦刀、右腰にはビームライフルをたのむ、転生したときは２１歳にしてくれ」
「ず、随分と多いですね・・・まあいいでしょ！では送りますよ」
「ああ頼む」
「ま、またお会いできるときを楽しみにしています／／／」
「ああ」
そして俺は意識を手放してＳＥＥＤの世界に旅立った

偽りの平和

俺が転生してから早３ヶ月、目覚めたら俺は財団の執務室で目覚めた、創始者といっても仕事をしないわけではなく俺の仕事は社員たちのメンタルケアや武器や商品などのテストにも立ち会っている、財団があるのはオーブから5キロほど離れた、島にある、そして、その地下では来るべき時のために、機動兵器が開発されていた、ＰＴやアシュセイヴァー、ヴァイスセイヴァー、ソウルゲイン、ヴァイサーガ、グルンガストシリーズ、ダイナミック・ゼネラル・ガーディアンなどが量産されている、ソウルゲイン、ヴァイサーガは一機のみ存在している、どちらも俺の専用機だ、最近では社員たちのアイデアでアルブレードやエルシュナイデも作っている、パイロットは希望してなった社員１２００名がパイロットしてがんばっている、そして俺は、調整が完了した愛機、アルトに目を向けた

「もうすぐ、お前の力を使わせてもらうぞ・・・」

「あ～～！！！キョウスケ様！！こんな所にいらしたんですね！」

社員たち１５名ほどが俺を見つけると走ってきた、ちなみに俺の名前は、キョウスケ・ナンブ、前世では南武恭介だったがこちら側に来てからはキョウスケ・ナンブにしている

「何か用か？」

「用か？じゃないですよ！貴方最近まったく休んでないでしょう！此処３ヶ月は、ずっと働き詰めですよ！」

そうなのだ、こちらに来てずっと働きけ続けているのだ

「いや、しかしだな・・・」

「嫌もかかしもありません!!!とにかく貴方にはこれから最低でも2ヶ月の休暇をとって貰います!」
「あの・・・俺の意見は・・・」
「さあさあ行って来てください!ヘリオポリスでのんびりして来てくださいね一応アルトは持っていってくださいね?」
「あのだから・・・」
「いいですね!!!?」
「・・・はい・・・」

俺は社員の押しに負けてアルトを持ってヘリオポリスにほぼ強制的に行くことになった

・・・・・・そして今俺はヘリオポリスのテーブルとベンチが一緒になった所で読書を楽しんでいる、すると空から。メタリックグリーンの翼を持ったロボット鳥が羽を休めるように俺の肩にとまった

＜トリィ?＞
「なかなかかわいいな、トリィ」
＜トリィ!＞

名前を呼ばれると嬉しそうに羽ばたき、乗っていた肩とは逆の肩に乗った

「トリィ〜〜!!」

ん?キラの登場か、キラがこちらに近づいて来る、どうやら肩に乗っているトリィに気がついたみたいだ

「あの・・・すみません・・・その鳥は僕のなんです・・・」
「ああ、この子か、ホラご主人だぞ」

方にいるトリィに指を近づけるとトリィが飛び移りキラに近づけるとまた俺の肩に乗ってしまった

「？」
「フフフ・・・なんかなついちゃったみたいですね」
「みたいだな」
「あのすみませんが、これから僕はプログラミングをしなければならないですけど、もしよかったらトリィを見てみてもらってもいいですか？」
「ああかまわないぞ、よく癒されそうだ」

そういってキラは俺の隣に座ってノートパソコンを開いた

「すみません、え～と・・・」
「？ああ、俺はキョウスケ・ナンブだ」
「僕はキラ＝ヤマトです、キラって呼んでください」
「ん？キラは何かの作業をしていたのか？」
「あ、はい、似た様なものですかね？途中でトリィがどっかに飛んで行っちゃって・・・すみませんほんとにトリィに構ってもらって・・・」
「きにするな」

そういったらキラは作業に入り、俺はトリィの相手をしていた、暫くするとキラが唸り声を上げ始める

「うーん・・・」
「どうした？」
「解らない所があるんです・・・」
「見せてもらえるか？」

「ええ」

キラにパソコンの画面を見せてもらいすぐにプログラムの内容を理解した

「ここはこうだな」

俺はキラ以上の速さでキーボードを撃ち始める隣でそれを見ているキラはひどく驚いてる

「これでいいか？」

「あ、はい・・・有難う御座います・・・！」

キラは俺が作ったプログラムを見て更に驚いた

「あの・・・キョウさんって、コーディネーターなんですか？」

「なぜだ？」

「だってさっきだって物凄く早くキーボードを打ってたし、このプログラムなんて凄いクォリティですよ」

「俺はナチュナルだぞ」

「え！？」

「俺は本土の方でプログラミング関係の仕事もしているだよ、結構長い事やってるからな（実際は3ヶ月だけど）」

「そうなんだですか・・・」

「なら、キラはナチュラルとコーディネーターのどちらなんだ？」

「・・・・・僕は・・・・・コーディネーターです」

「そうか」

「！驚かないですか？」

「何が？」

「その・・・、僕がコーディネーターってことに・・・」

「なにを言ってる、キラはキラだろ、ナチュラルでもコーディネイターでも関係ない、お前はお前だ、それに俺は、ブルーコスモスの馬鹿共みたいに人種差別はしない」
「！！！！」

キラは俺の言葉にとても驚いているようだ

「キラー！」

少し離れた所から誰かがキラの呼ぶ声がしたからそちらを方を見るとトールとミリアリアがいた

「こんなトコにいたのかよ～。カトウ教授がお前のこと、捜してたぜ」
「またぁ～？」
「すぐに連れて来いってさ」
「なーに？また手伝わされてるの？災難ね～」
「昨日渡されたのも、やっと終わったばかりなのに・・・」
「キラ、隣の人って、誰？」
「この人はキョウさん、本土の方でプログラミング関係の仕事をしてるんだってさっきプログラミングを手伝ってもらってたんだ」
「キョウスケ・ナンブだ、気軽に呼んでくれ」
「はじめまして、私はミリアリア＝ハウ。ミリィって呼んでください！」
「オレはトール＝ケーニヒ。トールってよんでください、ぉ？何か新しいニュースか？」
「うん・・・華南だって」
「大丈夫かなぁ、オーブ・・・」
「あぁ、それは心配ないでしょ、オーブは中立だぜ？オーブが戦場になるなんてことはまずないって」

「そうだキョウさん、僕達はこれからゼミの研究室があるモルゲンレーテに行くんだけど・・・その良かったら一緒に来きませんか？」
「そうだなこれからモルゲンレーテに顔出そうと思ってたしいこうかな？」
「じゃあ行こうか」
俺はキラ達と一緒にモルゲンレーテに向かった

モルゲンレーテ

「うーっす」
「あ、キラ。やっと来たか」
「誰？」
「ああ、教授のお客さんだって、ここで待ってろって言われたんだって」
「ふ～ん」
「サイ、教授は？」
「いやいないぞ、あとこれ追加とかって」
「うえ～」
「何なんだ？」
「フレーム設置とモジュールの改良、とにかくプログラムの解析さ」
「そっか」
「キョウさん済みませんけどまた手伝ってもらえますか？」
「ああ構わないぞ」
「有難う御座います」

その後俺はみんなに軽い挨拶を作業に取り掛かろうとしたら、突然凄まじい揺れが起こった

「隕石か!?」
「みんな落ち着け!この揺れではエレベーターは危険だ!階段で行くぞ!」

非常階段へ行くと、上がってきた職員がいたため、サイが現在の状況を尋ねた

「ＺＡＦＴに攻撃されてる!コロニーにＭＳが入って来てるんだよ!」

その言葉にキラの隣にいたカガリが突然どこかに走り出した、行先はおそらくストライクとイージスがある工場区の格納庫だろう

「――君!」
「キラ!?」
「すぐ行くから!」
「まて!チッ!俺が行くから先みんなは避難するんだ!」
「「「「は、はい!」」」」

俺はみんなに先に避難するように促し、キラとカガリの後を追い掛けた

「キラっ!」
「キョ、キョウさん!?何で!!?」
「2人だけを放ってはおけるか!」

爆風がおきカガリがのかぶっていた帽子を飛んだ

「女・・の・子?」

「やはりか」
「何だと思ってたんだ、今まで！」
「いや、だって・・・」
「そんないい争いして場合じゃないぞ！」
「いいから行け！私には確かめねばならぬことがある！」
「いやどう考えても、戻れんよ」

俺が向ける親指の先は、瓦礫で埋もれていた、先ほ通ってきた道だ

「ええと・・・ほら、こっち！」
「離せ！このバカ！」

俺達は急いでシェルターに急いだ

「こ、これって…」
「あぁ、やっぱり…。地球軍の新型機動兵器…。くっ、お父様の裏切り者っー！！」

お～、これがストライクとイージスか

「急ぐぞ！」

そして、退避シェルターの入り口へと辿り着き、インターフォンを押すとスピーカーから応答の声が聞こえた

＜まだ誰かいるのか？＞
「はい！僕と友達もお願いします開けて下さい」
＜２人！？＞
「いえ３人です」
＜もうここは一杯だ左ブロックに３７シェルターがある其処まで行

けないか？＞
「でしたら、女の子一人でもお願いできませんか？」
＜分かった。済まん！＞
「何！お前達は・・・！？」
「平気！向こうのシェルターに行くから早く乗って！」
「早く乗れ！」

カガリを無理やり押し込んでシェルターを閉めると、カガリがガラス越しで何かを叫んだが、下層のシェルターへと降りて行った、俺達はもう1つのシェルターへと向かって走り出したら、爆発で床が崩れて、俺は落ちていった

「のわ！！？」
「キョ、キョウさん！？」

キラガ手を伸ばしてくれたが間に合わず俺は落ちていった、・・・
暫く落ちていくと、出口へと着いたら巧く着地した
此処はアルトのあるドックだった

「フッ、行くか！」

俺は急いでアルトに乗り込み、急いでアルトを起動させた

「では行くか！！アルトアイゼン・リーゼ、キョウスケ・ナンブ出る！」

スラスターを吹かし地上を目指した

その名はガンダム（前書き）

キョウスケ視点以外は今回初

キョウサイド

俺はスラスターを吹かし地上に向かっている、Gがあると思ったら俺が完成させたオルゴンクラウドのおかげでGをまったく感じずに快適だ、天井に差し掛かったら、リボルビング・バンカーで、天井を貫いた、弾を打ち込もうとしたら打ち込む前に天井が完全粉砕した、リボルビング・バンカーは突進の勢いでは発生する運動エネルギーを利用し打ち込むというものであるが、このアルトにはGNドライブや時流エンジン、オルゴンクラウドを搭載した影響で推進力が異常なほど上昇し弾を撃ち込む必要がないほどの破壊力を実現したのだ、だが弱点しては推進力が上がった反面、パイロットに凄まじいGが掛かるのだ、その弱点を解消するために搭載したのがオルゴンクラウドなのだ、オルゴンクラウドの素晴らしいG緩和力によってパイロットはGをまったく感じる事がなく、安全に操縦が出来るのだ、それでも従来のアルトより更に扱いにくくピーキーとなった為、キョウスケの完全専用機となっている、俺が地上に出るとストライクがジンにタックルを食らわし、吹き飛ばし所だった、この場面では、キラがOSの欠陥に気づき書き換える所だろう、だが少し時間が掛かるだろう、俺が時間を稼ぐとするか、ストライクの足元近くにはにはトール達がいるしな、俺は全周波数通信を開き、キラに呼びかける

「そこのトリコロールのMS!!足元に民間人がいるだ、もっと機敏に動け!」

「そ、その声、キョ、キョウさんですか!?」

はやりキラか、もしかしたらマリューさんが出るかと思ったけどま

あいいや

「キラか！話は後だ！もっと早く動けるか！？」
「い、いえ！ＯＳが欠陥レベルで！」
「なら俺がジンの相手をする！キラは後方に下がってＯＳを書き換えろ！」
「っ！わ、分かりました！！」

俺の指示にキラは従い、後方に下がりＯＳを書き換え始めた

「さて行くか！ブースト！」

俺はペダルを一気に踏み込みジンに突進する、あまりの早さにジンは驚いたようで一瞬動きが鈍る、その隙に俺はバンカーで、頭部を破壊し斬艦刀を抜き放ち腕部と脚部を破壊しジンは倒れこむ、そして原作道理にミゲルが脱出しジンが自爆しマリューさんは気絶したという具合になった、そして今は公園に移動しストライクにランチャーストライカーを装備し終わったとこだ

キョウサイドアウト

キラサイド

キョウさんの提案でトール達を連れて今は公園にいる、キョウさんが乗っていたＭＳはストライクの横でひざを着いている、キョウさんの動きは慌しかった、ＭＳを降りた後、話しをしようと思ったら、どこかに走って行き、帰ってきたと思ったらトレーラーに乗ってきて帰ってきた、キョウさんに、何をしにいってきたんですか？と聞くと、少しだが食料と水を持ってきた、っと言ってきた、キョウさんの手によってサイ達に水とパンなどといったご飯が配られた、皆

はとても喜んでいた、次にキョウさんはガンダムに一緒に乗った人の近くに水とパンを置き、女性の持っていた銃を持ってベンチに座っていた、そしてキョウさんは銃弾を躊躇なく取り出し、ポケットに入れた、キョウさんは、ガンダムを近くで見ている、トールとカズィの元に向かった、僕がキョウさんに貰ったパンを口入れようとしたら女性が目覚めた

「うぅ…」
「気がつきました？」
「大丈夫ですか？」
「ええ、ありがとう」
「あの、すみませんでした…。なんか僕、無茶苦茶やっちゃって…」
「お水いります？」
「ええありがとう」

女性はキョウさんが持ってきた水をミリアリアから受け取って、口したが、近くでガンダムを見ていたトール達に気づいたのか、態度を変えた

「すげ～なぁ。ガンダムだっけ？」
「動かないのか？それにさっきはもっとカラフルだったのに」
「メインバッテリーが切れたんだって」
「おい、近くで見るだけにしておけよ」
「「は～い」」
「その機体から離れなさい！」

銃を取り出そうとするが、キョウさんが持ってるからな

「あ、あれ、無い！？」

「探し物はこれですか」
「か、返して、それ本物よ!!」
「知っている」

そういってキョウさんは銃を投げ渡す、それを受けたったら銃を構えるがキョウさんがポケットから弾を取りだしそれを見せ、銃弾を握り締め、手を開くと銃弾は粉々になっていた、これには僕達は驚かされた

「わ、私はマリュー・ラミアス、地球連合軍の将校です、貴方達をこのまま解散させるわけにはいきません、特に貴方には・・・ね」

うん、戸惑ってる、銃弾を手で握り潰されれば誰だって驚くと思うけどね、そしてキョウさんを見て、かなり警戒している

「どんな事情があろうと、貴方のような民間人がＺＡＦＴのジンを圧倒するような、ＭＳを持っているか、そして貴方は何者なのか話してもらうわ」
「話す事はない・・・」
「悪いけど話してもらうわ、どちらにしろ貴方も軍の最重要機密を見たのだから着いて来てもらうわ」
「断る・・・といったら?」
「・・・拘束します・・・」
「フフフ・・・俺を拘束できるとでも思っているのか?もし貴様の言う通りにしたとしてアルトを奪う気だろう、当たり前か・・・連合軍はコーディネーターを抹殺するためには中立であるオーブまでも巻き込んでＭＳの開発をするぐらいだからな」
「黙りなさい!!貴方に戦争の何がわかるの!!」
「では聞くが貴様にとっての戦争とは何だ?」
「え?」

自分にとっての戦争？

「戦争はどうすれば終わる？戦争にはスポーツやゲームのようなルールはない、敵を全て滅ぼすまでか？お互いを殺しあうだけの戦争に何の意味がある、復讐だとか、敵討ちだとかは理由にはならん、それはただ自分をごまかしているだけだ」

「じゃ、じゃあ、貴方はあの機体で何のために戦うの？」

「家族を・・・友を・・・大切なものを守るためだけに俺は戦う」

キョウさんの言葉には一つ一つ強い思いを感じる、キョウさんは守りたい人のために戦っているのか・・・僕は感動していると爆発が起き、一機のＭＳが侵入してきた、それを追うように、ＭＡも入ってきた

キラサイドアウト

キョウスケサイド

俺は入ってきたＭＳとＭＡを見ていた、ＺＧＭＦ－５１５シグー、ジンの後継機として開発されたＭＳである、ジンの高い汎用性を受け継ぎつつ、スラスターの増設、高出力化により宇宙空間での機動性、運動性が大幅に向上している、だが現在はそれほど量産されておらず、隊長が乗る隊長機とされている、ＴＳ－ＭＡ２ｍｏｄ．００，メビウス・ゼロ，地球連合軍が開発した宇宙戦用ＭＡ，Ｇ兵器開発以前の地球連合軍において、ザフトのＭＳと対等に渡り合うことができる数少ない兵器の１つであり、ガンバレルと呼ばれる４基の有線誘導式無人機を全方位に展開・制御することで、ＭＡの弱点である旋回性能の低さをカバーしている、だがガンバレルを扱うには突出した空間認識能力が不可欠であり、軍内ではその素質を有す

るパイロットの存在は希有だった、よって人的資源の確保の困難さからこの機体は少数生産に留まり、以後は一般兵士向けの量産機であるメビウスの生産に切り替えられた、現在搭乗しているのは、ムウ・ラフラガの一人である
だがガンバレルは全て潰されておりゼロも損傷を受けており、戦闘が満足に出来る状態とはいえない、そして最後の武器であったリニアガンも重斬刀で斬られてしまい戦闘不能となってしまった、やれやれ、もうムウさんはやられてか、しょうがないこのままだとこっちに気付くだろうし、俺が相手をするか、このままだとアグニ使う羽目になるし

「キラ！奴の相手は俺がする！お前はストライクでみんなを守れ！」
「は、はい！」

俺は既に起動させてあったアルトに乗り込みシグーに向かう、シグーはこちらに銃を撃ってくる

「アルトには効かん！クレイモア！」

アルトに搭載されているＰＳ装甲とオルゴンクラウドによって完全に弾は無効化されいるため意味がない、俺はクレイモアをシグーに向かって放つが、流石に全弾命中という訳にはいかなかったが、右腕と頭部に直撃し、シグーは撤退して行った、シグーが撤退して、降下していると、ヘリオポリスの山が、吹き飛び、そこから白亜の戦艦が現れた

「これから名を上げる大天使、アークエンジェルか・・・」

これからどうやってオーブに、財団に帰ろうか？

その名はガンダム（後書き）

アルトはオルゴンクラウドとＧＮドライブ、時流エンジンの、おかげで、ずっと滞空出来る様になっています

崩壊の大地　戦闘前（前書き）

作「さてさて今回は戦闘前と戦闘時に分けたいと思います、今回が初めての試みです」
キョウスケ「そうだな」
作「ニャ～ンか冷たいですな～」
キョウスケ「お前がそんな設定にしたんだよ」
作「う・・・それを言われると・・・」
キョウスケ「まあ俺は文句はないし、これから頼む」
作「おう！」
作、キョウスケ「では本文をお楽しみください！」

崩壊の大地　戦闘前

キョウスケサイド

「ラミアス大尉！」

俺とキラ達は、アークエンジェルに移動した、マリューが移動しろと言ったためアークエンジェルの右舷のハッチに、アルトとストライクを移動させた、そしたらナタルさんが銃を持った兵士を連れてやってきた

「ご無事でなによりでありました！」

「あなた達こそ、よくアークエンジェルを」

そして俺とキラガ機体から降りると、マードック軍曹が声を上げた

「おいおい、ガキじゃあねーかよ、あんなガキとあいつがあれに乗ってたって言うのかよ？」

「ラミアス大尉、これはいったい？それにこの子供達は？」

「見ての通り民間人よ」

「へえ、こいつは驚いた地球軍第７軌道艦隊所属、ムウ・ラ・フラガ大尉だ、以後よろしく頼む」

「私は地球軍第２宙域第５特務師団所属マリュー・ラミアス大尉です」

「同じく、ナタル・バジルール少尉であります」

「で、彼らは？」

ムウさんは自己紹介を終えると、俺達についてマリューさんに聞いた

「見ての通り民間人の少年達です、一人はなぜか工場区にいて私がGに乗せました、キラ＝ヤマトといいます」
「ふ～ん・・・で、あの赤いＭＳから降りてきたのは？」
「名前はまだ聞いていませんが、Ｇがジンと戦闘中に現れ、ジンを圧倒し、先の戦闘では、シグーを相手にものともせずに、シグーを圧倒し損傷を与え、撤退させました」
「ジ、ジンとシグーを圧倒した！？あの男が！？」
「へえ～～・・・」

ムウさんは話を聞き終えてこちらに歩いてきてキラと俺を見る

「な、なんです・・・？」
「君たち、コーディネーターだろ？」
「！！」
「・・・はい・・・」

キラが答えると周りの兵士がキラに向けて銃を構えるが俺はキラの前に出る

「ほう・・・連合軍は民間人に銃を向けるのが趣味か？」
「いや・・・そんな悪い趣味は持ってないよ・・・」

俺がそういうとムウさんが答える

「ではなぜ銃を向ける？ここは中立国オーブのコロニーヘリオポリス、ここにコーディネーターがいて何がおかしい？」
「まあ・・・確かに・・・銃をおろせ」

ムウがそう言うと兵士は銃をおろした

「ついでに俺はコーディネーターではない、ナチュナルだ」
「おいおい・・・ホントかよ・・・」
「嘘をついても意味はない」
「じゃあ、貴方は何者なの？」

マリューさんが、尋ねる

「俺の名は、キョウスケ・ナンブ、ただのナチュナルでナンブ財団の創始者だ」
「ナ、ナンブ財団ってあのオーブの大財団の！！？？」

ナンブ財団は名目上ではオーブに属している事になっているが、実際は完全にオーブから独立した存在であり、その凄まじい影響力は地球圏に存在する組織だけには至らずプラントにさえ、その影響力が及んでいると言われている財団である、プラントには農業関連の技術提供をしており、オーブでは、発電施設のシステムを提供している、唯一、連合をはじめ、軍事目的のやからには一切技術提供をしない財団である、平和的な利用以外では提供はしてくれない、その財団の創始者のポリシーが武力で来る敵は排除し、平和を愛するべしなのだ、今まで地球軍が圧力をかけたがそれを跳ね除ける力がある財団、その創始者はとても若く僅か１８で財団を設立し、ここまでのし上げたため、一部からは神と言われるほどその創始者の力が強大だと言われている、だが創始者は滅多のことでは顔を出さない、幻の存在とされている、その本人が、強大な力を持ったＭＳを操縦して自分達の目の前に居るというのが、信じられないのだろう、連合軍側からしたら不味いことである、これではますます、技術を提供してくれと言い難くなってしまった、そしてこの後俺はマリューさんについてきて、と言われてアルトには絶対に触れるな、忠告しつつプロテクトとをかける、そして俺はムウさん達に連れられて艦長室にむかった

「先ほどはすみませんでした」
「謝るのなら俺ではなくキラ達に言ってあげてくれ俺は気にしてない（だがこの事は財団に戻ったら審議する必要はあるな）」
「そう言って貰えると助かります、それで申し訳ないのですが、お願いがあるんです」
「お願い？」

なんか・・・やな予感が・・・

「実はこのアークエンジェルを月本部まで護衛してもらいたいのです」
「護衛？」

当たった・・・

「勿論報酬は、お支払います」
「・・・理由を聞いても？」
「この艦には現在機動兵器はストライクと、フラガ大尉の損傷したメビウス・ゼロしかありません、このままでは、月本部にたどり着くどころか脱出され出来ません」
「それで、ジンとあのクルーゼの乗ったシグーを圧倒したその腕を買って艦を守ってほしいんだ」
「つまり・・・この俺を傭兵として兵士として雇いたいと？」
「う～ん・・・言い方を変えればそうなっちゃうかな？」
「・・・・・いつもならこんなの即刻断るのだがな、この艦には世話になったキラ達が居る」
「え？じゃあ」

「引き受けるだが、連合のパイロットにはならんぞ、俺には守るべき家族と財団がある、それとアルトの整備は俺の確認をとり、俺の立会いのもとで行う事、そしてアルトに細工をした場合、俺はキラ達を連れ、アークエンジェルを破壊し、財団に向かう、そして、この護衛が終わり次第、俺はすぐさま財団に帰還する」

「わかりました、ではお願いします」
「出るのはいいんだが俺一人では限界がある」
「まさかGを投入しろというのか!?」
「そうと言ってないだろう、だが戦力は必要だとは思うが・・・」
「ストライクを実戦に投入というのか!?『G』は軍の最高機密だぞ!!」
「だがここで落とされれば元も子もないぞ?」
「確かに貴方の言ってる事は正しいはね、さすがにあなたの機体、アルト・・・だったかしら?あの機体の力は幾ら強大であっても一機だけじゃ限界はあるわね」
「ああ俺もそう思うぜ、相手はあのクルーゼが率いる隊だ、戦力は多いほうがいい、申し訳ないが俺ののゼロは使い物にならないしな」
「フラガ大尉!では大尉が乗られては・・・」
「おいおい無茶いうなよ!俺にあれが乗れるわけないだろ」
「え?」
「あのキラって坊主の書き換えたOSのデータ見てないのかよ、あんなの普通の人間が扱える代物じゃあないって」

確かにあのOSは人類最高のコーディネーターであるキラが作成したOSだ、普通のコーディネーターでも、扱えないかもな

「なら元に戻させて、とにかくあんな民間人の子供に!!」
「そんで鈍くさ出てって的になれっての?」

ナタルはついに何も言わなくなった

「それに先ほどの一件もある、頼むにしても無理だろう、キラも戦いたくないだろからな、極力、俺が力を尽くす、では俺はアルトのところに居る、何かあれば呼べ」

そういって俺は館長室を出て格納庫に向かった

キョウサイドアウト

キラサイド

「キョウさんどうなっちゃうんだろう・・・」

僕達が一番心配していることをミリアリアが口に出した

「戦闘になったらやっぱり出るのかな?」

「キョウさん大丈夫じゃない?キョウさんナンブ財団の人だし」

「カズイ!」

サイがカズィを咎める、僕だって心配だ、そりゃキョウさんがナンブ財団の創始者だって聞いたときは、凄い驚いたけど、そんなのは関係ない

「あれだけ強くても心配だよな・・・俺達の安全のために戦ってくれてんだよな・・・たぶん・・・それに相手が一機だけとは限らない訳だし・・・今までは一機だったけど数でこられたら・・・」

僕は頭が真っ白になってしまった、キョウさんの戦闘は2回見たけど、2回とも相手は1機だけだった、

キョウさんは敵を圧倒していたけど、もしも沢山の敵で取り囲まれたりしたら・・・・・・・・・そう思った瞬間、僕は酷い絶望感に似た物を感じた、僕はキョウさんに僕達のために死んでほしくない！

僕は走り出した、サイたちに止められそうになったが、振り切って僕は格納庫の向かった

崩壊の大地　戦闘前（後書き）

キョウスケ「なあやっぱり続くのか？」
作「ええ、まだ脱出してないので」
キョウスケ「そうか・・・道のりは長いな、・・・はあ・・・」
作「何かご不満でも？」
キョウスケ「いや、一回でいいから恋がしてみたいと急に思ってな／／／」
作「何だそんなことか、では準備しておきますから」
キョウスケ「では頼む／／／／／／」
作「まかしとけ！」
作、キョウスケ「では次回またお会いしましょう！」

崩壊の大地　戦闘時（前書き）

作「いよいよ戦闘ですな」
キョウスケ「ああ、そろそろ戦闘に入るなだから準備したいんだが・・」
作「大丈夫、作者クオリティでなんとかなるから」
キョウスケ「・・・まあこんな作者はほっといて本文に移行するぞ」
作「ひどいな～、まあ行きますか！」
作、キョウスケ「本文を楽しみください！」

崩壊の大地　戦闘時

キョウサイド

現在はアルトのコクピットで考え事をしている、これからの戦闘ではXナンバーを相手にしなければならない、
アルトの武装はビームライフル以外の武装は全て実体弾だ、破壊力絶大なリボルビング・バンカーも効かない可能性がある、どうした事か・・・ビー！！ビー！！警報音が鳴り響く・・・

「キョウスケ君！ＺＡＦＴが来たわ！」
「了解！アルトアイゼン・リーゼ！キョウスケ・ナンブ出る！」

俺は発進した・・・でもキョウスケ君って・・・俺一応２１なんだがな・・・まあそれはおいといて
クソ！やっぱり要塞攻略戦で使われるＤ装備だ、そんなの使われたらコロニーがどうなるかわかるはずだろ

「く！」

俺は斬艦刀を抜き放ちジンの腕部を斬る、だがジンは大型ミサイルを撃ってくる、それを一刀両断する

「我が斬艦刀に、断てぬものなし！」

ってやってる間にジンが向かってきた

「損傷した状態で勝てると思うな！」

俺は左腕の5連チェーンガンで残りの武装を破壊しジンを戦闘不能にした、次に特化銃粒子砲を持ったミゲル機に向かった、斬艦刀の柄でコクピットを殴った、そしたらジンの動きが動きが止まった、どうやらミゲルは気絶したようだ、俺はジンを担ぎアークエンジェルに向かった、

「マードック軍曹！手土産持って来たぞ」
「おお～！ジンじゃあね～か！」
「コクピットを思いっきり殴ったからパイロットは気絶してるだろう、では俺は行くぞ」

俺は再びジンに向かった、そうすると、

「キョウさん！」
「キラ！？なぜ！？」
「キョウさんだけ戦ってるのに僕だけ呑気に休んでられませんよ！！」
「・・・・・馬鹿が・・・・・・・キラ・・・」
「はい？」
「蹴散らすぞ！」
「は、はい！！」

俺とキラは連携攻撃を始めた、キラがビームブーメランで牽制し俺がバンカーで頭部を破壊し戻ってきたブーメランで、脚部を破壊しキラがシュベルトゲベールで腕部を破壊して、ジンを戦闘不能にした、

「やりましたね！キョウさん！」
「ああ、このまま・・・？」
「キョウさんどうしました？」

残りはイージスのみだが、コロニーの様子がおかしい・・・まずい！コロニーの内壁が壊れ始めた！

「キラ！急いでアークエンジェルの戻るぞ！」
「え？」
「キィィィィラァァァァーーー！」
「「え？？？」」

とつぜんイージスか突撃してきた

「邪魔だ～～～！！！」

俺はバンカー付きの手で思い切りイージスを殴りつけた、イージスはジンが入ってきた穴から宇宙へと吹っ飛んでいった

「何だったんだ？今の？」
「さあ・・・」
（キラ・・・アスランの事・・・忘れてないか・・・？）

そんな事を思っていたらヘリオポリスが壊れた

「「あ」」

コロニーが壊れて宇宙と隔てる壁がなくなり乱気流が発生し俺とキラは暗黒の虚無の宇宙に引きずりこまれた、だが俺は思う

「ギャグ過ぎじゃあね～か？今回？ついでに短くないか？今回？」
（メタ発言は控えてください、ｂｙ作者）

崩壊の大地　戦闘時（後書き）

キョウスケ「最後に言ったが何だこの回は？ギャグがあったぞ？アスランの扱いがおかしいしていうかアスラン１回しか出てないぞ、あんな扱いでいいのか？アスランファンが怒るぞ？」
作「いや～～申し訳有りません、すっかり忘れてました」
キョウスケ「・・・呆れて物も言えん」
作「まあそれは置いといて「置いとくな」次からはアルテミスをすっ飛ばして、ユニウスセブンに向かいます」
キョウスケ「理由を聞いても？」
作「いえね、アルテミスだとあの馬鹿指令がアルトを接収しようとか考えそうだかな、個人的に損なのは回避したいのですっ飛ばします」
キョウスケ「確かに・・・」
作「でしょ～？では後書きはここまで！」
作、キョウスケ「「では次回またお会いしましょう！」」

サイレント・ラン　神再び（前書き）

作「さてようやく舞台は宇宙ですよ」
キョウスケ「ヘリオポリスに居た時点で宇宙とはいえないのか？」
作「コロニーと宇宙は違うものと考えてますから」
キョウスケ「・・・まあいいが・・・」
作「そういえば恋の件ですが、オーブについてからという事になりますがいいですか？」
キョウスケ「ああかまわないが、財団に着いてからか・・・はあ・・・社員達に何かいわれそうな気がするが・・・ん？待てよ？おい、貴様まさか考えるのが面倒だから、オーブって事で、Ｍ１三人娘にする気ではなろうな！？」
作「たは♪ばれました？」
キョウスケ「やっぱりか・・・おいちゃんと考えろよ・・・」
作「さ、殺気出さないで！てかなんでバンカーが付いてんだよ！」
キョウスケ「俺（財団）の力を甘く見るな・・・いいかも・う・い・ち・ど・よ・く・か・ん・か・え・ろ、さもないと・・・打ち貫くぞ・・・」
作「は、はい！！！、精一杯考えさせていただきます！！！」
キョウスケ「よろしい、作者は考えているから今回は一人だな、では、本文をお楽しみください！」

サイレント・ラン　神再び

キョウスケサイド

ふう、乱気流に巻き込まれたときは気持ち悪くて仕方かなかったな、さて状況を整理しよう、クルーゼの奴のせいで、ヘリオポリスは崩壊、う～む、財団の支社がひとつ潰れてしまったな、社員が無事ならば問題はないが・・・・・それにしても回りはデブリだらけだな

「こちらアルト、アークエンジェル、応答願う」

ビィーガガガガ、しかも通信の調子が悪い、周りのデブリのせいか・・・さてどうするものか・・・キラを探すにしても、通信が使えない状況では無闇に動くわけには行かないしな～、う～～～～む・・・・・あれ？なんか眠気が・・・いかんいかん、寝るわけに・・・は・・・ＺＺＺＺＺ・・・・・・・

「起きて起きてください」

誰かの声がする・・・誰だ？聞き覚えのある声だ、この声は・・・・・目を覚ますとそこには俺を転生させてくれた神、オーディンがいた、てか、殺風景だなここ、見渡す限りの草原じゃん

「なんだオーディンか、久しぶりだな、３ヶ月振りだな」

「は、はい、お、お久しぶりです／／／／／／」

「顔を赤くするな」

なんで顔を赤くしているかというとオーディンはキョウスケに惚れているのです、詳しい事は第１話「神」を見てね

「で、何のようだ?」
「そ、それが・・・」
「ん?」
「神は私以外にも、下級神、上級神というのがいるのですが、その神達が、貴方を即刻神にして、け、結婚しろと・・・いうのです／／／

「落ち着いたか？」
「は、はい／／／」
「そうか、では急いで帰してくれ、結構長く居てしまった」
「あ、大丈夫です、貴方が寝てから１０分後に送りますから」
「では頼む」
「はい、ではまた／／／／／／／／／」
「ああ」

俺は再び眠りに着いた・・・・・・・・・・・・・・・・目が覚めるアルトのコクピットの中に居た、俺は手元の時計を確認する

「確かに１０分しか経っていない・・・お！通信の状態もよくなってるな」

サイレント・ラン　神再び（後書き）

作「いや～甘かったな～コーヒー飲んで正解でした」
キョウスケ「今回は一番短いな・・・それになんだこのマブコメ展開は」
作「いや～一回やってみたくて」
キョウスケ「恋なんかしたら、オーディンがなんかやろ層で、やな予感が・・・するような・・・」
作「大丈夫、オーディンには俺からも言っとくから」
キョウスケ「まあそれなら」
作「ではこの辺であとがきは終わりにしましょう」
作、キョウスケ「「ではまた次回お会いしましょう！」」

サイレント・ラン（前書き）

キョウスケ「いよいよXナンバーとの戦闘に入るわけか・・・」
作「不安ですか?アルト武装が効くかどうか」
キョウスケ「まあな、有効手段がライフルだけだからな、ぞれでも打ち貫いてみせる、これがな！」
作「おいおい、アホセルが混じってるぞ」
キョウスケ「おっとしまった、では気を取り直して・・・」
作、キョウスケ「「本文をお楽しみください！」」

サイレント・ラン

キョウサイド

オーディンの手によって帰ってきた俺はとりあえずアークエンジェルと連絡をとる事にした

「こちらアルト、アークエンジェル応答願う」
「こちらアークエンジェル、無事だったか、キョウスケ」

おお、ムウさんか、ナタルさんが出ると思ったけど

「ああ、だが気持ち悪くなった」
「ははは、それだけですめばいいほうだ」
「じゃあお前はどうだったんだ？」
「ん？俺か？俺はこんな経験した事ないからわからんな」
「そうか、では俺はキラに呼びかけてみる」
「ああ頼むよ、こっちはナスカ級を探す、にしてもナンブ財団の創始者様に働いてもらうとは少しが気が引けるね」

通信を切る、さてどうやってキラを探すか・・・救命ポッドを拾うはずだが、どこにいるのか・・・ピーピー、ん？
通信？

「こちらキョウスケ」
「あ！キョウさん！良かった無事だったんですね！？」

良かった、此方から探さなくて済んだ

「ああまあな、ところでなんで救命ポッドを持ってるんだ?」
「そ、それが、この救命ポッド推進部が壊れてるみたいなんです」
「なるほどな、だがバジルール少尉が認めるとは思えんが・・・」
「・・・」
「はあ～～さてどうしたもんか・・「ピーピー」・・・通信か、はい」
「あ、キョウスケ君?どうしたの?」

ナイスタイミングといっていいのか・・・・これを・・・・

「いや・・・実は・・・」
「?」

この後、キラの行動を話したら案の定ナタルが切れ、原作道理になった、因みに俺はフレイには会っていない、個人的にフレイはあまり好きではないからだ、今はブリッジでこれからの針路について話している

そのころのヴェサリウス・・・

ブリッジにはイザーク、ニコル、ディアッカ、アスランが呼び出されていた

「まあ見てくれたまえ」

クルーゼはモニターを起動し映像を映し出す、写っていたのはストライクとアルトであった、凄まじい加速でジンに接近し、ジンを戦闘不能し、ストライクは他のXナンバーとは違い動きがとてもいい、そして最後に見せられた映像はクルーゼのシグーが、一瞬のうちに

中破まで追い込まれたものだった

「あ、あ・・た、隊長・・・これは・・いったい・・・」

ニコルが声を震わせながら尋ねる

「先に取り逃がしたXナンバーの前に現れたアンノウンの映像だ、このアンノウンも逃すことは出来ない、、ジンを戦闘不能しこの私のシグーを中破させたのだからな」

「おいおい、マジかよ、隊長が、やられるって・・・」

「アスラン、君はどう思う?」

「この赤いアンノウンは明らかにXナンバーの性能を凌駕しています、ですが、我々が捕獲したXナンバーを見ると系統がちがいます、私もあの、アンノウンと接触しましたが、とてつもない力を持っていました、対処には十分注意が必要があると思います」↑(でもすぐにやられてたよね~~)

クルーゼ隊がそんな事やっている中・・・・

そしてアークエンジェルはアルテミスに行かずにメビウスセブンに向かうことになった、

ビービー!!!

「なんだ!!」

「艦長!敵襲です!」

「キョウスケ君!」

「おう!」

「キラ君にもお知らせして!」

俺は急いでアルトに向かった

サイレント・ラン（後書き）

今回は後書きの会話はなしとさせていただきます

対決！Xナンバー対アルト！（前書き）

キョウ「おい、今回はタイトルがオリジナルだな、今までは原作を使っていたが、それと台詞のとこがキョウになってるぞ」
作「原作どうりだとなんかこう物足りないって感じ？がするんですよ、後、キョウにしたのはキョウスケって打つのに時間がかかって書く時間が減ってしまうのでキョウにしました」
キョウ「なるほどな、そういうちゃんとした理由があるならいい」
作「ご理解いただき感謝です、では！前書きはこのぐらいにして、本文にいきましょう！」
作、キョウ「「では本文をお楽しみください！」」

対決！Xナンバー対アルト！

キョウサイド

俺はアルトのコクピットで発進の時を待っていた、俺は狂戦士ではないがＳＥＥＤを見ていた時からＸナンバーと殺り合ってみたかった、戦争だから殺りあってみたかっただ一応誤解を防ぐためだ、ピーピー、ん？通信？ストライクからか

「はい、こちらキョウスケ」

「あ！キョウさん！」

「キラ！？なんでまたそれに乗ってるだ！？」

キラの事だから断ると思ったが

「・・・僕はキョウさんみたいに強い信念はありませんでも僕はこの艦に乗っている友達を守りたいんです！」

「・・・・・それがどういう事が解かって言ってるだな？」

「・・・自分と相手の血を流すってことですよね、その覚悟は出来てます！」

「・・・ふっ好きにすればいい」

「有難う御座います！先に行きます！キラ＝ヤマト、ガンダム行きます！」

まったく子供が大人ぶりやがって・・・

「キョウさん！出撃お願いします！」

声がしたので、通信モニターを見ると制服を身にまとった、ミリア

リアがいた

「ミリィ！？どうした？」

「私がこれよりＭＳの管制通信を担当する事になりました、宜しくね！」

「ああ、ニュースみたいに速報で頼むぞ」

そう言ってる間にカタパルトの準備が出来たようだ

「進路クリアー発進どうぞ！」

「アルトアイゼン・リーゼ、キョウスケ・ナンブ出る！」

俺は暗黒の宇宙へと飛び出していった、真っ先に来たのはデュエルとイージスだ、アスランに怨まれるかな？前回ギャク漫画みたいにキラ～ンって飛んでったし

「お前か？アンノウンってのは！」

一応通信効くんだ

「さっさと来い」

そういうと2機はライフルを放ってくるがＩフィールドで完全に無効化する

「ビ、ビームが！」

「効かないだと～！」

アスランは驚き、イザークは怒りをあらわにしてサーベルで切りかかってくる

「イザーク！危険だぞ！」
「煩い！腰抜け！」
「なんだと～！」

アスランはイザークの挑発に乗りサーベルを出力し向かってくる

「でやぁ～～！！！」
「はぁあ～～～！！！」

二人が切りかかってくるが大振りすぎて軌道が丸わかりだ、俺は特に目立って吹かす事もなく避けていく、そしてとうとうやけくそになったのかイージスが突っ込んで来た

「よくも！キラを誑かしてくれたな！」
「？？？何の話だ？？？」

心当たりないぞ、キラは自分の意思でやってるだし

「とぼけるな！キラが戦場に出るはずはない！！！お前がキラを誑かしたんだ！！！！」

な、なんかアスラン性格変わってないか？俺が介入した影響か？違う意味で圧倒されるな

「あ～もう！ウザイ！黙れ！くたばれ！」

俺でも切れたぞ勝手に人のせいにしておいて好き勝手言いやがって・・・斬艦刀を抜き放ち、ブーストを掛ける

「は、速い！」
「遅い！！！」

俺はピンポイントでイージスの右腕の間接に突きを決めた、幾らＰＳ装甲と言っても細かい間接の部位まではカバーできていない、右腕は吹き飛び、ダメ押しに２機、アヴァランチクレイモアをお見舞いした、距離が近かった事もあり全弾命中し２機ＰＳ装甲が落ちた

「クッソ～！撤退する！これで終わると思うなよ！」
「くそ！覚えておけ！」

二人は見事までの三下台詞をはいて撤退していった

「キョウさん！」
「おっキラか、そっちは大丈夫だったか？」
「はい、フラガ大尉の援護もあってなんとか大丈夫です」
「そっか・・・ところでキラ、あのイージスのパイロットお前の事知ってるみたいだったが」
「イージスのパイロット？」
「ほら、あの赤いＸナンバー、俺がヘリオポリスで殴り飛ばした」
「ああ、アスランの事ですか？いいんですよ、別に、いい思い出がありませんから」
「え？（おいおい原作とだいぶ違うぞ！？）どうしただ？」
「アスランのおかげで服は破けるし、川に落ちるし、成績は下がりそうになったし、おまけにいっつも僕にしつこくベタベタしてくるしおかげでホモ扱いされる所でしたよ、だからトリィを受け取ってから距離を置いて、父さん達に頼んでヘリオポリスに来たんです、トリィも捨てようかなって思ったんですけどよく考えたらトリィには罪はないので、ボディを僕が１から作ってデータを移植したんです」

「そ、そうだったのか・・・キラ、今度誰か紹介しようか？」
「いえ・・・そのお気持ちだけでお腹いっぱいです・・・グスッ」

げ、原作とかけ離れてな、にして辛かったんだなキラ、俺が誰か紹介しようか？っていったら泣いちゃったもん、こりゃキラの精神状態のも気を使ってあげた方がいいな

俺は新たな決意を胸にアークエンジェルに戻っていった

対決！Xナンバー対アルト！（後書き）

キョウ「おいおいおいおい！！！こんなんでいいのか！！？？アスランファンを完全に敵に回したようなものだぞ！これは！？」
作「いや～でもね、アスランのこういう姿を見てみたいってご要望が出たものですから」
キョウ「いいのかな？？」
作「俺は読者様の意見を公平に取り入れる男だからな」
キョウ「では今回から、様々なご意見、ご要望をの募集をしたいと思うがいいか？」
作「いい、大歓迎！！！あそれとキョウスケの恋人役、メインヒロインも募集したいと思います」
キョウ「貴様・・・真面目に考えるといっておいて、結局は読者に頼る有様か・・・」
作「いえ、俺の勝手の考えよりも皆様の意見も取り入れればもっと話しに柔軟性が出ると思って」
キョウ「まあそういう事なら」
作「では！改めましてご要望がある方はどしどし感想に書いて送ってください、ヒロインについては限定はいたしません、マユでもアストレイ三人娘でもいいですしお好きなキャラにご投票ください、ある程度ご意見が集まりましたら、丸々１話を使って発表しようと思います」
キョウ「ではそろそろ終わりするか」
作「そうですね、では！」
作、キョウスケ「「では次回またお会いしましょう！」」

アンケート（前書き）

作「♪」
キョウ「？随分と嬉しそうだな」
作「え？そう？♪」
キョウ「ああそう見える」
作「だってさ、感想のページ見たら皆様からの意見が沢山届いていて嬉しいんだもん！！！」
キョウ「・・・少し煩い・・・だがそれは感謝だな、こんな駄作品に、感想や意見を送ってくれる優しい読者がいるんだな」
作「ええ！それが嬉しくいて嬉しくて！」
キョウ「ならさっさと続きを書け」
作「あっはい・・・」
キョウ「では本文を楽しんでくれ」

アンケート

「今回はアンケートについてお話したいと思います」

「随分と突然だな」

「いや～いっぱい感想貰って嬉しくなっちゃって、まあキョウも無関係ではないし」

「まあヒロイン募集だからな、どんな人が候補がいるんだ？」

「今候補となっているのはフレイ、マユ、ステラ、女神たるオーディン、マリューさん、さらにはファントムペインのミューディー、M1三人娘ですね」

「結構いるな、今、結構人気を集めているのは誰なんだ？」

「やっぱり気になります？」

「まあな」

「多いのは、フレイに、マユ、マリューさんオーディン、M1三人娘達ですな」

「マユが出てきたか、マリューさんがくるとはな」

「これからが楽しみですな」

「ああ、皆様のご意見をお待ちしています」

墓標へ（前書き）

作「さてさてどんどんアンケートが集まっております」
キョウ「質問も来ているぞ、一人何票までかというのも来ているぞ」
作「一人3票までです」
キョウ「多いな」
作「候補が多いからこのぐらいにしないと」
キョウ「最近ではステラの人気も急上昇している、ますます激しくなりそうだな」
作「あははは、面白くなりそうだ」
キョウ「・・・オーディンに頼んでこいつをアインストに渡してもらうかな?ではそろそろ前書きは終わりだ、では本文をお楽しみください」

墓標へ

キョウサイド

今俺達はユニウスセブンに来ている、あの後キラに同情している間に到着し作業にしている、氷を砕き、運ぶ、それを繰り返す、退屈な仕事だ、さて、使えそうな弾薬はっと、ん?あれは民間船?だがボロボロだ撃沈されたのかこれ?ビィー!ビィー!ん!なんだ!俺は近くのデブリに身を隠した、民間船に近づいていたのは、ジン長距離強行偵察複座型のジンだ

ＺＧＭＦ－ＬＲＲ７０４Ｂジン長距離強行偵察複座型　ジンの肩と背中に二つのレドームを装備し、偵察、及び索敵能力を強化した機体、ジンをベースにセンサー機器を増設し、索敵能力が大幅に向上しており、航続距離を延ばす改造も加えられている。単機での長距離航行も可能になっている、索敵、偵察の精度を上げるためにコックピットは複座型に改修されており、メインパイロットの他に情報収集要員としてサブパイロットが搭乗する構造になっている

やはりラクスを探している、!まずい!カズィの乗っているポットに気付いた!仕留めるしかない!ペダルを踏み込みブーストを掛ける、ジンはこちらに向きを変えようとするが遅い!俺はバンカーでコクピットを貫いた、そしてジンは爆発した、っく・・・・殺すしかないのか?・・・キラはポッドを回収したか・・・俺も見に行くか、着艦すると既にギャラリーがそろっていた

「全くつくづく君は落し物を拾うのが好きなようだな」

「それだけ、坊主が優しいって事さ」

「じゃあ開けますぜ」

マードックが端末を操作しポットを開けたら

「ハローハロー！ハローラクス！ハロー！」
いきなり脱力系の声が・・・分かっちゃいたけど気が抜けるぜ
「ありがとう。御苦労様です」
その後に出てきたのは長い桃色の髪をした女性、ラクス・クラインだふわふわと回ってしまったので原作どうりにキラが手を掴み止める、ラクスは礼をザフトの船ではないとわかると声を上げた、そして俺のほうを向いて驚いた
「あらぁ？もしかして、キョウスケ様ですか？」
「はいそうですよラクス嬢、相変わらずお元気そうで、提供したプログラムは役に立ってますか？」
「はい、それはもう！父も喜んでいました、農業が盛んになって」
「それはよかった」
「と、とりあえず詳しいお話をしたいので此方へ」
「あ、はい、ではキョウスケ様また・・・」
ラクスは艦長達に連れて格納庫から出て行く、やれやれ、周りの連中は後を追いかけて行っちまった、ナタルさんに起こられて知らんぞ、俺はアルトのシステムの点検をしたら、格納庫から出た、歩いていると、艦長が話しかけてきた
「キョウスケ君、あなた彼女と面識があるの？」
「ああ、以前プラントで農業で問題があったときにシーゲル・クラインが俺の所に相談に来て俺は農業の技術提供をしたまでだ、その時に彼女も居た」
「なるほど」

俺は艦長と別れ、ラクスの部屋に向かった

「あ、キョウスケ様」

「ハロー！」

「はいこんにちわ、それにしてもなんでユニウスセブンに？」

「私は追悼慰霊のためにきたのですが地球軍に出会ってしまい私はそのままポットに乗せられましたが・・・」

「そうだったんですか・・・」

「ええ、では私からもキョウスケ様はなぜ地球軍の戦艦に？」

「まあ、話すと長いですが、・・・」

俺はラクスに経緯を説明した

「まあ大変でしたね、後キョウスケ様、少しお願いを聞いてもらってもいいですか？」

「ええ」

「実は私、お腹が減ってしまったのです」

「ああ、そういう事でしたか、では一緒に行きますか？」

「はい！」

問題になるかもしれないが俺はラクスを連れて食堂に向かった

「絶対嫌！！」

食堂に向かっていると食堂からフレイの声が聞こえる、揉めてるな、ラクスを食堂の少し前で待ってもらい俺は食堂に入った

「何がどうしたんだ？」

カズィに聞いてみる

「あっキョウさん実は、キョウさんの食事をフレイに持っていってほしいっていったら言い合いになっちゃって」
「何故に？」
「絶対嫌！コーディネイターのところに行くなんて！！」
「だからキョウさんはコーディネーターじゃないって！」
「・・・なるほどな・・・」
「フレイ！」

サイがフレイを止める

「サイ！」
「キョウさんにしつれいだぞ！キョウさんはナチュラルで俺達の恩人なんだぞ！」
「でもＭＳ動かせるだから・・・」
「やれやれ、耳が痛いな、俺も随分嫌われたもんだ」
「キョ、キョウさん！！！フレイ！」
「な、何であんたがここに来てんのよ！？」
「なんでってここ食堂だぞ、食事を取りにきたんだ、それと俺はナチュナルだ、ムウに聞いてみるといい、俺の血を渡して鑑定に出してある」
「ハロー」
「まあピンクちゃん」

ラクスがハロを追って食堂に来てしまった

「ラクス・・・待っていていったじゃないですか」
「すみません、ピンクちゃんが飛び出してしまって」

その後原作どうりにフレイがコーディネイターの癖になれなれしくするなといった、俺は流石に頭にきた

「いい加減にしろ!!!」

俺は大声を出した

「さっきから黙って聞いていればコーディネイター、コーディネイターって人の事を獣みたいに言いやがって、お前は、ブルーコスモスのアホ共と同じか!!」

「私はブルーコスモスなんかじゃ・・・」

「どう違う!コーディネイターだから?ナチュラルだから?遺伝子を弄っただけで差別をするな!!!それにお前の言葉はキラに対して言っている事と同じ事だ!」

「べ、別に私はキラの事を言ったわけじゃ・・・」

「同じだ!言葉の意味を知らず生半可気持ちで話すな!」

フレイは涙を浮かべながら食堂から走り去った、俺はトレイを二つ持ってラクスをつれて食堂を出る

「キョウさん、僕も一緒にいいですか?」

「ああ」

「あの、キョウさん僕は気にしてませんので・・・」

「そういう問題じゃない、命の恩人であるキラにあんな事を言ったからだ」

俺は二人を連れてラクスの部屋に向かった

墓標へ（後書き）

作「う～ん、こんな感じでよかったかな」
キョウ「俺はまたファンを敵に回した気分だ」
作「いちいち気にしてたらやっていけないぞ？キョウは少し気分が沈んでいるから今回はここまでです、引き続きヒロインは募集中です、では次回またお会いしましょう！」

先遣隊を守れ！キョウスケついにＳＥＥＤ覚醒？戦闘前（前書き）

キョウ「にして毎回投稿するのが早いな」
作「俺なんかまだまだ、一日で１０話ぐらい投稿する人だって居るし」
キョウ「それは凄いな、だが俺はこの駄作品が１７１件というお気に入りを果たしている事が驚きだ」
作「マジで！！」
キョウ「・・・気づけよこの駄作者が・・・」
作「面目ね～それはそうと、聞いて驚け！この作品『機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　古しえの鉄の巨人に乗る介入者』に沢山の感想やアンケートのおかげで、そろそろヒロインが決まりそうです！」
キョウ「ではだいぶご意見が着ているということとか、皆様のご好意有難う御座います」
作「ですがまだ決定という訳ではありませんのでどしどしご応募お願いします」
キョウ「だが本来お前が考えるはずの物を読者に任せるというのはな」
作「すみません、自分の考えでは限界がありまして・・・」
キョウ「こんな駄作者のために色々なご意見ご要望寄せていただき感謝し切れません、今後も機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　古しえの鉄の巨人に乗る介入者を宜しくお願いしますでは後書きここらで終わりにして」
作「では、せ～の」
作、キョウ「「本文をお楽しみください！」」

先遣隊を守れ！キョウスケついにＳＥＥＤ覚醒？戦闘前

キョウサイド

今はラクスの部屋に俺、キラ、ラクスが居る

「申し訳ありませんでした、私が私がココを出たしまったばっかりに・・・」

「いえ、お誘いした俺に責任がありますラクス嬢はお気になさらずに・・・」

「ですが」

「あの、僕は本当に大丈夫ですから・・・」

「キラ・・・」

「でも有難う御座います」

「え？」

キラはなぜお礼を言われた分からないらしい

「私を心配して付き添ってくれたんのでしょ？親切にしてくれて有難う御座います」

「ぼ、僕もコーディネーターですから」

「そう、でも優しいのはあなた自身だからでしょ？お名前を教えてもらってもよろしいですか？」

「キ、キラです、キラ＝ヤマト」

「有難う御座いますキラ様」

ラクスも嬉しそうだ、友達が出来て、キラも顔が綻んできた

「キラ、お前さえ良ければちょくちょくラクス嬢の所にきて相手を

してやってくれないか？」
「いいですけど」
「まぁ♪有難う御座います」
「あ、い、いえ／／／」

ふふふ、キラも同じコーディネーターの友達が出来て嬉しいみたいだな、俺とラクス、キラは一緒に食事を取り部屋を出た、キラはトレイを食堂に返しに行き、俺は暇なので格納庫でアルトのシステムチェックをしようと格納庫に向かった
その時

「総員第一戦闘配備！繰り返す！総員第一戦闘配備！」

そうか次は先遣隊か！やべ！急ごう！俺がダッシュしているとフレイに止められた

「お願い！先遣隊にはパパが乗ってるの！さっきの事は謝るからパパを助けて！！」
「・・・俺に謝るのは間違いだ、謝るならキラとラクスに謝ってくれ、手は尽くす」

俺は格納庫に向けて再び走り出した、俺はアルトに乗り込みカタパルトの準備が終わるのを待った

「キョウさん敵はジンが４機、イージス、ナスカ級が確認されています気をつけてください」
「了解」
「進路クリアー発進どうぞ！」
「アルトアイゼン・リーゼ、キョウスケ・ナンブ出る！」

俺はカタパルトでついた勢いに乗りブーストを掛けた、さ～て、先遣隊救ってみますか！

先遣隊を守れ！キョウスケついにＳＥＥＤ覚醒？戦闘前（後書き）

キョウ「今回は分けるのか？」
作「ええ、時間の関係もあって」
キョウ「まあ無理はするなよ？」
作「ええ、わかってますって引き続きヒロインは募集中です、ではせ～の」
作、キョウ「「では次回またお会いしましょう！」」

アンケート　1次発表

作「機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　古しえの鉄の巨人に乗る介入者！
1次アンケート発表！」

キョウ「急に大声を出すな、駄作者が」

作「１１部も書いてるのにまだ駄作者扱い！？」

キョウ「貴様など一生駄作者で十分だ」

作「しょんな～ひどい、まあ落ち込んでる場合じゃない
今回１話をこのような場にしたのは皆様から沢山のヒロイン募集に
協力頂いたおかげでヒロインの候補が出来たからです
今現在の順位はこうなっております」

１位　ステラ　マユ　Ｍ１三人娘

２位　フレイ　オーディン

３位　ルナマリア

４位　メイリン

５位　マリュー

６位　ラクス

７位　ナタル

8位　ミューディー

キョウ「なんだかデス種が人気だな、そしてオーディィンがはやり来たな」

作「ええ、まさかこんなに接戦になるとは思いもしませんでした」

キョウ「それだけ好みや好きなキャラが違うということだ」

作「まあそうですけど、なんか修羅場になりそうですな」

キョウ「そしてM1三人娘こと、アサギ、マユラ、ジュリが1位とはな」

作「ええこんな順位になるとは、M1三人娘は順位が下だと思ったら1位ですからね」

キョウ「俺の恋人役にこれまで要望が来るとは思いもしなかった」

作「まあかなり見てくれてる人たち居ますからね、感謝しないと」

キョウ「ああ、改めてお礼を言わせて貰います有難う御座います」

作「さて今回はこれまで！これからどんな風に順位が変化するのか楽しみですね」

キョウ「皆様の応募、お待ちしています」

作「では今回はこれまで！」

作、キョウスケ「「では次回またお会いしましょう！」」

アンケート　1次発表（後書き）

すみません、ラクスとナタルさん忘れてました

先遣隊を守れ！キョウスケついにＳＥＥＤ覚醒？戦闘時（前書き）

作「え～今回も会話をしたかったんですが現在キョウスケは戦闘が行われている地点に急行しているため今回は以上とさせていただきます
本文をお楽しみください！」

先遣隊を守れ！キョウスケついにＳＥＥＤ覚醒？戦闘時

キョウサイド

戦闘中に悠長に喋っていて良いかと疑問に思うがそんな事は気にしない
今しがた戦闘中宙域に突入した所だ、やはりメビウスではジンには太刀打ちできずに落ちていく
・・・これが戦争だ・・・行くしかない！俺はライフルを構え正確にジンのコクピットを貫いていく
それに気付いた3機ジンが重斬刀を抜き放ちこちらに向かってくる
馬鹿こいつらは？なぜ一人ぐらい射撃で援護しないんだ？

「このアマチュア共が～！」

斬艦刀を抜き突撃するジンは馬鹿のように剣を振り回しているだけ
駄々をこねる子供にしか見えない呆れるばかりである
そんなのが当たるはずもなく俺は斬艦刀ごと機体を回転させジンを細切れにした

「我が斬艦刀に断てぬものなし！」
「き～さぁ～まぁ～！」

細切れにしたジンの残骸からイージスが出てきた

「！？どっからでた！？」
「黙れ！キラを惑わす悪魔が～！」

イージスはサーベルで切りかかってくるが斬艦刀にオルゴンクラウ

ドを纏わせて応戦する

「何で実剣でサーベルと斬りあえるんだ!?」
「クッ!邪魔をするな~!!」
「キョウさん!!」
「「!?」」

切りあっているとキラが応援に来てくれた

「キラ!?馬鹿来るな!アスランが居る!」
「え!?」
「キィィィラァァァーーー!!!」

アスランは俺を無視してストライクに向かおうとする

「行かせるか!」

イージスの足を掴み止める

「クッ!離せ!」
「お前の相手は俺だ!キラ!今のうちに先遣隊の所へ!」
「わかりました!」

キラはバーニアを吹かし先遣隊の援護に向かった

「キラ!待ってくれこんな奴の言葉なんて聴くな!」
「煩い!キョウさん!ご無事で!」
「心配するな!」
「貴様ぁ~~!よくもよくもキラをぉお~~~!!!」

イージスはサーベルを出力して突撃してくる

「何だお前さっきから！お前は何だ！？ホモか！？」

「うるさい！お前を倒してキラを！キラを～！！！」

まちがいない！こいつホモだ！まずい俺が介入した影響がこんな所にも・・・キラもアスラン嫌ってたし俺もイラついたし・・・行くか！俺はＳＥＥＤを発動した・・・これがＳＥＥＤ・・・一気に頭がクリアになる・・・機体の傷まで見えそうだ・・・

「俺もジョーカーを切らせてもらう・・・！」

俺はチェーンガンで牽制しプラズマホーンで右腕を切断する

「なっ！？」

イージスはリボルビング・バンカーをシールドで防御しようとするが、バンカーはシールドを貫き左腕に直撃した、そのまま４発ほど打ち込み左腕を破壊する、バンカーは有効のようだ、そしてバンカーを引き抜きアヴァランチクレイモアもハッチを開放しクレイモアをお見舞いする

「ぐわぁぁぁ～～！！！」

「おれの・・・勝ちだ・・・！」

イージスのフェイズシフトは落ち、ボロボロの状態になり、最後一機であったジンがイージスを回収して撤退していく

「どうやらこの賭け・・・俺達の勝ちだ・・・！」

「キョウさん！無事でよかった！」

おお！ストライクも先遣隊も無事だ

「あ、そうだキラ、フレイの親父さんは無事だったか？」

「さあ、それはわかりませんが大丈夫でしょたぶん・・・」

俺はイージスの両腕を手土産にしてアークエンジェルに戻った

先遣隊を守れ！キョウスケついにＳＥＥＤ覚醒？戦闘時（後書き）

今回の会話はなしとさせていただきます

アスランの変貌（前書き）

キョウ「今回はいつもより時間がかかってたな」
作「ええまあどんな風にお話を持っていこうかな～考えてました」
キョウ「珍しいなお前は直ぐに思いつくことが取り柄ではなかったのか？」
作「いえ、なんか地球の事考えるとなんか思いつきすぎて、後宿題やらテスト勉強もありますから」
キョウ「ではだいぶ方向性が見えたのか？」
作「ええ今回はラクスを正式に返還します」
キョウ「うむ、ラクスに俺の事を話さないように言っておかなければ」
作「ええお願いします、では！前書きはこのぐらいにして、本文にいきましょう！」
作、キョウ「「では本文をお楽しみください！」」

アスランの変貌

キョウサイド

俺がアスランをボッコボッコにした後
イージスの両腕を手土産にしてアークエンジェルに帰還した
マードックさんに渡したら感謝された
にしてもアスランがあんなキャラになっているとはな・・・
俺が介入した影響と考えたほうがいいな

俺がアルトから降りたらキラが走って来た

「キョウさん！フレイのお父さんは少し怪我をしたみたいですが無事でした！キョウさんに感謝してました！」
「そうか・・・」

これでキラがフレイに利用される心配がなくなった

「でも、補充要員を乗せた船は沈んだのでまだ働いてほしいそうです」
「やっぱりか・・・後キラ、ひとつ考えがあるんだが」
「なんですか？」
「ラクス・クラインを返還する」

・・・

「なに！ラクス・クラインを返還するだと！？」

キラに話した後俺は艦長達に話している

今声を上げたのはナタルさんだ

「でもどうして？」

「あのまま彼女を乗せていても意味はないし彼女は追悼慰霊のためユニウスセブンに来ていました、当然プラントでは捜索隊も出ているだろう」

「確かに彼女はプラント最高評議会の議長シーゲル・クラインの娘だからな」

「それはクルーゼ隊にも出ているはず、奴らは俺達の針路を想定して動いている
デブリ帯を通ったと考えるはずだ、だからラクスがこの艦にいると考えられる」

「クルーゼなら考えそうだ」

「なら戦闘になったら彼女が居ると言えばいいではないか」

「だがラクスが議長の娘であるとしてもこの艦とストライクを見逃すとは思えない」

「そ、それは」

艦長は言葉を詰まらせる

「考えてたくはないが彼女ごと殺りかねんな」

「だから返還するのさ、返還すれば彼女を乗せたまま戦闘はできない彼女を送り届ける必要がある、一時的ではあるが敵の戦力を減らす事ができる」

「そいつはいいね」

「・・・たしかに此方としてもメリットが多いわね・・・いいわ許可します」

「有難う」

俺は艦長室を出てラクスの部屋に向かった

ラクスに事情を話し俺の事を話さないようにと釘を刺し
彼女にパイロットスーツを着てもらい（一人でね、変な想像はＮＧです　ｂｙ作者）
格納庫に向かっていると既にキラがスタンバっていた

「キラ、ラクスをそっちに乗せてもらっていいか？アルトだと狭いだろうから」
「わかりました、ではラクスこっちに」
「ハイ♪」
「ハロ～ゲンキ～♪」

キラはラクスを連れてストライクに向かった
俺もアルトの向かいアルトを起動させる
俺はストライクとの通信回線を開く

「キラ誰を呼ぶ？」
「そうですね・・・無難に隊長じゃないですか？」
「やっぱそうだよな」
「あ、あとアスランも」
「何故に？」
「アスランは確かお父さんが国防委員長やってる筈ですから、来てほしくないですけど・・・」
「なるほどな・・・よし！それで行こう！よし発進するぞ！」
「ハイ！」
「アルトアイゼン・リーゼ、キョウスケ・ナンブ出る！」
「キラ＝ヤマト、ストライク行きます！」

今回は流石にラクスがいるので機体を走らせ発進した
そしてキラは全周波数通信を開き、ナスカ級に呼びかける

「こちら地球連合軍、アークエンジェル所属のモビルスーツ、ストライク！
ラクス・クラインを同行、引き渡す！この場合ナスカ級はエンジンを完全停止、ラウ・ル・クルーゼとアスラン・ザラの2名のみで来るのが条件だ！条件が破られた場合彼女の命は保障しない」

キラの通信が終わった

「ふう～・・・」
「お疲れ」
「こういうのあまりやりたくないですよ～」
「おっと、アスランの奴とクルーゼがきたぜ」

レーダーに反応、アスラン達が来たか・・・あれ？
イージスの両腕がジンになってる
ああそうか、俺が持ち帰っちゃたからな

「アスラン・ザラ、ラウ・ル・クルーゼだな」
「そうだ、彼女を迎えに来た」
「ではシグーのコクピットを開け」

シグーのコクピットが言葉どうりに開いた
今回は流石にスーツを着てるんだなクルーゼ

「ではラクス行って下さい」
「ではキラ様有難う御座いました、キョウ様にも宜しくお伝えください」

ラクスはシグーのコクピットの入りコクピットがしまった
するとアスランが・・・

「キラ！お前も来い！コーディネーターであるお前が地球軍にいる理由が何処にある！！」
「煩い！黙れ！アスラン！僕は君のそばなんかには居たくない！あの船には友達が乗ってるだ！誰が君の所なんか行くか！」
お～ここに来てキラがアスランに切れたな
「キ、キィラァ～～」
アスランは打ちのめされた感じだな
「やっぱりお前がキラを唆していたのか～！！」
「はあ！？」
アスランは自分を正当化させるためか俺に突っ込んできた
「何だよお前は！キラ依存症か貴様は！？勝手に自分を正当化させてんじゃね～ぞ！」
「俺のキラの近くから消えろ～！！！」
「「「「！？」」」」
おい、まてよコイツ今軽く問題発言したぞ・・・
俺が斬艦刀で牽制しながら話してみる
・・
「おいちょっとまて、お前今『俺のキラ』って・・・お前まさかホモか！？」
「だからどうした！！」
「「「「！！」」」」

認めちゃったこの人・・・
うわぁ～・・・キラ・・・心中お察しします・・・

「ア、アスラン君ってそんな最悪な人間だったんだ・・・」
「こ、こんな人が私の婚約者なんて・・・絶対に嫌ですわ・・・」
「ラクス嬢胸中お察しいたします・・・私の隊にこんな異常な奴がいたなんて・・・・・」

因みにこの通信はアークエンジェル、ヴェサリウスに聞こえております

「・・・キョウさん・・・」
「なんだ・・・？」

俺はイージスの攻撃を避けながら答える

「お願いです、アスランを討ってください・・・もう僕はアスランから解放されたいです・・・」
「・・・・・分かった・・・キラ、お前にはいい相手が絶対に見つかるから安心しろ」

俺はイージス（ジンの腕付き）に向かいチェーンガンを乱射するイージスは上に回避行動をとるがブーストをかけ上に先回りする上からクレイモアを浴びせる

「ぐぉ～～！！」
「これで・・・終わりだ・・・！！」

リボルビング・バンカーを胸部で攻撃し弾を撃ち込む

「これで終わりだ！全弾持って行け！」

胸部部分に全弾を打ち込みイージスが爆発する
俺は弾薬を捨てとカートリッジを交換する
それでも一応コクピットは残っていた・・・なぜに？
シグーは完全にスクラップになったイージスを抱えて撤退していった

こうしてアスランは生きているか分からないが
とりあえずキラはとてもすっきりした様子だった

アスランの変貌（後書き）

キョウ「・・・」
作「・・・」
キョウ「・・・こんなでいいのか・・・あそこまでやったのは俺だが・・・」
作「さあ・・・」
キョウ「今回俺は初めてアスランファンの読者に対して恐怖感がするぞ・・・」
作「・・・俺もだ・・・」
キョウ「では今回はとりあえずここまでだ・・・」
作「・・・ああ・・・気が重いが・・・そろそろヒロインを発表するので投票する人はお早めに・・・」
キョウ「話題変換はあまり意味をなさいと思うが・・・」
作「そう言うな、では今回の後書きはここまで・・・」
作、キョウ「「・・・では次回またお会いしましょう・・・」」

キョウスケの苦戦？　赤い戦神対バスター（前書き）

キョウ「・・・？」
キョウ「おい駄作者?何処にいる?返事をしろ」
・・・・・・・
キョウ「何処にいるんだ・・・ん?この紙は?駄作者からかえ～となになに
作「アンケート集計中のため今回は一人でよろしく、じゃあキョウ君♪がんばってねぇ～ん♪ｂｙ作者」・・・キモイ、うざい、消えろなぜアクセルネタを使う?・・・エリアル・クレイモアでＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩでもするか、では本文をお楽しみください
その間に打ち貫いてきますので、後まだアンケートは募集していますので」

キョウスケの苦戦？　赤い戦神対バスター

キョウサイド

アークエンジェルに帰還してキラに待っていたのは同情の嵐と激励の嵐だった
キラはみんなの優しさを再認識したようで嬉しさのあまり泣いた
まあ友達がホモダチだったらな～まあキラはホモではないが
キラはそんなみんなのおかげか何とか立ち直りストライクの整備を手伝っている
俺がアスランを完膚なきまでにボッコボコにしたのから清々したのだろう
それでも過去のアスランとの記憶はトラウマ化して忘却の海の奥底に沈めるとか言ってた
あれで死んだならいいのだが・・・
今度オーディンに聞いてみるか

（呼びました？）
「！？頭の中に声が！？」
（これは念話です、テレパシーみたいなものです）
（なるほどそうだ効きたい事があるんだが）
（ハイなんですか！新居なら今すぐにでも作りますけど！！）

詳しい事１話と６話を見てね！ｂｙ作者

（・・・・・落ち着け何を想像している？俺が聞きたいのはアスランのホモ野郎がまだ生きているかだ）
（あ・・・そういう事ですか、え～と残念ながら生きてます、ほぼ全身に傷できてますけど）

（そうか・・・今度こそ打ち貫いてみせる・・・！助かったありがとうオーディン）

（！！！い、いえ／／／／わ、私は貴方に喜んでいただけるだけでそのぉ／／／嬉しいのです／／／／／／で、ではさようならぁ～！）

ブツッ

念話の切れる音

だが知らせるべきか・・・この事を・・・いやキラはようやく立ち直ったのに突き落とすのはまずい

それに何で知ってるの？っって話になったら説明の仕様がないからな

「総員第一戦闘配備！繰り返す！総員第一戦闘配備！」

アルトのコクピットで考え事してて良かった

「進路クリアー発進どうぞ！」

「アルトアイゼン・リーゼ、キョウスケ・ナンブ出る！」

アークエンジェルから発進し敵に向かう

やはりＸナンバーだ

「毎度毎度しつこい！」

「俺はストライクをやる！ニコル！足つきは任せるぞ！」

「了解！」

「ってことは俺は赤いのか」

Ｘナンバーは散開しブリッツはアークエンジェルに

デュエルはストライクに

バスターは俺に向かってきた

「俺が相手してやるぜ～！」
「随分と余裕だな」

バスターはミサイルを撃ちながら距離をとり
片手に持った９４ｍｍ高エネルギー収束火線ライフルで遠距離射撃をしてくる
俺はミサイルをチェーンガンで落としビームをオルゴンクラウドを纏わせた斬艦刀で切り払う
次に超高インパルス長射程狙撃ライフルを撃ってきた

「嫌感じに距離を潰してくる」
「その機体は近、中距離に特化した機体みたいだな、だがこのバスター遠距離からの支援砲撃目的だぜ？
お前の機体とは相性がいいのさ」

ついに俺は頭部へのミサイル直撃を許してしまった

「ぐぅ！」
「グレイト！」

バスターは追い討ちをかけるようにガンランチャーを前に収束火線ライフルを後に連結させ対装甲散弾砲を放ってくる

３５０ｍｍガンランチャー
右腰アームに接続される電磁レールガン
散弾による複数目標への攻撃など『面』の破壊に特化された武装
通常の質量弾頭の他にも、ＡＰ弾（徹甲弾）やＨＥＳＨ弾（粘着榴弾）などの各種特殊弾頭も射出可能

９４ｍｍ高エネルギー収束火線ライフル

左腰アームに接続される大型ビームライフル
他の前期ＧＡＴ－Ｘシリーズに比べ大口径、高出力を誇り、当時の戦艦の主砲をも上回る火力を持つ

２２０ｍｍ径６連装ミサイルポッド

両肩に装備されるミサイルポッド
本機の白兵戦能力の低さをカバーするために搭載された武装で攻撃兵器としては充分な火力を持つものの
基本的に弾幕形成による敵の幻惑・撹乱や、ミサイル迎撃等近接防御に使用される事が多い
煙幕や放電ガス弾など搭載ミサイルによって多彩な用途がある

対装甲散弾砲

ガンランチャーを前に、収束火線ライフルを後に連結した広域制圧モード

超高インパルス長射程狙撃ライフル

収束火線ライフルを前に、ガンランチャーを後に連結した高威力・精密狙撃モード

流石に対装甲散弾砲を避ける事は出来ずに食らってしまった
幾ら重装甲のアルトでも防ぎきれず大きく吹き飛ばされる

「ぐわぁ～！！」

「グゥレィトォ！！」

バスターはさらにミサイルを放ち自分ガンランチャーで打ち落とした

「な！？」

バスターは爆煙を使い姿を隠した
さらに爆煙から超高インパルス長射程狙撃ライフルが飛んできた

「舐めたまねを・・・！ブースト！」

俺は一気にブーストを掛けビームをすれすれで避けバスターに一気に接近する

「なに！？」
「撃ち込む！」

収束火線ライフルに撃ち込む
ライフルを使用不能にしてコクピットに膝蹴りを決め
斬艦刀を引き抜き斬艦刀を両刃にする

「なに！？剣が！？」
「チェ～スト～！」

斬艦刀でガンランチャーを切る

「く！「ディアッカ！」ニコルどうした！？」
「イザークが！」
「イザーク・・」
「ディアッカ下がりましょう敵艦隊が来る！」

「くっそ！」

バスターはブリッツと合流し撤退して言った

「はあはあはあはあ・・・少し疲れたな・・・」

俺は機体をアークエンジェルに向ける

「地球に降下か・・・」

キョウスケの苦戦？　赤い戦神対バスター（後書き）

キョウ「ふう、少し疲れたな」
作「ずびまぜんでじだ」
キョウ「貴様のせいで余計な力を使ってしまった」
作「ううう、バタッ！」
キョウ「倒れたかまあほっとくか次回には復活しているだろうでは次回またお会いしよう」

アンケート　2次発表

作「機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　古しえの鉄の巨人に乗る介入者！
２次アンケート発表！」

キョウ「またこの勢いか、エリアル・クレイモアのＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩでは足りなかったか・・・」

作「いえいえいえいえいえ！！！もう十分過ぎるぐらい頂いたので結構です！今回はまもなく地球降下に入るのでその前に中間発表をしようと思って　まあ後一回するつもりですけど」

キョウ「まだやるのか？中間発表？」

作「まあこれを含めないでラス１ですから」

キョウ「・・・まあいいがで順位は？」

作「はい！順位の発表です！！！」

１０位　メイリン　１票

９位　ナタル　ミューディー　ルナマリア　ラクス　２票

５位　フレイ　５票

４位　マリュー　８票

作「１０位から４位でした」

キョウ「にしても接戦だな違う意味で、９位がまさか４人とは」

作「ええこれは予想外ですよではベスト３の発表です！！！！」

キョウ「・・・どうでもいいがこの駄作者のテンションはどうにかならんのか？」

３位！　オーディン！　１２票

２位！！　Ｍ１三人娘ことアサギ！マユラ！ジュリ！　マユ！

そして１位！！！　ステラ！　１５票

作「このような順位になりました」

キョウ「前回とは違うな、そしてステラがきたか」

作「ええ、ここで投票してくださった読者の皆様のご感想を読んでいきます」

キョウ「相変わらずのいきなりだなっていうかいいのか？」

作「さあまずは投稿者：　月神楽さんのご意見です

『オーディン，ステラ，マユ
に一票ずつお願いします。
理由としては、オーディンは、あんなにアプローチしてるんだし無視は駄目だろう…というか可愛かったし。
ステラ，マユは、単純に好きなキャラだから。

っていう感じです』

さあどんどんいきますよ～！！」

キョウ「誰か駄作者のテンションを止めてくれ・・・」

作「投稿者：　渡りガラスさんのご意見です

『ヒロインですが私はステラがいいですね。
主人公がどうやって救うのか見てみたいです』

続いては投稿者：　今夜のおかずさん！

『やはり原作で死んでしまうキャラは全員助けてヒロインにして頂きたいですね』

お次は！投稿者：　零崎煌識さんです！

『キョウスケの恋人役、ステラが良いです。もしくは女神様が人間の姿になってキョウスケの恋人にとか』

これほどのご意見を頂き私は感動の嵐です！引き続き
『機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　古しえの鉄の巨人に乗る介入者』
アンケートはまだ続きます
よければ投票していただくと感動です」

キョウ「これだけのアンケートに協力してもらったのはいいのだが勝手に読者の意見を載せていいのか？」

作「それはここで謝罪いたします

誠に申し訳ありませんでした！
勝手に乗せてしまった　零崎煌識様　今夜のおかず様　渡りガラス様　月神楽様
誠に申し訳ありませんでした
今後はこの様な事はいたしません
本当に申し訳ありませんでした！！」

キョウ「勝手ながらなここでお開きとさせて頂きます」

合流第八艦隊（前書き）

作「今回はハルバードン提督が登場します」
キョウ「いよいよ地球か・・・」
作「ええ」
キョウ「やはり原作どうりに進めていくのか？」
作「ええそのつもりです」
キョウ「やれやれだが提督は話の分かる人だからいいか」
作「ではそろそろ終わりにします」
作、キョウスケ「「では次回またお会いしましょう！」」

合流第八艦隊

キョウサイド

俺達はXナンバーを退けようやく第八艦隊に合流する事ができた
俺の契約は月本部までだったがここまでいいのかな?
一応聞きにいくか
提督も艦長室に居るだろう
俺は格納庫から艦長室に向かった

艦長室に着くと話し声が聞こえる

「しかしまあこの艦とG1機のためにヘリオポリスを崩壊させヘリオポリスを崩壊させ、アルテミスを壊滅させるとはなぁ・・・」

あのシーンの会話か・・・

「・・・」
「だが、彼女らがストライクとこの艦だけでも守ったことは、いずれ必ず、我ら地球軍の利となる」
「アラスカは、そうは思ってないようですが・・・」
「ふん!奴等に宇宙での戦いの何が分かる!ラミアス大尉は私の意志を理解してくれていたのだ。問題にせねばならぬことは、何もない」
「・・・閣下・・・」
「このコーディネイターの子供の件は・・・これも不問ですかな・・・?」
「キラ・ヤマトは、友人達を守りたい
ただその一心でストライクに乗ってくれたのです

我々は彼の力なくば、ここまで来ることは出来なかったでしょうですが・・・成り行きとはいえ、自分の同胞達と戦わねばならなくなったことに、非常に苦しんでいました
誠実で優しい子です
彼には、信頼で答えるべき、と私は考えます。」
「しかし・・・このまま解放しては・・・」
「僭越ですが、私はホフマン大佐と同じ考えです」
「「えぇ・・・？」」
「彼の能力は、目を見張るものがあります
Gの機密を知り尽くした彼を、このまま降ろしては」
「ふん！既にザフトに４機渡っているのだ今更機密もない」
「し、しかし！彼の力は貴重です！出来れば、このまま我が軍の力とすべきだと」
「だが、ラミアス大尉の話だと、本人にその話はなさそうだが？」
「彼の両親はナチュラルで、ヘリオポリス崩壊後に脱出し、今は地球に居ます
それを軍が保護すれば」
「ふざけたことを言うな！そんな兵がなんの役に立つ！」

提督が机をたたく

「申し訳ありません！」
「そしてもう一点」
「「「？」」」
「この写真の赤いＭＳ、異常なまでの戦闘力を秘めたこの機体・・・このパイロットは何者なんでしょうかね？提督」
「うん、先ほどの戦闘は一部分見ていたあれに乗っていたのはいったい誰なのかね？」
「・・・あの機体・・・名はアルトアイゼン・リーゼ、搭乗者はキョウスケ・ナンブです」

「アルトアイゼン・・・古しえの鉄の巨人か・・・そのキョウスケとやらとはどうやって出遭った？」
「ヘリオポリスでGがジンと戦闘中に現れ、ジンを撃退しその後もシグー、Xナンバーを圧倒したその力を買い傭兵としてこの艦に乗ってくれました」
「Xナンバーを!?なんと・・・」
「そのデータは？」
「・・・取っておりません」
「なぜだ!それほど力があれば我らは一気に優位に立てる!」
「雇われる条件として
『引き受けるだが、連合のパイロットにはならんぞ
それとアルトの整備は俺の確認をとり、俺の立会いのもとで行う事
そしてアルトに細工をした場合、俺はキラ達を連れ、アークエンジェルを破壊する』
というのが条件だったのです」
「ふむ・・・ぜひ会ってみたいものだなあ」

そろそろいいかな？
コンコン
一応ノックをする

「誰？」
「俺だ」
「!!キョウスケ君!?ちょうどいいわ入ってきて」

俺は艦長室に入る

「艦長、契約の交渉に来た」
「交渉？」
「君がキョウスケ君かね？」

俺は提督の方を見る

「そうだが？」

「まずは礼を言いたいこの艦とストライクを守ってくれて有難う」

「俺はこの艦にいる友達を助けたかっただけだ」

「それでもだ」

「礼を言うならキラにいってやってくれ、キラは同じコーディネーターと戦う事に苦しんでいた」

「うむ、そして契約の交渉とは？」

「このまま俺は地球に降下するつもりだ、だから契約の打ち切りに来た」

「地球に降下！？あの機体で大気圏突入するというのか！？」

「ああ、アルトは大気圏突入が可能だ」

「なんと驚いたな」

「アルトのデータでもほしくなったか？」

「いや、それは君との契約に反する事だからな、そんな事は望まん」

「「提督！！」」

ナタルとホフマンが叫ぶ

「地球軍にも貴方のような筋が通り話が分かる人が居るのだな」

「ふふふ、少しは地球軍の見方を変えてもらえるかね？」

「ええ」

やはりこの人はいい人だ

「では許可して貰えると受け取っても？」

「ああ、それでいいよなラミアス大尉」

「え？あ、はい、ここまで有難う」

「感謝するぜキョウスケ」
「ではな」

俺は艦長室から出て俺の部屋に向かった
言うのを忘れていたが俺は士官室に振り分けられた
荷物を持ち格納庫に向かいアルトのコクピットに荷物を置く

「あ、キョウさん」

俺がコクピットから出るとキラが居た

「キラ?どうした?」
「あの・・・サイ達はアークエンジェルに残るって・・・」

・・・

「あの馬鹿が・・・フレイはどうしたんだ?」
「フレイが志願したから皆志願したんです」

原作どうりか

「なぜフレイは志願したんだ?」
「お父さんと同じ事をして戦争を終らせたいですって」
「そうか・・・」

なんか原作どうりって言うのか?これ?

「キラ・・・お前はどうする気なんだ?」
「・・・迷ってます・・・友達を放って僕だけのうのうと生きていいのか・・

でも僕は平和にいきたいし・・・でも多分軍のせいで暮らせる保証なんてないし・・・」
「・・・ならナンブ財団に来るか？」
「え？」

キラは驚きの声を上げる

「俺もこのまま地球に降りようと思っている、キラなら社員としてやっていけると思うが」
「ぼ、僕は・・・」
「今すぐに決めなくていい、だが時間もそれほどないがな」

俺はキラの肩を叩きその場を立ち去る

合流第八艦隊（後書き）

キョウ「いいのかこれで？キラが来る事を選んだらどうする気だ？」
作「それはないと思いますけど」
キョウ「この後の戦闘では俺はどうするか・・・」
作「・・・ご自分で判断願います、まもなく地球編に入りますヒロインもまもなく完全決定します」
キョウ「お早め投票をお待ちしています」
作「では後書きはここまで！」
作、キョウスケ「「では次回またお会いしましょう！」」

地球に降下！戦神は奥儀を使う（前書き）

キョウ「・・・」
作「冷たい・・・」
キョウ「いい加減にしないと撃ち貫くぞ・・・」
右手にバンカー装備
ガシャンッ！
マガジンが回る音
作「またこの展開！？」
キョウ「・・・お前を殺す・・・」
作「ヒイロですかい！？」
キョウ「うるさいぞ・・・噛み殺されたいか？」
作「ひぃ～！！！雲雀さんまで出ちゃった～！！」
キョウ「駄作者は壊れかかっていようなのでそろそろ前書きは終わりだ、では本文をお楽しみください」

地球に降下！戦神は奥儀を使う

キョウサイド

あの後アルトの武装を直接チェックし問題がないことを確認する
俺はパイロットスーツに着替えコクピットに乗り込んだ
結局キラからの返答はなかった
まあ原作どうりになるのかな！？
その時！

「総員第一戦闘配備！繰り返す！総員第一戦闘配備！」

来たか
俺はすかさず艦長に通信回線を開く

「艦長、ハッチ開けてくれ敵を追い払ってくる」
「ええ！！？でも契約は」
「こんな状況では俺も降りれん、それにまだ俺は契約終了といった覚えはないが？」
「ですが本艦は大気圏突入の準備があり許可が下りておりません」
「なら俺だけでも出撃する」
「ちょちょｔｔ！？」

ブツッ
さて行くか
俺はアルトからハッキングを行いハッチを開ける

「アルトアイゼン・リーゼ、キョウスケ・ナンブ出る！」

許可なんて関係ない
やっぱり数が多い分が悪いな・・・

「分の悪い賭けは嫌いじゃない・・・」

ブーストを掛けジンに向かい斬艦刀で切り裂いていく
ジンも切りかかってくるが斬艦刀の前には無力も同然
どんどんジンを破壊していく
するとメネラオスから通信が入った

「こちらアルト」
「キョウスケ君援護感謝するだが発進許可はだしていないはずそれに契約は切れているはず・・・」
「俺は契約の交渉はしたが仕事は終ったといわれた覚えはないが？それに貴方はこれからの世界に必要な人間だ」
「・・・ふふふふふ、あははははは！軍人の私が世界に必要な人間だって？」
「ああ、貴方のような考えの人は必要だ」
「・・・面白い事を言うな」

ピッ

通信を切る
お、やべ！ストライクがイザークと交戦してる
俺はキラの元に機体を向けた

まずい！デュエルがシャトルにライフルを向けてる

「逃げ出した腰抜け兵がぁぁ！！」
「させるか～！！」

思い切りブーストを掛ける

「究極！！ゲシュペンスト～！」
「む！？アンノウン！？」
「キョウさん！？」
「キィィィク！！」

デュエルにブーストで勢いを付けたキックをお見舞いし地球に落とす

「（乗りでやったが一応アルトはゲシュペンストの改修機だしいいかな？）キラ！大丈夫か？」
「はい！でもアークエンジェルにこのままだと戻れません！」
「アルトに掴まれ！ブーストで帰還する！」
「でもそれだとキョウさんが！」
「早く！」

ストライクがアルトの腕に掴まった事を確認すると一気にブーストを掛ける

「うわぁ！！」
「間に合え～！！」

アークエンジェルも艦を寄せてくれて何とか着艦するとこができた

「キョ、キョウ助かりました・・・」
「気にするな、でも帰るの遅くなっちまうな・・・」

暑さに耐えながら俺はつぶやいた

地球に降下！戦神は奥儀を使う（後書き）

キョウ「おい！駄作者！なんでアルトにゲシュペンスト究極奥儀をやらせるんだよ！！」
作「なに怒ってるんだよ！」
キョウ「関節のフルメンテがいるだろうが！！！！」
作「あ！忘れてた」
キョウ「・・・クレイモア！！！」
肩のクレイモアのハッチ解放
ガシャン！！！
ドガガガガガ！！！！！
作「ぎゃ～～～～！！！！！！！！」
キョウ「さて今回はここまででは次回またお会いしよう」

無能女王現る（前書き）

作「さていよいよ地球編のスタートです！」
キョウ「煩いぞ駄作者」
作「駄作者はマジで勘弁して・・・」
キョウ「断る」
駄「あ～！！俺のやつが作から駄になってる～～！！！」
キョウ「いい気味だ」
駄「しょんな～」
キョウ「さて駄作者は放置して「スルーしないで～！！」・・・そろそろ前書きは終わりにします、では本文をお楽しみください」

無能女王現る

キョウサイド

今現在は俺達は砂漠にいる
結局俺はまた契約し直し傭兵として働く事になった
やれやれめんどいが原作ブレイクはしたいしな
キラは熱中症にはならずに脱水症状だけで済んだ
よかったよかったそれと

「もしアスランが生きていたら僕がこの手で仕留めます！！」

っていう決意を新たにシュミレーターで特訓をしている
後報告すること言えば・・・ああそうだ！
ジンなどのパーツを使ってマードックさんがＭＳを組み上げた
ジンをベースにイージスの腕を付けし背中には小型の対艦刀を装備し
主兵装は重突撃機銃　無反動砲の二つ
副は短距離誘導弾発射筒
通常タイプのジンにＤ装備を合体させたようなものだ
だがシグーのスラスターを搭載する事で機動性の問題も解決してい
る（メビウスセブンで回収して物）
ＯＳは俺とキラが合同で作り最終調整を残すまでとなった
フラガ少佐が乗る予定
後は普通の無反動砲装備の通常のジンが１機

「第二戦闘配備発令！繰り返す！第二戦争配備発令！」

おっと！きたか！砂漠の虎！
俺は砂漠に適用できるように調整したアルトに乗り込んだ

程なくしてキラも乗り込んだ

「総員第一戦闘配備！繰り返す！総員第一戦闘配備！」

第2が第1に切り替わった

「キョウさん！このままじゃあ！」

「ああ解ってる・・・（此処は砂漠だ出てくるのはおそらくバクゥだ）」

「敵はどこだ！？ストライク発進する！」

「キラ？待ってまだ…！」

「早くハッチ開けて！」

「まだ敵の位置も勢力も分かってないんだ。発進命令も出ていない！」

「何のんきなこと言ってるんだ！いいから早くハッチ開けろよ！僕が行ってやっつける！」

「キラ、俺の存在を忘れるな」

「艦長！」

「言い様は気に入らないけど、出てもらう他ないわね。艦の方では小回りが効かないわ
ストライク、アルト発進させて！」

「ハッチ開放、ストライク発進！敵戦闘ヘリを排除せよ！重力に気を付けろよ！」

わかってますって元々俺は地球でアルト動かしてたんだから

「アルトアイゼン・リーゼ、キョウスケ・ナンブ出る！」

「キラ＝ヤマト、ストライク行きます！」

因みキラはランチャーだ

俺達はカタパルトから発進するがキラは重力に戸惑い機体を巧く制御出来ずに膝をつき着地する
俺は元々財団であらゆる環境での訓練をしていたので問題なく着地した
すると砂丘の陰からヘリが出てきてミサイルを撃ち込んできた
キラはストライクを立てさせようとするが砂に足をとられてしまう
俺がチェーンガンで迎撃しキラはその間にＰＳ装甲をＯｎにした
キラはアグニでヘリを狙うが直ぐに砂丘の陰に隠れられてしまう

「キラ、設置圧が逃げているマイナス２０に設定してみろ」
「わかりました」

キラは急いで設定を書き直した
そして警報が鳴った
砂丘から飛び出してきたのはバクゥだった

ＴＭＦ／Ａ－８０２バクゥ

地上の地球連合勢力制圧のため投入された陸戦用ＭＳ
機体設計はマイウス市所在のアジモフ設計局によって行われ「血のバレンタイン」から約1か月後のC．E．（コズミック・イラ）７０年3月15日に就役、参戦した
地盤、地形の不安定な環境での高い走破性、機動性を確保するため、低重心かつ安定性に優れた四足歩行式を採用しているのが最大の特徴その動きは正に肉食獣さながらの敏捷さであり、開戦当初はリニアガン・タンクを始めとする
地球連合軍地上部隊の機甲兵力をことごとく打ち破った
各脚のふくらはぎには無限軌道が設置されており、伏せの姿勢を取ることで砂漠や氷原など比較的平坦な地域での高速走行が可能となる機動性と火力を活かした正面突撃を主戦術としており、装甲は前面

に集中している
コクピットは機動時の安定性を考慮し、機体重心に最も近い腹部に存在するが
各部装甲の配分上脆弱であり、最も狙われやすい部位でもある
また、構造上仰向けに転倒すると、迅速な起立姿勢復帰が困難になる欠点がある
無限軌道による走行形態は腹部の弱点をカバーする手段にもなっている

武装

２連装ビームサーベル（後期型のみ）

【背部ターレットオプション】
４５０ｍｍ２連装レールガン

４００ｍｍ１３連装ミサイルポッド

「じゃまだ～！！！」

此方に飛び出してきたバクゥをクレイモアで破壊してやった
キラも落ち着いて対応し見事に回避している
そして何故かピンチでもなんでもないのにレジスタンスが援護してきた
というより邪魔しに来た

「そこのモビルスーツのパイロット！死にたくなければ、こちらに指示に従え！
そのポイントにトラップがある！そこまでバクゥを誘き寄せるんだ！」

っとワイヤー通信を使いほざいてきた

「なんか言ってるみたいですけどどうしますキョウさん？」
「死にたくなければか・・・大きなお世話だな」
「そうですよね、むしろ邪魔ですね」
「さあ無視して虎を駆除するぞ」
「はい！」

俺達はレジスタンスの言葉を無視してバクゥに向かっていった
俺が斬艦刀でバクゥを一刀両断した
キラはキラでガンランチャーとバルカンを使い牽制し隙ができた所をアグニでバクゥの横っ腹にぶち当てる
こうして俺達はレジスタンスの事は無視して敵を殲滅した

そして何故か原作どうりに艦長と少佐がレジスタンスと話をし俺とキラが機体から降りる事になった
そしてヘルメットを取ったらカガリ（無能）がこっちに向かってきた

「・・・お前ら・・・お前らが何故あんなものに乗っている！？」

殴ってきたので受け止め腕をきめて関節を締め上げる

「いたぁ！！なにをするんだ！！？」
「なにをって君がいきなり殴りかかってきたくせによくそんな事が言えるね？」
「貴様なぜこんな所にいる？」
「それはこっちの台詞だ！」
「みれば解るだろう、パイロットだ」
「キョウさんいい加減にしませんか？このままだと話が進まないし」

「そうだな」

俺はカガリから手を離すとカガリは勢いよく頭から突っ込んだ

「あぶぅ！！がは！ゲホゲホ！」

キラは笑いをこらえている

「プッククク・・・キラ滑稽なのは解るが笑ってやるな・・・」

「ククク・・・だって、ククク・・・だって自分から突っ込んで、プククククク・・・」

「キラ俺達は艦に戻ろう、このままだと酸欠起こす」

「そうですね」

俺達は機体に乗り艦に戻った

戻る際キラはずっと笑いをこらえていた

無能女王現る（後書き）

作「やはりカガリは無能キャラがいいですな～」
キョウ「キーワードに作者はアスハ嫌いって書いてあったマジだったのか」
作「ええもちろん」
キョウ「まあカガリは無能女王と言われるほどだからな」
作「キョウはアスハはどうですか？」
キョウ「嫌いだな、理念のために国を捨てている」
作「俺もそこが嫌いです、戦術もせんぜんでしたしね」
キョウ「オーブは島国だから上陸させてダメだし、ＭＳを作るのなら水中戦や空中戦の視野に入れておくのが当然だ」
作「ですよね～あ、後次回でヒロインの３次発表をしたいと思います」
キョウ「ラストの中間発表だな」
作「ええ、投票する方はお早めに！」
キョウ「では今回はここまで」
作「ではせ～の」
作、キョウ「「次回またお会いしましょう！」」

アンケート　3次発表　20万PV達成

「さあついに最終中間発表のときがやって参りました！」

「この駄作品に投票してくれる読者の皆様に感謝だな」

「感謝感謝でお腹いっぱいですよ！！！」

「・・・」

「え？なぜ黙る？」

「煩い・・・クレイモア！！」

肩のクレイモアのハッチ解放

ガシャン！！！

ドガガガガガ！！！！

「ぎゃ～～！！！何で俺こんな扱いなの～～！！？？」

ドッカ～～ン！！！！

「さて煩い駄作者は黙らせましたではアンケートを発表したいと思います」

１０位　メイリン　１票

９位　ミューディー　ルナマリア　ラクス　２票

6位　フレイ　ナタル　5票
4位　マリュー　8票

「10位から4位でした、10~4はそれほど変動はしていないな、ではベスト3の発表だ」

3位　M1三人娘ことアサギ！マユラ！ジュリ！　13票
2位　ステラ！　15票

そして1位　マユ！　オーディン！　30票

「1位がオーディンとマユで圧倒的だな、なお今回のアンケートには駄作者が友人にもアンケートを持ちかけたらしくその結果マユが多数だったそうです」

「そうなんですよ！」

「っち復活したか・・・」

「彼女は死んでしまった為生きて幸せにしてほしいといわれたんです」

「それはステラと同じだな」

「ええ流れでは財団に戻った後すぐにロドニアのラボ潰してステラ達を助け出そうと考えてます」

「そういえばもう２０万ＰＶを達成していたな」

「ええ！こんなだ作品が２０万ＰＶというのが驚きと感動です！！」

「まあ煩いが今回は多めに見よう」

「ほっエリアル・クレイモアでのＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩは回避されたか・・・」

「ほう？では次はアインストに引き渡して地獄を味わってもらおうか？」

「もっと勘弁して～！！！」

「では今回はここまで次回またお会いしましょう！」

「ああ！俺がしめようと思ったのに！」

オリジナルキャラ紹介（前書き）

キョウ「今回は紹介か」
作「ではレッツスタート！」

オリジナルキャラ紹介

転生前　南武恭介　　転生後　キョウスケ・ナンブ

性別　男

年齢　転生前　１８歳　転生後　２１歳

身長　１９１センチ

体重　６４キロ

容姿　キョウスケ・ナンブ

引用　最高神たるオーディンが休憩中に読書をしていると時に誤ってカッターを落としてしまいそれがキョウスケに直撃して死亡しただがそれをキョウスケは怨んでいない
転生前は持ち前の冷静さとクールさと悪運と勝負運と賭け好きで
リアル、キョウスケ・ナンブという二つ名を持っていた
本人はこの二つ名が名誉なんだが不名誉なんだかわからなくなる事がある
転生後はナンブ財団の創始者として仕事をしている
主な仕事は社員たちのメンタルケアや武器や商品などのテストにも立ち会っている
主な搭乗機は完全専用機のアルトアイゼン・リーゼ
その他に専用機として　ソウルゲイン、ヴァイサーガ
財団の中では社員全員に一切の不満を持たれておらず好感を持たれており彼を尊敬、憧れとする者も多い

女性陣からは好意の目で見られることが多い
身体能力は転生時の特典でＭＡＸになっており運もＭＡＸになっている
ＳＥＥＤの持ち主
スーパーコーディネイター以上の能力も持っている
キラにシュミレーターで特訓を行っている
そのため最近はキラとは師弟の仲になりつつある

オーディン

性別　女

年齢　本人が拒否したため不明

身長　１８５センチ

体重　本人が拒否したたま不明

容姿　特上の特上

引用　休憩中に読書をしていると時に誤ってカッターを落としてしまいキョウスケを殺してしまう
彼に謝るが「誰にもミスという事ある、貴女を攻めるつもりはない」という言葉を言われ
キョウスケの優しさに触れキョウスケの虜になる　つまりべた惚れ状態
転生するときに転生するか神となり自分と暮らすかというアプローチをかけている
サイレント・ラン　神再びに再登場し他の下級神、上級神にキョウスケを神化して早く結婚しろと言われた事を

キョウスケに伝える
キョウスケの苦戦？　赤い戦神対バスターにも登場しキョウスケがアスランが生きているか聞こうとしたら
（ハイなんですか！新居なら今すぐにでも作りますけど！！）
と勘違いをしてしまう

キラ　無能への呆れ

キョウサイド

俺は今キラと共に少佐の機体の調整を手伝っている
少佐の機体となるこの機体
ジンの性能は凌駕しているものの流石にＸナンバーには劣る
だから念には念を入れることにしよう
そんな時に無能女王が来た
なにやらジンを見つめている

「おい何を見ている？まさか乗りたいなんて言い出す気じゃないだろうな？」
「邪魔だからどっか行ってくれない？」
「そう怒るなよ・・・さっきは悪かったはずみだ許せ」
「君って馬鹿？」
「はずみで人を殴るな、貴様はヘリオポリスで父がどうこうと言っていたが貴様はオーブの人間か？
貴様はここにいるだけでどれだけやばい事か分かっているのか？」
「大丈夫だ、サイーブやキサカは私の事を知っている」
「「（（絶対わかってない・・・））」」

俺のキラの心がシンクロ率は１００％を記録した（エヴァですかい！？）

「キラ・・・こいつ馬鹿ってレベルを遥かに超越してるんじゃないか？」
「キョウさん・・・この無能なんとかなりませんか？」
「だめだろう・・・」

「「はあ・・・」」

俺はバカガリを追い出そうとしたら
空が真っ赤になっている部分に気付いた

「!?タッシルの方向だ!」

無能女王バカガリは走り出して仲間と共にタッシルに向かった

「キョウさん無能は行っちゃいましたけど僕たちどうします?」
「う~~ん・・・そうだな・・・一応機体で待機しておこう
あいつらの事だ報復とか言ってバズーカ片手にバクゥに戦いを挑みかねん」
「いくらなんでも・・・いやあの無能だったら
「このままやられっぱなしでいいのか!!?」とか何とか言って煽りかねませんね」
「だろう?さあ行くぞ」
「はい」

俺達はパイロットスーツに着替えてコクピットで待機する

サイーブという人は子供や家族のそばにいてやるべきだと言ったらしいが
無能女王を筆頭に交戦派はザフトを追っていった
結局俺達に発進命令が来た

「ヤマト少尉とキョウスケ君に行ってもらいます、見殺しには出来ません・・・
ハウ二等兵!ストライクおよびアルトの発進を!」
「はい!キラ!キョウさん!ストライクおよびアルト発進願います

！」
「「了解」」
「進路クリアー、ストライク、アルト、どうぞ！」
「アルトアイゼン・リーゼ、キョウスケ・ナンブ出る！」
「キラ＝ヤマト、ストライク行きます！」

カタパルトで一気に勢いをつけブーストで加速する
キラもエールで追いかけてくる

しばらくするとバクゥが一方的殺戮いわゆるワンサイドゲーム会場となっていた

「結果など見えていただろうに・・・無能どもが・・・」
「キョウさん・・・あの女バカガリって言いましたっけ？」
「それでも構わないがバは要らんだろう」
「バクゥにあんな武装で勝てると思ってるですかね？あんなじゃ数があっても勝てませんよ」
「やっぱり無能女王か・・・まあそろそろ行くぞ」
「は～い」

最近はキラも心に余裕ができて少し陽気さが出てきたなとりあえず降下しつつライフルで牽制するバクゥはすぐさま標的を俺達に変えてきた

「キラ！上がった腕前見せてやれ！」
「はい！」

俺はライフルでわざと地面を撃ち砂を巻き上げキラはＭＳと思えないアクロバティックな動きを見せ
砂を煙幕に利用し姿を隠しバクゥを翻弄しながらサーベルで仕留め

ていく
後ろから回りこまれるが2回転宙返り（ひねりあり）でバクゥの意表をつき仕留めていく

「１０点！１０点！見事だキラ、ＭＳであんな動きができるとは腕が飛躍的に上がってるなにしてもよくあんな動きが思いついたな」
「いえ、大気圏突入時にキョウさんがデュエルにやったキックの前の動きを見て思いついたんです」
「ああ、あれかあれも俺も勢いでやったのだがな」

そう会話しながら敵を完全は2機のみになり撤退していった

「さあキラ無能共に説教でもしに行こうか？」
「そうですね」

俺とキラはコクピットから降りた
交戦派の勝手な判断のせいで死亡者は交戦派の８割を占めていた

「クソォ～～！！！虎め！！絶対に許さんぞ！」

無能は地面を叩き叫んでいる

「・・・馬鹿で無能だなお前達は・・・」
「なんだとぉ～！！！キサマァ～！」

無能は俺の胸倉を掴んでくる

「お前達が無駄に戦闘などしなければ死ぬものはいなかった、お前

達が軽率な判断をした結果がこれだ」
「キサマァ～！！」
「この際はっきりと言っておくぞ今回死んだ人たちは虎に殺されたのではなくお前達に殺されたんだ
弾薬が尽きていると簡単に判断し守る必要がある人たちを見捨てて敵討ちか・・・」
「その結果がこのザマです」
「なにぃ～！！」

無能は今度はキラの胸倉を掴んだ

「みんな必死で戦った！戦ってるんだ！大事な人や大事なものを守るために必死でな！」

キラは思い切り無能を殴り飛ばした
無能は殴られた頬を擦りながらキラを見る

「気持ちだけで！一体何が守れるっていうんだ！」
「キラその辺にしておけこいつらに構う必要はない」
「・・・そうですね分かりました」

キラは俺の言葉を聞き入れラダーを掴みコクピットに入っていった
俺もアルトに乗り込みアークエンジェルに帰還した

キラ　無能への呆れ（後書き）

キョウ「まさかキラが奥儀を参考にするとは意外だったな」
作「ビックリしたでしょ？」
キョウ「ああ驚いた、そういえば新しく感想が着ていたぞ？」
作「どんなの？」
キョウ「え～とだな、上位三名のオーディン　マユ　ステラを三人ともメインヒロインにしてほしいっだそうだ」
作「う～んでもな～三人でキョウを取り合う修羅場しか思いつかんぞ？」
キョウ「修羅場はできれば勘弁してもらいものだ」
作「まあそれは考えるとしてでは今回の後書きはここまで！」
作、キョウ「「では次回またお会いしましょう！」」

対面砂漠の虎　個人的にはケバブにはヨーグルトソースを試してみたい（前書き

キョウ「・・・？またか？おい駄作者何処にいる？居なくてもいいが何処いる？」
作「いや～遅れました」
キョウ「何をやっていた？」
作「いや～友達これからの構成を電話で考えたら時間が過ぎちゃって」
キョウ「優しい友人を持ったものだな」
作「ええ俺はキズナを大事にするって約束したんです」
キョウ「なんか遊星が出てきそうだな」
作「まあ最近は遊星の影響も大きいですね前書きはこのぐらいにして、本文にいきましょう！」
作、キョウ「「では本文をお楽しみください！」」

対面砂漠の虎　個人的にはケバブにはヨーグルトソースを試してみたい

キョウサイド

ああ気分が悪い
なぜこんな事をさせられている？
・・・すまん今から状況を説明する

前回ザフトによってタッシルの街は壊滅的な被害を負った
それに加え明けの砂漠の弾薬、燃料なども焼かれてしまい買出しに行く事になった
ついでにアークエンジェルの弾薬なども補給するために一緒に買出しをすることになった
それで指名されたのは俺とキラだった
俺もキラも何故？っと艦長に聞くとあの無能女王が指名してきたという
俺とキラは断固拒否をしたが
艦長、少佐、ナタルさんに必死に説得され
仕方なく引き受けた
頭痛の種が増えた・・・
はあ・・・この前自前のコンピューターを使いテレビを見てみる（という名のハッキング）と
『ナンブ財団の創始者がヘリオポリスで休暇中に行方不明！？』
『創始者の行方は知れず』
『心配と不安募るばかり』
というニュースが流れていて思わず頭が痛くなった
まあ当然の反応だろうと割り切ったが
捜索艇が多数出ており
とんでもない大ニュースになっていた

財団は全力を尽くし俺を探しているようだ
・・・帰ったら無事かな?俺?

そんなこんなで今は荷物持ちをしている

「キョウさん」
「何だキラ?」

いきなりキラが話しかけてきた

「いいんですか?僕はともかくナンブ財団の創始者であるキョウさんが荷物持ちなんかして?僕が持ちましょうか?」
「キラありがとうでも気持ちだけ受け取っておくよ俺は今はナンブ財団の創始者ではなく一人の兵士として此処にいるんだ」
「でも世間では大騒ぎですよ?」
「ああ・・・見たのかあのニュース・・・」
「ええ見ました、キョウさん財団の人達からとっても信頼されてるですね」
「よしてくれ照れる」
「決めました」
「何を?」
「僕は絶対将来ナンブ財団の入社試験受けて合格して見せます」

何を言い出すかと思ったら・・・

「受けなくて歓迎するが?」
「いえそれだとキョウさんに巧く取り入ったっと思われるので自分の力でやって見せます」
「そうかお前がそうしたいならそうすればいいさ」

キラも大人になったものだ
そんなこんな言っている間に無能は次々荷物をリュックに入れてくる
しかも指名してきた癖に先に根を上げやがった
キラは最近訓練を積極的にやっているから肉体的にも精神的にも大きく成長している
すでにフリーダムに乗っている時みたいなキラになっている
俺達は店に入り外の席に座った
そして何故か無能は料理を注文した

「こ、これでだいたいそろったな・・・」
「なさけない」
「体力なし」

俺とキラは追い討ちをかけるように言葉をかける

すると

「お待たせねー」

ボーイが料理を運んできた
はやりケバブだ

「キョウさん何ですかこれ？」
「ケバブ・・・だな」
「ドネルケバブさ！あー、疲れたし腹も減った、ほら、お前も食えよこのチリソースを掛けてぇ」
「あーいや待ったぁ！ちょっと待ったぁ！ケバブにチリソースなんて何を言ってるんだ！このヨーグルトソースを掛けるのが常識だろうがぁ」

いきなり声を上げてケバブにはヨーグルトソースと豪語してくるこの男・・・
俺は無能がケバブにはチリソースだと豪語している中でキラと一緒にヨーグルトソースを取りかける

「お前等ヨーグルトソース使ったな！」
「俺が何を使おうが俺の勝手だ、ケバブにはこのまったりと濃厚なヨーグルトソースがよく合う」
「僕も同じ意見です、それに刺激物取りすぎると禿げちゃうからね、僕はそんなのごめんだから」

まあいい例が居るからな
アスランしか思いつかないけど

「いや～君達もヨーグルト派なんだね」
「ああコーヒーがほしくなる所だな」

すると発射音が聞こえた
俺、キラ、バルトフェルドは思考を戦闘モードに変える

「！！伏せろ！！」

バルトフェルドはテーブルを蹴り上げる

「青き清浄なる世界のために！！」
「ブルーコスモスか！？」
「キラ！」
「はい！」

俺とキラは持ってきていた銃で応戦していく

キラは腕や足を正確に撃ち抜き
確実に俺は致命傷になるように胸等に銃弾を撃ち込んでいく
襲撃者を仕留め終わった後は激痛でもがき苦しむブルーコスモスは
全員地に沈んだ
その後バルトフェルドの屋敷に招待されている

「どうだい？　僕がブレンドしたコーヒーの味は？」
「美味いな」
「ええ少し苦いですけどなんか後引く美味さって感じです」
「お～分かってくれる人がいて嬉しいな」
「そういえばあの無能・・・じゃなくてカガリはどうしたんですか？」
「あの子はアイシャがおもｔｙ・・・着替えさせてるよ？」
「なるほど、着せ替え人形にされて玩具にされているというわけが」
「いい気味ですね」

俺達はバルトフェルドの特製コーヒーを堪能した
で暫らくしたら無能がドレスを着てやって来た

「あっそっか女の子だったけ？」
「そういえばそうだったな無能女王と呼んでいるのに気付かなかった」
「オマエらなぁ～！！」
「ドレスもよく似合うねぇと言うか、そういう姿も実に板に付いてる感じだ」
「勝手に言ってろ！」
「しゃべらなきゃ完璧」
「そう言うお前こそ、ほんとに砂漠の虎か？何で人にこんなドレスを着せたりする？これも毎度のお遊びの一つか！」
「ドレスを選んだのはアイシャだし、毎度のお遊びとは？」

「変装してヘラヘラ街で遊んでみたり、住民は逃がして街だけ焼いてみたりってことさ」
「いい目だねぇ真っ直ぐで、実にいい目だ」
「くっ！ふざけるな！」
「煩い黙れバカガリ」
「きみはうるさいから自重してよ」
「なんだと！？」
「まあ俺は貴方に好感を抱いている」
「僕もです」
「ほう？それはなぜかね？僕は街を焼いたりする男だよ？」
「それでも死人が出ないように住民を避難させたりする所はいいと思うぞ？」
「まあありがとうといっておくよそれと君達はどう思う？どうなったらこの戦争は終わると思う？モビルスーツのパイロットとしては」
「お前どうしてそれを！」
「おい貴様がばらすな、無能」
「ドジ、役立たず、無能、考えなし、バカ」（言われたい放題）
「はっはっはっは。あまり真っ直ぐすぎるのも問題だぞ、戦争には制限時間も得点もないスポーツの試合のようなねぇ、ならどうやって勝ち負けを決める？」
「う～ん両方の和解しかないないと思います、でも現段階では難しいと思います」
「ああその通りだ」
「だけどレジスタンスみたいに戦い続けるなんてナンセンス全く持って下劣の極みです」
「言うなぁ～キラ」
「なんだと！」
無能はキラに詰め寄った

「みんな必死で戦った！戦ってるんだ！大事な人や大事なものを守るために必死でな！それを下劣だとぉ！」
「それのおかげでどれだけの人が死んだと思ってるの？」
「全くの無能ぶりだな」
「なんだとぉ！！！」
「いい加減頭を使え」
「どういう事だ！」
「だから頭を使えと言ってる」
「キョウさん幾ら言っても無駄ですよ」
「そうだなでは俺達はこれで」
「もう帰るのかね？もう少し味わっていかないか？」
「そうしたいのは山々だが帰らなければならないんだ」
「そうか話せて楽しかったよよかったかどうかは分からんがねぇまた戦場でな」

こうしてコーヒーブレイクは終った

「それにしても美味しかったですねコーヒー」
「ああ俺もやってみるかな？ブレントコーヒー」
「ああじゃあやるときは僕も呼んでくださいよ僕も作ってみたいです」
「じゃあ艦長達に味見してもらって成功したら艦の皆にも飲んでもらう事にしよう」
「そうですね、でも豆はどうします？」
「ここで買い物するときにいろんな豆買ったから問題ない」
「何時の間に・・・なら大丈夫ですね、でもキョウさん何か忘れている気がするんですけど・・・」
「ん？荷物は全部持ってるぞ？」
「ですよね？じゃあ気のせいかな？すいません変な事言って」

「気にする事はないさ、さあ帰るぞ」
「はい♪」

俺とキラは待ち合わせ場所に歩き出した
だが俺たちは忘れていた

「私を置いてくな～！！！」

無能の事を

キョウ「ふうケバブは美味かったしコーヒーも美味かったし
文句なしだな」
作「ケバブそんなに美味しかったの？」
キョウ「ああ、ヨーグルトがよく合うぞ」
作「そうなの？俺としてはチリソースも試してみたいな」
キョウ「別にいいけど刺激物は取りすぎるなよ」
作「わかってるってホモランにはなりたくないからね」
キョウ「それはもしかしなくてもアスランか？」
作「もっちろん！」
キョウ「ふむ、駄作者にしてはいいのをつけたな
駄作者から作者に格上げしておくよ」
作「やった作者に戻れた」
キョウ「？いつも違って静かだな？」
作「だって騒いだらエリアル・クレイモアでのＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩをするんでしょ？」
キョウ「ほう分かってきたじゃないかだが今回は多めに見てやろうと思っていたがな」
作「え！？そうだったの！？じゃあやった～！！！！」
キョウ「だから言って調子に乗るな！クレイモア！！」
肩のクレイモアのハッチ解放
ガシャン！！！
ドガガガガガ！！！！
作「ああ～～！！！！すみませんでした～！！！」
ドッカ～～ン！！！！
キョウ「まあ今回は反省しているようだし作者のままにしておくか、
は次回またお会いしよう」

砂漠の虎　前編（前書き）

作「さあ後少しで砂漠編は終了です」
キョウ「ようやく暑いのから開放されるのか」
作「ええお疲れ様でした」
キョウ「それは戦闘が終わってから言ってくれ」
作「はいでは今回の前書きはここまで！」
作、キョウ「「では本文をお楽しみください！」」

砂漠の虎　前編

キラサイド

今日はキョウさんのシュミレーター特訓を終えてご飯を食べようと
食堂に向かっている
僕は食堂でトレイを持って席に座り食事を始める
うんやっぱり特訓の後のご飯は美味しい
キョウさんと一緒に食べたかったがアルトの調整をするらしく駄目
だった
聞きたい事あったのに

「はあ・・・」

僕は気付かぬ内に溜め息を吐いていた

「キラどうした溜め息なんて吐いて?」

何時着たのか少佐が隣に座っていた

「いえ今回の特訓でキョウさんに聞きたい事あったのに聞けなかっ
たので・・・」
「ふ～んそういうのは聞けないと嫌だよな、まあ元気出せよこれも
食えよ」

少佐が僕のトレイに乗せてきたのは無能に連れて行かれた時にヨー
グルトで食べたら
とっても美味しかったケバブだった

「有難う御座いますでも少佐まだ食べるんですか？
出撃に向けて力を付けたいには解りますが食べ過ぎると出撃時のGで逆流しますよ？」
「大丈夫だ加減してるからさあ食えよキラは何ソース派だ？」
「僕は断然まったり濃厚のヨーグルト派ですね」
「ほうキラもか」
「少佐もですか？」
「ああこっちのほうが美味いからな」

やっぱりヨーグルトだね
こうして僕は出撃前の食事を満喫した

キラサイドアウト

キョウサイド

「ふうやっとアルトのチェック終った」

砂漠に着てからシステムを弄ったせいか少し手間がかかってしまったさて飯も食いに行くかなだけど

「総員第一戦闘配備！繰り返す！総員第一戦闘配備！」

マジかよ飯食ってないのに・・・
しょうがない
俺はポケットに入れてあった携帯食料を直ぐに口に入れたないも食わないよりはましだろう
俺は急いでパイロットスーツに着替えてアルトに乗り込む

「ミリアリア敵はどのぐらい居る？」
「確認できているだけでバクゥが５機です」
アルトからミリアリアに通信を開いている
「キョウさん？どうしたんですか？イラついてるみたいですけど？」
「・・・奴らのおかげで食事を取れていない・・・」
「あ、それで・・・」
俺の怒りのボルテージはどんどん上がっていく
「進路クリアー発進どうぞ！」
「アルトアイゼン・リーゼ！キョウスケ・ナンブ出る！！」
食い物恨みは凄まじいものだと教えてやる・・・！
「キョウさん！敵が来ました！」
「・・・」
「キョウ・・・さん？」
「・・・」
俺は怒りをぶつけるようにバクゥに向かっていく
「な、なんか怒ってる？」
「チェ～スト～！！！」
斬艦刀を両刃にしてバクゥを切り刻んでいく
キラもサーベルでバクゥを斬りつけていく
そしたらラゴゥが出てきた

「キラ、俺は母艦を潰す」
「はい！」
俺はラゴゥをキラに任せ俺はレセップスに向かった

砂漠の虎　前編（後書き）

作「さあこの後どうなるのか！？
キラ対バルドフェルド！
キョウ対レセップス＆デュエル、バスター！次回をお楽しみ！」

アンケート完全発表！ついでに３０万ＰＶ達成

「さあ今回１話丸々このような感じにしたのは」

「またいつもの勢いか・・・？」

「そういう言い方勘弁してくださいよ！それの勢いではなくて今回は前々から考えてたんです！」

「ほ～で今回は勢いでどうすｒ」

「だ～か～ら！勢いじゃないって！！」

「ではなにをする気だ？」

「こほん・・・今回は機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　古しえの鉄の巨人に乗る介入者　ヒロインアンケート結果発表です！」

「今回は勢いではなかったか・・・」

「ご、ご理解いただけましたか？」

「ああ解ったからさっさと始めろ」

「あ、はい・・・ではまずは１０位～４位の発表です」

１０位　メイリン　１票

９位　ミューディー　ルナマリア　ラクス　２票

6位　フレイ　ナタル　5票

4位　マリュー　8票

「10位から4位でした」

「全くと言っていいほど変動していないな」

「たはは・・・さて次はいよいよではベスト3の発表です！」

3位ステラ！　15票！

2位　M1三人娘ことアサギ！マユラ！ジュリ！　16票！

そして1位　マユ！　オーディン！　30票！

「という結果になりました」

「なんて言っていいか・・・M1三人娘の票数しか変化していないな」

「ええ、そうですね」

「こんな結果になったがどうするんだ？」

「う～んやっぱり上位をヒロインにしようと思ってます」

「修羅場になるのか・・・」

「戦闘以上にシビアで辛くて酷な事になりますよ、覚悟が必要ですよ」

「はあ・・・」

「では次回またお会いしましょう！」

「作者は忘れているようだが３０万ＰＶを達成しました読んでくださいました読者の皆様に感謝です」

砂漠の虎　後編（前書き）

作「さあ！ついに砂漠編完結！キラ対バルドフェルド！キョウ対レセップス＆デュエル、バスター！」

砂漠の虎　後編

キラサイド

キョウさんがレセップスに向かい僕は出てきたバクゥの指揮官機に向かい合っている

ＴＭＦ／Ａ－８０３ラゴゥ

バクゥより一回り大型の上位機種
指揮官用として少数が先行配備された
開発当初からビーム兵器の搭載が考えられていた為コクピットは前席にガンナー（砲手）
後席にメインパイロットが乗り込む複座式が採用されており
その連携によりバクゥよりも機動性を活かした砲撃戦法が可能となっている
遠距離では砲撃により敵を牽制し、一気に距離を詰めてクローとビームサーベルによる二段構えの打撃を加えることで、大抵のパイロットに対し回避不能なダメージを与えることができる

武装

２連装ビームキャノン

２連装ビームサーベル

ライフルで先制攻撃を仕掛ける
正確に鉄器の動きを予測し撃つがそれでもあたらない

「バクゥとは違う・・・隊長機？あの人か！あっ！」

ラゴゥは砂煙を巻き上げながら高速で移動しビームキャノンを撃ってくる
それを防御しつつ打ち返す

「なるほど、いい腕ね」
「だろ？今日は冷静に戦っているようだが、この間はもっと凄かった」
「なんで嬉しそうなの？」
「・・・」
「辛いわね、アンディああいう子、好きでしょうに」
「投降すると思うか？」
「いいえ」

ラゴゥは轟音を上げてビームサーベルを展開して突進してくる
僕もサーベルを持ち切りかかる

「はぁ～！」
「うぉ～！」

お互いが全く同じタイミングで斬り合い僕はビームキャノンを斬り
ラゴゥはエールの翼を斬った

「バルトフェルドさん！」
「まだだぞ！少年！」
「勝負は付きました！降伏を！」
「言ったはずだぞ！戦争には明確な終わりのルールなどないと！」

「バルトフェルドさん！」
「戦うしかなかろう！互いに敵である限り！どちらかが滅びるまでな！」
「なら僕が・・・貴方を討つ！！」

キラはＳＥＥＤを発動しもう一度斬り合うようと見えたが
キラは一瞬にしてラゴゥの頭部、足を全て破壊しラゴゥを爆散したように見せた
実際はコクピットには損傷は与えていない

「・・・キョウさんの援護に行かないと」

僕は再びバーニアを吹かし敵母艦に向かった

キラサイドアウト

キョウサイド

俺はバーニアを吹かし敵母艦であるレセップスに向かっている
食事をしていないから正直キツイ

「見えた！」

やっと捉えた！

レセップス級

主に砂漠地帯で運用される大型陸上戦艦
船体喫水線下が砂中に没する半没式船体構造を持ち

底部全面に配されたウロコ状の推進装置「スケイルモーター」で砂を振動・液状化させて移動する
砂中でより高い浮力を得るため、底部は表面積が広く設計されているスケイルモーターは水上航行も可能だが、ザフトではボズゴロフ級を始めとする潜水母艦が海洋戦力の主力を担っているため、実際に運用された例はほとんどない
多数のＭＳ・戦闘ヘリを搭載し、正面のメインゲートを含め計１５基の発進用ゲートを持つ
武装は４０ｃｍ連装砲３基を始め、対空ミサイル、機銃、砂漠魚雷発射管を多数装備する

レセップス

アンドリュー・バルトフェルド隊の旗艦
バルトフェルドが自ら前線に出撃する際は、副官のマーチン・ダコスタに指揮が一任される。艦名のレセップスは、フランス人実業家「フェルディナン・ド・レセップス」に由来する
親プラント国家アフリカ共同体の都市バナディーヤを拠点に対ゲリラ戦を行っていたが、偶然に勢力圏内のリビア砂漠に降下して来たアークエンジェルと2度に渡る戦闘で大破、遺棄される。その際、バルトフェルドの指示により搭乗員はダコスタを残し全員が退艦する
『ＳＥＥＤ　ＡＳＴＲＡＹ』では、ダコスタからジャンク屋のロウ・ギュール達に譲渡され、修復後に武装を全て排除し作業用クレーンなどを増設した「レセップス・リファイン」に改装される。以後、ロウ達はこの艦で海上を移動し、オーブへ赴く

「この世界で初めての対艦戦だ・・・行くぞ！アルト！」

一気にバーニアの出力を上げ突撃する
今気付いたがアークエンジェルも近くにいた

「おい！止めろ！そいつは素人に扱える代物じゃない！！」

マードックの怒鳴り声が何故か通信で聞こえてくる

「煩い！機体を遊ばせていられる状況か！こいつで出る！」

「なんだって！？うわっく！！ふざけるな！」

ま、まさか・・・

「キョウさん！」

キラがストライクのバーニアを吹かしてやって来た

「どうしたんですか？」

「いや・・・嫌な予感がするんだが・・・」

「嫌な予感ですか？」

「ああ（ってＺＡＦＴはアルトやストライクに気付いていないようだ）」

「まあとりあえず母艦を潰しましょう！」

「そうだな」

俺とキラはレセップスに機体を向け攻撃を始めた

艦上にいたデュエルとバスターは此方に気付き攻撃をしてきた

だがアークエンジェルから何故か少佐専用のジンではないジンが出てきた

「なに！？」

「キョウさん！？もしかして！？」

「ま、まさか・・・無能が・・・」

ジンは歩き出そうとするが・・・

『うわぁ～!!なんだこれは!?巧くうわぁ～!!!!』

うわぁ転んだ・・・・

「キョウさんあの無能馬鹿ですか?」

「無能で馬鹿を遥かに超越した存在だな」

戦闘をこなしながら会話している

『くそ!!これでも食らえ!!!』

無能は転んだ状態のままバズーカを撃った

「あ、あの無能!キョウさん!避けてください!!」

「なに!?」

図らずも無能が放ったバズーカはアルトに向かっていった

俺は避けようとしたが気付いたのが遅く背中に直撃した

「ぐわぁ!」

「キョウさん!」

後ろから不意打ちを食らいアルトは膝を着いてしまい

その隙を付かれてデュエルとバスターがありったけの攻撃をしてくる

「ぐわぁ～!!!」

「キョウさん!!」

キラが援護してなんとか体勢を立て直しＸナンバーにはクレイモアをお見舞いしＰＳ装甲を落としやった
そしてレセップスのエンジン部にバンカーを打ち込みレセップスは総員が脱出した後に爆発を起こした

「はあはあはあはあ・・・」
「キョウさん！大丈夫ですか！？」
「なんとかな・・・」

俺は機体をアークエンジェルをに向けた
さて無能にＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩでもするか・・・

砂漠の虎　後編（後書き）

キョウ「今回は俺が担当だ
次回機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　古しえの鉄の巨人に乗る介入者
舞台は海へ、新たな環境での戦いが始まる
無能女王はどうなるのか？
海中での敵とどう戦うのか？
どんな装甲であろうとどんな敵であろうと
撃ち貫くのみ！！！

舞台は海へ・・・の前に無能への制裁（前書き）

作「え～今回はタイトルで解ると思いますが今回は無能へのＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩが目的です」
キョウ「俺の前回の次回予告が無駄になったではないか」
作「たははは！」
キョウ「・・・・・・」
作「あ・・・」
キョウ「クレイモア！！」
肩のクレイモアのハッチ解放
ガシャン！！！
ドガガガガガ！！！！
「ぎゃ～～！！！」
キョウ「そろそろ前書きは終わりにします、では本文をお楽しみください」

舞台は海へ・・・の前に無能への制裁

キョウサイド

俺がアルトを降りたら驚きの光景が広がっていた
キラが無能の胸倉を掴んでいた
そしてキラは手を離した

「キラ、何をやっている？」
「キョウさん！だってコイツ！」
「そいつの制裁は俺がやる」
「・・・解りました」

キラは俺の後ろに下がった

「おい貴様・・・お前が今回何をやっているのか理解していたいるのか？」
「すまなかった・・・あ、あんなに難しいとは思わなかったんだ・・・もう二度とこんなミスはしない・・・」
「・・・貴様理解してはいない！」

胸倉を一気に掴み無能を持ち上げる

「な、なにを！？」
「解らないなら教えてやる・・・貴様がジンに乗ったこと自体が問題なんだよ・・・」

キョウサイドアウト

キラサイド

キョウさんは凄まじい殺気を出し無能を威圧している
その殺気で僕達まで寒気と冷や汗が止まらない
まるで肌に突き刺さるかのように肌がピリピリする

「貴様はかってに軍の機体に乗り整備班の手を使わせ・・・挙句の果てにフレンドリーファイヤーを起こした・・・」

さらにキョウさんの気迫と殺気が上がっていく・・・

「こ、恐い・・・」

まるで戦いの神・・・
僕は初めてキョウさんが恐いと思った・・・

「貴様は死んでも文句は言えんぞ・・・一度死んでみるか・・・？」

キョウさんは銃を取り出し無能の口に入れる

「むがぁ！ヤガァムェロョ～！！」
「くたばれ・・・」

バキュン！！

「あ！！」

無能は泡を吹いて床に落ちた
だけど血は出ていない・・・

「ふふふ・・・」
「キョウ・・・さん？」
「ははははは！空砲さ」
「え！？」
「こんな奴殺してもいいが意味がないからなだったら死の恐怖を味わったほうがいい」
「それはそうですねそれにしてもキョウさん」
「ん？」
「無能どうします？」
「う～んゴミ箱にでも捨てるか？」
「あ！いいですねそれ！」
「おい坊主捨てるの俺な」
「マードックさんノリノリですね」
「「「「はははははは！」」」」

僕達は声を合わせて笑った

キラサイドアウト

キョウサイド

レジスタンスの連中は大騒ぎをしている
俺は大騒ぎしている連中が居る所が一望できる崖の上にいる
会場からかっぱらって来た酒を飲んでいる

「・・・いい気なものだな」

俺は酒を口に含み飲み込む

「飲み相手がほしいものだ」

（なら私でよければお相手しましょうか？）

俺の横にオーディンが現れる

「久しいな」
「そうですね」
「だが最高神がいいのか？」
「今は仕事を終らせたばっかりですだから大丈夫です」
「ミスはしてないか？」
「それは言わないでくださいよ～」
「悪い悪いほらぁ」

俺はオーディンに酒を渡す

「今回はお疲れ様です」
「ああ無能のおかげで少し酷い目にあったけどな」
「それにしてもこれからどうするんですか？」
「ん？」
「貴方がオーブから離れた所に財団を作っている以上わざわざオーブによる必要はなくなりますよ？」
「だがナンブ財団は面目上はオーブにあるという事になっているアークエンジェルを止めたりしたら世界中から非難を浴びる・・・時間的なことも考えて財団の戦力はまだ不十分だ
「では原作どうりに？」
「ああとしたいが無能がいなくても俺が居ると言えば大丈夫だろう」
「そうです・・・か・・・・」
「オーディン？」
「ふぁ～すみません・・・ちょっと眠くなっちゃって・・・少し失礼します・・・」

オーディンは俺にもたれかかって眠り始めた

「ＺＺＺＺＺ・・・」

「ふうまったくしょうがないな」

俺はオーディンに上着を掛け空を見上げた

「こうやって夜を過ごすのも悪くないな・・・」

こうして夜は更けていった

舞台は海へ・・・の前に無能への制裁（後書き）

作「どうだオーディィン今回のラストは？」
オ「な、なんだか恥ずかしいです／／／」
作「おうおう赤くなっちゃってこの勢いでキョウスケを落としちまえ」
オ「ほ、ほっといてください！！／／／」
ヴァイスのオクスタンランチャーを取り出す
作「え～！！どっから出した！？」
オ「もう知りませ～ん！！」
ドンドンドンドンドンドンドンドン！！！！！！！！！！
ランチャー乱射音
作「うぎゃ～！！！！！！！」
オ「もう／／／ではまた次回お会いできるのを楽しみにしております」
ペコリ

舞台は海へ（前書き）

キョウ「ようやく海か・・・」
作「はいそうです」
キョウ「では少しは涼しくなるな
では前書きはこのぐらいにして、本文に移行する」
作、キョウ「「では本文をお楽しみください！」」

舞台は海へ

キョウサイド

オーディンが目を覚まし別れた後にアークエンジェルは紅海に向けて出発した
だが何故か無能まで付いてきた
何故か土下座までして付いてきたらしい
だがオーブでつまみ出すという事で俺とキラは渋々了承した
今はキラと共に艦の外に出て潮風に当たっている

「気持ちいいですねキョウさん」
「ああ久しぶりだ潮風に当たったのは」
「それにしても無能はオーブでつまみ出すって言ってましたけどそれって完全にオーブに向かうって事ですよね？」
「ああ、俺の事もあるからなさてそろそろ戻るか？」
「そうですねこれ以上いるとべたついちゃいますもんね」
「ちがいない」

俺とキラは格納庫に向かいシステムのチェックに入った
無能は俺の姿を見ると睨みつけてきた
どうやら俺にかなりの敵意を持っているようだな
俺はそんな事はお構いなしにアルトのシステムチェックに入った

『マスターおはようございます』
「ああ、レインだが今は昼だぞ？」
『あ／／／それは失礼しました／／／』

こいつはアルトのＡＩレインだ

砂漠に着てから開発し砂漠の虎との決戦の前にインストールさせたのだが
起動したのは戦いが終った後だった
コイツは冷静な男性タイプにしたはずだったのだが
どこでプログラミングを間違ったのかオーディンのような女性タイプになってしまったのだ

「レインシステムチェックを始めるぞ」
『ハイ♪』

レインは俺の戦闘中のバックアップ、援護を目的に開発にしたのだ
レインのおかげで戦闘中は敵機の確認などの仕事を負担してくれるため
俺は戦闘に集中できるのだ
レインのおかげでこのような作業のスピードは今までより倍以上の速さになった

『マスターチェック終了しましたオールグリーンです』
「そうかご苦労レイン、それといい加減マスターではなく名前で呼べ」
『そ、そんな恐れおい！／／／それにキョウスケ様を名前では恥ずかしくで呼べませんよ／／／もごもご・・・』
「ん？何か言ったか？」
『い、いえ！なにも／／／』
「そうか？ではまた後で会おう」

俺はコクピットから出たら

「総員第一戦闘配備！繰り返す！総員第一戦闘配備！」

俺は急いでパイロットスーツに着替えアルトに乗り込む

「レイン！出るぞ！」

『は、はい！』

「初の戦闘だ、落ち着いて行こう」

『ハイ』

「進路クリアー発進どうぞ！」

「アルトアイゼン・リーゼ、キョウスケ・ナンブ出る！」

俺はアルトを発進させた今回は少佐とキラが空中戦を担当し
俺が水中を担当することになった
アルトはあらゆる環境での活動が可能となっている
理由はもう一つはアルトはビーム兵器が少ないのが理由でもある
今回は接近戦で行くつもりだ
俺は海中に飛び込んだ

「敵機は？」

『来ました！１２時の方向です！』

俺はレインの情報を元に機体の体制をたてなおし
敵に備える
１２時の方向から来たのはグーンだ

ＵＭＦ－４Ａグーン

ザフト軍の主力水中ＭＳ
左右前腕部に７連装ミサイル、フォノンメーザー砲を装備する。クローは装備していない
地球へ向けた大規模侵攻作戦、オペレーション・ウロボロスに合わせて開発されたザフト軍初の水中用ＭＳ

設計はプラントの兵器設計局クラーク局が担当
公式デビューは「血のバレンタイン」の約1ヵ月後のC．E．70年3月15日
連合艦艇や商船等の破壊による海洋補給線の寸断、沿岸拠点への揚陸作戦を目的として設計された
イカの様な流線型のフォルムを持ち、高速移動時はより水流抵抗を抑えた巡航形態に変形する
この状態では水上をジェットボートのように滑走する事も可能である
また、水中型独特の装備としてサメの感覚器であるロレンツィーニ器官を人工的に再現した周辺電位センサーを標準装備している
地上での歩行機能も有しているが、通常のMSに比べ機動性は劣るため、後にこの欠点を改善した後継機種ゾノが開発された
MS戦闘用には開発されていないため格闘専用の武器は装備されておらず
近接戦闘では体当たり攻撃しか攻撃手段を持たない。本機の主な戦法は高速で目標に接近し
気づかれる前に攻撃を開始し撃破するというものである
『SEED』では、マルコ・モラシム隊が搭乗し、紅海洋上を航行中のアークエンジェルを襲撃
キラ・ヤマトの搭乗するストライクと交戦した

武装

533mm7連装魚雷発射管
両腕に1門ずつ装備している
ロケット推進式であり、陸上での使用も可能になっている

フォノンメーザー砲
水中でも使用可能な音波兵器であり、胸部に2門装備している

フォノンメーザー自体は見えないので同軸発射されたレーザーで発射角を確認する

４７ｍｍ水中用ライフルダーツ発射管
巡航形態でのみ使用可能となっている

１０３０ｍｍＭ－７０スーパーキャビテーティング魚雷
魚雷全体を細かい気泡でマスクすることで水流抵抗を飛躍的に減少させ、超音速の雷速を発揮する魚雷
このため気泡により明瞭な雷跡が残るが、目標が音波探知をするよりも早く目標に命中する

グーンは接近してくるがアルトには好都合だ

「行くぞ！レイン！」
『はい！！』

一気にバーニアを吹かしグーンにリボルビング・バンカーを打ち込み破壊する
残りの２機のグーンは距離を取ろうと後退するが

「そうはさせん！！」

一気に接近しバンカーで破壊し残りの１機のバンカーで突き刺し一気に浮上しながら打ち込み、海中から出た所で爆発した
空中はどうやらディンは片付いたようだ
俺は再び海中に戻りボズゴロフ級に向かった

ボズゴロフ級

Ｎジャマー（ニュートロンジャマー）の影響下での運用を目的に建造された大型潜水母艦
一部開戦後地球上で建造されたものもあるが、多くは衛星軌道上で建造され
地球侵攻初期に「竹とんぼ」と呼ばれる特殊モジュールを用いて海面に投下されたものである
ザフトには水上艦艇はほとんど存在せず、こうした潜水艦が海洋戦力の要となっている
艦首外殻外両舷に４本のドライチューブを持ち、１本につき２機の水中戦用ＭＳを搭載する
上部には大型ＶＬＳ（垂直射出装置）が、ＭＳ用に３基、ＶＴＯＬ機用に４基あり、展開式の垂直リニアカタパルトを備えている

武装

魚雷発射管×８

ＶＬＳ×多数

ゾノが発進しようとしていたのでフルブーストで突撃し
魚雷を撃ってくるが全て回避しゾノをバンカーで串刺しにしそのまま押し込む

「打ち込む！！！」

ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！
潜水艦は大爆発が起きた
アルトも巻き込まれたが損傷一つなかった

「レイン、アルトには問題ないか？」
『少しお待ちください・・・大丈夫です、あっ』
「どうした？」
『キラさんから通信が入ってます』
「では繋いでくれ」
『はい』
「あっキョウさんお伝えした事が・・・」

ん？元気がないな

「実は無能が無許可でスカイグラスパーに乗って行方知れずになったです」
「・・・まさか探せとか言う事じゃないだろうな？」
「・・・艦長は人道的な立場かな探してほしいそうです」
「はあ・・・」

俺は大きなため息を吐いた

舞台は海へ（後書き）

作「次回機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　古しえの鉄の巨人に乗る介入者
無能女王はどうなるのか？
正直どうでもいいけどね・・・」

キャラ設定（前書き）

作「今回はキャラの設定ですではどうぞ！」
キョウ「・・・こんなのでいいのか？」

キャラ設定

キラ・ヤマト

年齢：１６歳

趣味：プログラミング、コーヒー作り

もう一人の主人公
キョウスケが介入した事でキラの運命は大きく変わる
ヘリオポリスでキョウスケと出会いキョウスケの力になりたい、友達を守りたいという願いから戦いを決意する
原作とは違いフレイとは友好な関係を築き艦内でもとても評判がいい
友人関係が良好なため心に余裕ができ陽気さが出てきている
無能には容赦なく暴言を吐くなど
以外に毒舌でもある
ラクスに恋心と憧れを抱いている
キョウスケとはともに特訓をし日々腕を磨いている
そのためキョウスケとは師弟の仲になっている
現在の目標はキョウスケの右腕になる事
因みにキラがコーヒーを作るとコクが深く甘みがあると言う飲み易い物になる
キラが苦いものがあまり好きではないため
大人の味とはいえない

アスラン・ザラ　（ホモラン・ザラ）

年齢：１６歳

原作ではキラの親友と言うポジションだったがキョウスケが介入した影響とは定かではないが
キラにしつこく付きまといキラからは完全に軽蔑、害虫を見る目で見られている
クルーゼ隊の全員から避けられている
キョウスケにイージスを修復不可能まで破壊された責任を取られ緑服に降格された
キラへの友人としての思いは同性愛に最悪の形に進化する
キョウスケの事はラクス返還時に通信で顔を見た為毎晩毎晩わら人形に釘を打ち続けているが効果はない（当たり前）
ＺＡＦＴでも居ない方がいいと思われている戦闘要員ナンバー１に輝いてる

消えろアスラン！俺と僕の視界から！！（前書き）

キョウ「今回のサブタイトルは明らかにキラ視点ありだな」
作「今回は極めて不服の極みですがホモランと無能の共演です」
キラ「勘弁してくださいよ・・・」
作「何気に前書きにキラ初登場ですよね？」
キョウ「いきなりの登場だな」
キラ「僕も何故か召集されたんですよ」
作「それについてはすみませんでしたでは今回の前書きはここまで！」
作、キョウ、キラ「「「では本文をお楽しみください！」」」

消えろアスラン！俺と僕の視界から！！

キョウサイド

俺は今大変不服の極みである無能の捜索活動をしている

「レイン・・・見つけなくてもいいがどうだ？」

『いえ・・・救難信号なんかを探していますが見つかりそうにありません・・・ていうか見つけなくていいじゃないんですか？』

「僕もレインさんと全く同意見です」

因みにキラにもレインの事を話してある

『キラさん私の事は別に呼び捨てでいいのですが・・・』

「いえキョウさんのパートナーですから」

『い、いえ！わ、私は唯のマスターのサポートで・・・／／／／／／』

「・・・キラ・・・」

「はい？」

「もう帰っていいか？」

「・・・一応探しましょうあの無能にＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩしてやりましょう」

「まあ制裁を加えてやるか・・・」

『探す目的それですか？まあ私も賛成ですけど』

何だかんだ言ってレインは何時だって俺の味方をしてくれる

俺達は宛もなく適当に無人島を探していた

キョウサイドアウト

キラサイド

僕とキョウさんは機体から降り無人島で無能に呼びかける

「おい無能～いるなら出て来～い貴様のおかげで無駄に力を使っているんだ
出てこないなら馬鹿と無能が破滅的な加速で進行するぞ～」

キョウさんの声にはもはや生気され感じられない完全棒読みだ
僕も一応呼びかけてみる

「お～い出てこ～いこっちの水は甘いぞ～無能～出てこ～い出ないと置いてくぞ～つか出て来なくていいけど～てか来るな～」
「キラそれ色々と可笑しいだろ?面白いがな出てこなくていいというのは同感だ」

うん、やっぱりキョウさんとはシンクロ率が高い
すると僕にとっては最悪の事がおきた・・・

「キィィィィィィィィィィラァァァァァァァァァーーー!」

ぎゃ～!!!!!!ホ、ホモラン・ザラ!!!!!
まだ生きていたのか!!!!まずい!僕の童貞の危機だ!!!!
いや落ち着け!!奴の命の鼓動を完全に消してやるんだ!!!!
(キラそれで認識してるんだしかも言ってる事恐いし・・・(「Д」;;;)↑作者の声

「貴様ぁぁぁぁ～～!!!!よくもぉ～～!!!!俺のキラをまど

ましてくれたなぁ～～～！！！！！」

うっしゃあ！！キョウさんの方に意識が行ってる！！
僕は害虫の不意をつき顔にドロップキックを決めた
（害虫って・・・あんた・・・（ Д｜｜ ；；まあその通りか（＾∇＾）

「ぐへぇ～！！！！な、なにをするだ！？キｒぐほぉわ～！！！」
「くたばれ！！！」

キョウさんがあいつの顔にパンチを決めた
パンチといっても数回の分のパンチを一回に凝縮したような奴だけど
（釘パンチですかい！？？（ Д｜｜ ；））

「死んでろ！この凹凸ハゲド変態ホモ虫野郎！！！！」
（いいぞ～！！もっとやれ～！！！ｖ（ ｌ｜ ）ｖ）
「キョウさん！僕が止めをさします！！」

キラは指の骨を鳴らしホモランに向かう

「待てキラ！！そいつの声に耳を貸すな！！思い出すんだ！俺と一緒に手を取り合って過ごした日々を！！！！！！！」
「誰が思い出すか！！！！あんな悪夢！！！！この凹凸ハゲド変態ホモ虫野郎！！！」

キラは思い切りホモを殴りつける

「ぐへぇひゃ～！！！だけどキ・・ラお前から受けた・・・ダメージなら・・・最高ぉ・・・」

コイツ・・・Mだったのか・・・直ぐに消してやる！！

「やめろぉ～！！」

無能がホモを助けようとこちらに向かってきた

「邪魔だ！」

キョウさんが無能を押さえつけてくれて僕にナイフを投げ渡してくれた

僕はナイフを受け取りナイフで止めをさそうとするが

銃声によって固まる

誰が撃ったんだ？

キョウさんではない銃は握っていない

「すみませんがそこまでにしてくれませんか？」

振り向くとエースパイロットの証である赤いパイロットスーツを着た緑色の髪をした少年が銃を握っていた

「君は？」

「僕はクルーゼ隊ニコル・アマルフィです、大変極めて不服ですがそのクズホモを回収しに来ました」

「そうか・・・君も大変だな」

キョウさんはホモをロープで縛りニコルという少年に引き渡す

「ありがとうございます、このホモはビクトリアの激戦区に送られますご安心してください」

「それは本当ですか！？」
「はい！」
「よかったぁ・・・」
「良かったなキラ」
「はい・・・幸せです・・・」

因みに口もロープで塞いでいます

「！！！！！！！！！」
「何言っても聞こえん」
「じゃあ僕はこれでこのホモがご迷惑おかけしました」
「いや君も元気でな」
「はいでは」

ニコルはブリッツに乗りホモを手荒く持って去っていった

「さあキラ俺達も無能を回収して帰ろう」
「はい！」

僕は喜びに浸りながらアークエンジェルに戻った

消えろアスラン！俺と僕の視界から！！（後書き）

今回の会話はなしとさせていただきます

作「財団よ！私は帰ってきたぁ」キョウ「・・・今すぐくたばれ！クレイモア！」

キョウサイド

俺たちはようやくオーブに到着した
途中ニコル達が攻撃を仕掛けてこなかったのはおそらくホモのせい
だろう
まあ彼にとはまた会いたいものだな
さて俺はオーブの獅子と言うより猫ウズミと艦長達と共に会談をした
俺の姿を見たらとても驚いていた
無能も俺の正体を知ったら青ざめていた
会談が終った後俺は艦長たちと別れ艦長達に俺の事ともう一つの事
を許可を貰い
アルトに乗り財団に向かった
財団に向けて通信を開いた

「こちらアルトアイゼン・リーゼ、キョウスケ・ナンブだ」
『ま、まさか！！！キョウスケ様ですか！？』
「ああ俺だ、悪いが直ぐに海中のハッチを開けてくれ」
『は、はい！！ただいま！！』

程なくしてハッチが開き海中ハッチからドックに入った
そしてアルトを固定しコクピットを出ると社員に囲まれた

「キョウスケ様！」
「キョウスケチーフ！！」
「ご無事で何よりです！！」
「よし！我らの創始者様を胴上げだ～！！」
「「「お～！！」」」×多数

皆は俺を持ち上げて胴上げを始めた

「お、おい！よせって！こらっ！」
「わ～っしょい！わ～っしょい！」
「いい加減に降ろせ！」
「いいじゃないですか」
「Ｏ・ＲＯ・ＳＥ！！」

俺はようやく降ろしてもらった

「さて俺もついに世間に顔を出さなきゃならないのか・・・」
「それなら会長と社長達が手を打っておくって」
「手回しが早いな・・・」
「それよりキョウスケ様は何かやる事があるじゃないんですか？」
「お見通しか・・・連合軍が幼い子供達を使って薬物を使い人体実験をしコーディネーターに対抗しようとしている」
「そ、そんなことを！！！」
「ゆるせねぇ！！」
「俺が行き助けに行く」
「アルトで？」
「アルトは今までの戦闘で機体は酷使させているアルトは俺の相棒だアルトのオーバーホールを頼む」
「「「「了解！！」」」」
「俺はヴァイサーガで出る！」
「「「「了解！！！」」」」

俺はヴァイサーガに飛び乗り起動させた

「ヴァイサーガ！キョウスケ・ナンブ出る！」

俺は発進させヴァイサーガに新たに積んだステルス機能に最大にしてロドニアに向かった

まってろよステラ、スティング、アウル！

ロドニアのラボ　ステラ達の救出（前書き）

作「今回はキョウはロドニアのラボに向かっているため俺だけです
では本文をお楽しみください」

ロドニアのラボ　ステラ達の救出

キョウサイド

俺はヴァイサーガを飛ばしロドニアのラボに向かっている
ここでヴァイサーガの事を話すとしよう

ヴァイサーガ

Ａ……主人公機のひとつ
スーパー系であれば男女とも選択可能
機体動力は電力を基本とするが、生体エネルギーも使用している模様
間合いを詰めての斬り合いに重点を置いており、マント型のシールドも備える
安定した運動性・装甲値に加え分身による回避も可能と、非常にバランスがとれた機体
ソウルゲインと同様にダイレクト・フィードバック・システムが採用されている。主人公が搭乗機に選ばなかった場合
ライバルあるいは一部のシャドウミラー兵が搭乗する
ヴァイローズとの設定上の関連性はない
ＯＧ２……特定条件を満たすと入手可能な隠し機体で、ラミア以外のパイロットは乗り換え不可
剣撃戦闘用の機体で鉤爪や苦無、五大剣などを用いる
製造に関する工程は一切明らかになっていない。ダイレクト・アクション・リンクシステムは搭載されておらず、機体追従性はソウルゲインに劣るが最大戦速では上回る
『ＯＧｓ』では飛行不可
ＯＧ外伝……終盤に自動的に入手
ＯＧＩＮ……大破したアンジュルグに代わり、ラミアの機体として

登場

武装

五大剣の名称を始めとして、武装には地・水・火・空・風の五大の要素が取り入れられている

五大剣（ごだいけん）

左手に保持する長剣

本機の主武装である

烈火刃（れっかじん）

命中すると燃え上がる苦無を多数投げつける

水流爪牙（すいりゅうそうが）

両手の装置からエネルギーの鉤爪を伸ばして切り裂く

必殺技

地斬疾空刀（ちざんしっくうとう）

剣から発生させた衝撃波を浴びせる

風刃閃（ふうじんせん）

飛び上がって剣を高速で振り回し、発生した衝撃波で敵を地面に縫いとめ、落下しつつ突き刺して締める

奥義・光刃閃（おうぎ・こうじんせん）

剣を構えて突撃し何度も斬りつけ、自機の姿を一瞬消した後に居合の要領で一刀両断する

新たに積んだステルスシステムはホログラフィックカモフラージュ

とマントに新たに機能を付けたのだ
ホログラフィックカモフラージュは勇者王ガオガイガーのボルフォッグに搭載されてあるホログラフィックカモフラージュを独学を視覚を完全に理解しこいつをヴァイサーガに搭載したのだマントには可視光線や赤外線を含む電磁波を遮断する仕掛けを施し隠密活動ができるようにしたのだ

『マスターもうじきロドニアです』
「ああそうか・・・!?」

マスター!?

「なぜここにいる!レイン!!?」
『じ、実はあの時、マスターがヴァイサーガを起動させた時通信回線を通じてヴァイサーガに入ったんです』
「そんな事もできるのか・・・」
『はい、成長型ＡＩですから』
「にしても成長速度が速いと思うが?」

確かにレインは様々事を吸収して成長するように構築はしたが幾らなんでも早すぎる

『じ、実は・・・マスターが居ない時にハ、ハッキングを行って・・・マスターのお役に立ちたくて・・・』
「・・・」
『マ、マスター?』
「はあ・・・しょうがないな・・・まあ俺のためにやったんだろう?今回は許そう」
『マ、マスター!!』
「だが今回の作戦は俺が敵の防衛機能をジャミングや戦闘で麻痺さ

せた後俺が救出した後機体制御を頼むぞ」
『え!?私がですか!?』
「可能だろう?頼むぞ信頼してるぞレイン」
『ハ、ハイ!!!』

そう言ってる間にラボの上空に到着した

さぁて戦力はリニアガン・タンクが多数か・・・

「ジャミング開始・・・」
『ジャミングプログラムを起動しますジャミングＭＡＸレベルで発動します』

ジャミングが更に妨害を開始ラボは混乱が始まる
俺はその混乱に乗じて烈火刃をリニアガン・タンクで破壊しラボの防衛機能を破壊し
ヴァイサーガを降りレインに機体防衛をまかせ俺はラボに乗り込んだ
中は研究員や武装した兵士のような輩がいたが日本刀を持っていたので全員みねうちで気絶させながら進んだ
それにしてもさすが身体能力ＭＡＸの身体だ
銃の弾も簡単に避けられる
そしてパソコンを見つけたのでアクセスを始めた
・・・くそっ胸糞悪いな
・・・オルガ達は出た後か・・・!よし!まだステラ達は無事だ!
介入した影響があると思ったが大丈夫そうだな
この隣だ
俺は直ぐに隣行ったらスティングが3人を慰めていた

「・・・無事か?」
「だ、だれだよぉ!!?」

「俺は君達の敵ではない」
「うそ！」

ステラは俺の腕に噛み付いてきた

「！！」

力が強いやはり薬物強化か・・・
俺はステラを抱きしめた

「！！」

ステラは驚いたように噛み付くのをやめた

「・・・大丈夫だ、君は死なない君は俺が守るからな」
「！！・・・本当ぉ？ステラやスティング、アウル・・・死なないの？」
「ああ、俺はナンブ財団の人間だ、君達は普通の生活を送れるんだ」
「ほんとうなのか！？」
「ああ来る気はあるか？」
「いいのか！？」
「ふっ・・・良いに決まっている俺は君達を助けるために来たんだ行くぞ」
「おう・・・」
「ああ・・」
「ステラ・・・恐い・・・」

ステラは恐がるように俺にすがり付いてくる

「大丈夫だよステラ」

「安心しろよ俺達がいるんだから恐がるなよステァラ」

ステラはスティングとアウルを慰めながらラボを出てヴァイサーガに乗りステルス機能をＭＡＸレベルをし財団に戻った
財団に到着したらステラ達には怪我があったので治療を頼んだ
財団の治療施設があるから薬物による禁断症状も簡単に治療できる
俺は治療施設に力を入れていたからな
治療が終わり３人が俺の部屋に入ってきた

「どうだ気分は？」
「なんか・・・自由ってのはむずがゆいもんだな・・・」
「ああなんかなれないって言うか・・・」
「ステラも・・・」
「まあ今までが今までだしな君達は財団で保護するから心配する必要はないからね」
「あ、有難う御座います！！」

スティングが頭を下げてきた
そしたらアウルの腹がなった

「あ・・・」
「アウル・・・おまえなぁ・・・」
「わ、わりぃ腹減っちゃって・・・」
「ふっ大丈夫だ食事の支度はさせてあるから多分もうそろそろ・・・」

コンコン
ドアをノックする音がする

「どうぞ」

「失礼するぜ」

入って来たのはミゲル・アイマンだ

「何だミゲルもう来たのか？」
「ああ早いほうが良いって言ってただろう？」
「悪いそうだったな」
「それとメシの支度ができたそうだ」
「解ったさあ3人とも食事だぜ」
「よっしゃ！」
「アウル！」
「ステラ・・・楽しみ！」
「ステラまで・・・」

俺は3人を連れて食堂に向かった
ついでに何故ミゲルがいるというと・・・
駄作者のわがままだ・・・
だから作者権限を使いミゲルを財団に入れたのだ
因みにミゲルの機体はグルンガスト壱式だ　（オレンジ色だ）
本人の希望で参式では壱式にしたのだ

モルゲンレーテへ（前書き）

キョウ「それにしてもステラ達の相手は疲れるな・・・」
作「なぜ？」
キョウ「財団は様々なジャンルに手を出しているだろう」
作「ええゲームとか薬品とか服とか色々やってますね」
キョウ「ステラ達が財団の作ったゲームとか色んな服に興味をもってな
その相手をしてたんだ」
作「まあ今までが今までですから」
キョウ「まあ笑顔だったから良いがな」
作「では！前書きはこのぐらいにして、本文にいきましょう！」
作、キョウ「「では本文をお楽しみください！」」

モルゲンレーテへ

キョウサイド

俺が財団に帰って1日が経過した
俺がいない間の事を確認すると新しく機体を開発したらしい
開発したのはＳＲＸ計画のＲシリーズ
一応頭の片隅で作ろうと思ってはいたがまさか完成させてしまうとは・・・
はあ・・・
そして今はミゲル、キラと共にモルゲンレーテに向かっている
キラはストライクに乗り俺とミゲルはストライクを先導している車に乗っている
ミゲルは俺の護衛として乗っている
俺はキラと一緒に良くと入ったが本当に許可が下りるとは思わなかった
そして巨大なエレベーターに乗り地下に向かった

「ここって…」
「ここならストライクの完璧な修理が出来るわよいわば、お母さんの実家みたいなもんだからこっち！貴方に見て貰いたいのは」
「実家・・ねぇ」
「言ってやるなよミゲル」

俺達はエリカ・シモンズの案内で進んでいくと目の前にストライクに似ている機体が現れた

「ほう・・・これは・・・」
「ストライクのエールに似てますね」

「機動性を重視してこんな形になったってわけか」
「その通りよこれはＭ１アストレイ、モルゲンレーテ社製のオーブ軍の機体よ」
「これが・・・オーブ軍の機体・・・ねえ・・・俺のグルンガストに比べたらこんなの・・・」
「ミゲル比べる対象を間違ってるぞ」
「でオーブはどうするつもりなんですか？」
「これはオーブの守りだ
お前も知っているだろ？オーブは他国を侵略しない。他国の侵略を許さないそして、他国の争いに介入しない
その意志を貫く為の力さ」

なぜかいた無能が答えた
しかも頬には叩かれたような痕がある

「貴様には聞いてない」
「あれが噂の無能か・・・」
「・・・さ、こんなおバカさんは放っといて、来て！」

俺達はエリカの後に続いて演習場のような場所で先ほど見たＭ１が３機スタンバイしている

「アサギ、ジュリ、マユラ！」
「「はーい！」」

Ｍ１から３人の声がする

「女のパイロットか」
「あ！カガリ様？」
「あら、ほんと」

「なーに、帰ってきたの？」
「悪かったなぁ」
「始めて！」
「「はい！」」」

3人は機体を動かし中国拳法のような型を取るが動きが遅すぎて太極拳にしか見えない

「相変わらずだな」
「でも、倍近く速くなったんです」
「これで倍！？」
「けどこれじゃぁ、あっという間にやられるぞ何の役にも立ちゃしない、ただの的じゃないか」
「貴様が言うな無能」
「なにぃ！！」
「バズーカ片手にバクゥに無茶な戦いを挑んだ無能が言う事じゃないでしょ」
「マジかよ？」
「ああマジだ、だがそんなOSでこれだけ動かせているのは感心するな」
「あああんなOSなのにあれだけ動けるだけどもたいしたもんだ」
「技術協力をお願いしたいのは、あれのサポートシステムのOS開発よ」
「それなら直ぐに終わりますね」
「ああ」

俺は持ってきていた2つのノートパソコンを取り出す

「さあキラさっさと終らせるぞ」
「はい」

俺達は空いている机と椅子を借り作業にかかった

「・・・どうだキラ？」
「こっちはあと少しです」
「ええっ！！もう！？」
「「・・・よし！できたぁ！」」
「「「はや！！」」」×モルゲンレーテの職員達

「さっそくＭ１に」
「え、ええ」

エリカにデータを渡しＭ１に搭載する
そして動き始めると先ほどとは恐ろしく機動性が上がっている

「新しい量子サブルーチンを構築して、シナプス融合の代謝速度を４０％向上させ、
一般的なナチュラルの神経接合に適合するよう、イオンポンプの分子構造を書き換えました」
「それをたった十分で！？すごいわね、ほんと」
「アサギ！上がっていいわよ！」
「はーい！」
「じゃあ俺達も上がるか」
「そうですね」
「そういえばミゲル、グルンガストの操縦には慣れたか？」
「ああ最高の機体だぜ！パワーも最高だぜ！」
「そうかじゃあ市街地に言ってなんか食って帰るか」
「そうだなでも金は？」
「俺持ちだ」
「じゃあ行くか」

「僕も良いですか？キョウさんのおかげで早く終りましたし」
「艦長に入ったのか？」
「一応報告したら許可貰いました」
「じゃあ行くか」

俺達は市街地に向かった

「さてなに食うかな？」
「なら寿司行かね？」
「寿司か・・・」
「ミゲルさんお寿司食べたいんですか？」
「ああ一度食ってみたくてな」
「じゃあ寿司にすっか」

俺達は適当（高級）な寿司屋に入った
ミゲルは初めての寿司を堪能した
ミゲルはトロとイカ、鯵が気に入ったらしい
キラはネギトロとイクラ、うにが気に入った
ミゲルとキラは寿司を食べて大満足
会計は日本円にして１７万５８６０円だった
まあ俺のポケットマネーで十分足りたけどな
（いやどんだけ持ってるんだよ！　？（；￣□￣Ａ）
「にしてもお前財布に金入れすぎだろう？」
「そうか？」
「そうだよなんで２０万も財布から簡単に取り出すんだよ・・・」
（マジッすか！？？（Д￣；））
「いまでも十分普通に最新式のパソコンも買えるぞ？」
「さすがキョウさんですね♪」
「それで納得するしかないか」

俺はステラ達にお菓子などのお土産を買いキラはアークエンジェルに
俺とミゲルは財団に帰った
財団にも菓子などもあるがお土産で渡したほうが喜ばれると思ってな

そして財団に帰りステラ達の部屋に向かった

「ステラ、スティング、アウルお土産買って来たぞ」
「あっお兄ちゃん！！」

ステラは俺に抱きついてきた

「お帰り♪」
「ただいま」
「あっおかえりなさい兄さん」
「お帰り兄ちゃん」

何故俺が兄と呼ばれるというと3人が勝手にそう呼んでいるだけだ
ミゲルからは

「いっその事、義理の弟と妹になってもらえばいいじゃね～か」

と言われた
俺は買ってきたお土産を渡した

「やったぁ！ステラこのお菓子大好き！」
「よっしゃ！この菓子食いたかったんだ！」
「ありがとう兄さん」
「礼はいらんよ」

この後ステラ達と共に菓子を食べ一緒に訓練に向かった

まだステラ達の機体は決定してはいない
さてどんな機体になるのかな？

モルゲンレーテへ（後書き）

作「さてここで再びアンケートです
ステラ、スティング、アウルの機体を募集したいと思います」
キョウ「皆様のご協力をお願いします」
作「まあそれは考えるとしてでは今回の後書きはここまで！」
作、キョウ「「では次回またお会いしましょう！」」

アルトの強化パーツ　封印した力（前書き）

キョウ「今回は明らかにアルトの魔改造が目的か？」
作「魔改造って言うなぁ！アルトを唯弱点を少しでもカバーしようと思ってるだけだ！」
キョウ「どっちしろ魔改造だろうがぁ！！クレイモア！！」
肩のクレイモアのハッチ解放
ガシャン！！！
ドガガガガ！！！！
作「うぎゃはらは～！！！！！！！」
ドゴ～ン！！！！！
キョウ「・・・そろそろ前書きは終わりにします、では本文をお楽しみください」

アルトの強化パーツ　封印した力

キョウサイド

俺は今ステラ達の訓練を見守っている
財団の訓練設備は地下数百メートルに位置している
どうやら俺が財団の執務室で目覚める前の俺はとんでもない人間らしい
まったくどうやって掘り進んだのか・・・
さてステラ達は訓練用にカスタマイズしたゲシュペンストを使っている
ふむ・・・3人とも驚くほど巧く動かせている
アウルにいたっては・・・

「きゅうきょ～くぅ!!!ゲシュペン～ストキィィィクゥゥゥ!!!!」

・・・ゲシュペンスト究極奥儀を的にしている巨大な壁に決めている
まさか俺がやった映像を見ただけで再現してしまうとは・・・
もちろんステラとスティングも完成度が高いものを叩き出している
全くあいつ等のセンスは目を見張りってレベルではないな
3人がゲシュペンストから降りてきた

「お疲れ様3人とも」
「ねえねえお兄ちゃんステラどうだった?」
「ああとってもよくできたぞよくやったなステラ♪スティング、アウルも凄まじかったな」

俺はステラの頭を撫でながらスティング達も褒める

「えへへ♪」
「兄ちゃん俺の奥儀どうだった?」
「完成度高すぎるだろう?お前ら?」
「よっしゃ!!」
「でもアウルよくあの前口上あんなハイテンションで言えるな・・・
あのテンション兄さん以上じゃないか」
「テンションあげたほうがいいじゃん!」
「そうかぁ?冷静さを失うだけだと思うけどな?」
「お兄ちゃん♪」
「キョウスケ様」

女性整備員が俺に話しかけてきた

「お話があるのですが・・・」
「・・・解った・・・3人ともゆっくり休んでくれ」
「え~お兄ちゃんと一緒がいい~」
「また後でないい子だからな?」
「・・・うん・・・」

ステラは渋々了承してアウル達と一緒に自分達の部屋に戻って言った

「で?どうした?」
「はい・・・アルトの件です」

・・・やはりか・・・

「アルトのオーバーホールは順調に進んでいますがだいぶ無茶が重
なってまだ時間がかかるそうです」
「むう・・・」

「アルトの更なる強化パーツも付けるべきではないかと懸念がチーフから出ています」
「・・・リーゼドラグーンか・・・」
「はい・・・アルトの弱点である遠距離から攻撃に対する武装です」
「・・・ヴァイスはどうした?」
「ヴァイスはラインヴァイスも稼動は可能ですがヴァイスに適合できるパイロットが居ません
適合できるものは居ますがかなり適合数値が低いものです」
「ほとんどのパイロットと相性が悪いか・・・」
「ええ・・・キョウスケ様・・・自分が言える事ではありませんが・・・」
「なんだ?言ってみろ?」

整備員は言いにくそうに口を開いた

「シークレットナンバー1を使うべきではないでしょうか?」
「・・・」
「アルトよりパワーも出力も上ですし・・・」
「・・・」
「あの機体を嫌っているのは解りますが・・・」
「・・・考えておこう報告有難う」

俺は礼をいいその場を去った
俺は訓練区域より更に地下に向かった
極秘ブロック・・・
俺の指紋、網膜、声紋、静脈パターンをチェックし極秘ブロックに入った
そこには俺が最も嫌っている機体が眠っている
通常の特機より大きく凶悪な頭部
獣を思わせる手と脚・・・

厳重に巻かれた特機のパワーでさえ破壊するのが難しい鎖で拘束されている機体

「・・・ベーオウルフ・・・」

最強の特機・・・
使用とすれば７０パーセント強の確率で暴走する
搭乗者の命を食らう悪魔

「・・・やはり無理だ・・・」

俺は再び厳重にロックを掛けてステラ達のもとに向かった

アルトの強化パーツ　封印した力（後書き）

作「ええ～と今回は会話なしとさせていただきます」

封印された力の真相（前書き）

作「今回はキョウスケがベーオウルフを嫌う理由が明らかになります」

封印された力の真相

キョウサイド

地上に戻ったらステラ達と一緒に食事を取り
適当に遊び相手をしステラ達は眠りに付いた
ステラは俺と寝ると聞かなかった何とか解ってくれた
俺は自分の部屋に戻りパソコンを開きキーボードを叩きながら考え事をする
そしてあるファイルを開く
ファイル名　『ベーオウルフ』

「ベーオウルフ・・・俺が作り上げた最強の特機であり最恐最悪の機体・・・か・・・」

俺がこれほどまでにベーオウルフを嫌うのは時を遡る必要がある

俺が転生して直ぐの事だ
俺は社員達と共に家族とも言える財団の皆を守るために以前から考えていた
特機を開発することにした
それがベーオウルフ・・・
ベーオウルフには搭乗者とシンクロする生体コンピューターが搭載されている
これにより機体と搭乗者と一体化し操縦性をあげるのだ

俺もこれを開発した当時はより細やかな動作　柔らかな動きなどを再現するために生体コンピューターを搭載したのだ
パワーも出力も申し分ない
実際俺はジ・インスペクターを見ていたのであの機体を再現してみたいという気持ちから作った物だった
・・・今思ってみればそんな考えが間違っていた
そしてベーオウルフの稼動実験
財団の特機の乗るパイロットの中でもエキスパートである　アエル・オーガに頼んだ
財団の部隊は全部で１２部隊ある

第２部隊　部隊長　エビル・サルム
第３部隊　部隊長　ガイ・シェード
第４部隊　部隊長　クリン・エピレ
第５部隊　部隊長　サニー・アフロディーチ
第６部隊　部隊長　アエル・オーガ
第７部隊　部隊長　パルス・バース
第８部隊　部隊長　ガウル・ウインドゥ
第９部隊　部隊長　サエル・シェード
第１０部隊　部隊長　ヴァル・パラディン
第１１部隊　部隊長　ミハエル・キラーズ

第１２部隊　部隊長　ファエリナ・エミィー

そしてそれらを統括する第１部隊　その部隊長がこの俺　キョウスケ・ナンブだ
その稼動実験中の事だ

ビィービィー！！！

「なんだ！」
「出力がパイロットの意思とは関係なく上昇していきます！」
「なに！」
『キョウスケ様！コントロールが！』

アエルの焦りが伝わってくる

「待っていろ！すぐに緊急停止信号を送れ！」
「はい！・・・だめです！受信しません！」
「なにぃ！！！」

ベーオウルフは自らの意思を持つように動き始める

「くっ！暴走か！エビル！！」
『はい！』

エビルはダイゼンガーの乗り手である
示現流の達人でもある
第２部隊は特機を始めパワーが売りである部隊だ
一応制御不能になった時のために機体で待機してもらったのだ

「ダイゼンガー！アウセンザイター！グルンガスト壱式！弐式！参式！を連れてこっちに来てくれ！！！
ベーオウルフを取り押さえろ！アエルを救い出すんだ！」
『了解！！』

すぐさまエビルが来てベーオウルフを取り押さえ何とかアエルを救う事ができた
だが恐ろしいパワーだった
俺が予想したパワーを簡単に上回った
この5機でも押さえつけるのがやっとだった
アエルに怪我がなかったのは良かったが・・・
アエルには謝罪と詫びの金を渡した
アエルは自分が悪い、受け取れない、謝らないでくださいと言っていたが開発した俺の責任だ
俺がやるべきだったのだ・・・
後日俺が稼動実験を行ったが
俺が制御したが暴走する一歩手前までで押さえつけるのがやっとだった
ベーオウルフを降りた後は凄まじい疲労感、激痛が襲い　俺はすぐさま医務室送り
2週間の間医務室から出る事ができなかった
その間社員達が俺の世話を焼いてくれた
主にアエルやサニー　ファエリア　サエル　パルス女性陣がね
世話を焼いてくれるの嬉しいのだが
何故か彼女達は嬉しそうだったが・・・
そしてベーオウルフを全部隊長と共に地下深くの極秘ブロックに封印したのだ
・・・・・・・・・・・・

「・・・そして俺は今　巨人（リーゼ）と共に戦うっているか・・・」

俺はステラ達の部屋でステラ達の寝顔を見ている
幸せそうに眠っている
この笑顔が続くような世界になってほしいものだ・・・
ステラ達の部屋を出て俺の部屋のバルコニーに出て風に当たる
いつの間に夜になっていた
俺は夜風に当たりある事を決意しパソコンに向かい合い再びキーボードを叩き始めた

封印された力の真相（後書き）

キョウ「新キャラ出すぎだろう？」
作「まあいいじゃないですか」
キョウ「この駄作者は・・・アインストに引き渡すか・・・」
作「マジ勘弁してください！！！！」
キョウ「では今回はここまで次回またお会いしましょう！」
作「あっ・・・俺スルーされた・・・」

クラインとの接触

キョウサイド

俺は今プラントにいる
クライン派を始めとする和平派と会談するためだ
俺のデータは偽造しオーブ出身のコーディネーターという事のなっている
目的はフリーダムだ
キラにとって必要な剣だ
俺はシーゲル・クラインとの会談を終えラクスとの会談に入った

「お久しぶりですわ♪キョウスケ様」
「ハイお久しぶりです」

俺は用意されていた席に着く

「紅茶はいかがですか？」
「貰います」

ラクスは紅茶を入れて俺に出してくれた
ズズズッ・・・ゴッック・・・
ほのかな甘みが美味い・・・
コーヒーもいいが紅茶もいいな
紅茶のカップを置き口を開く

「でプラントはどんな状況ですか？」
「アラスカではキラのおかげでたくさんの人が死なずに済みましたが徹底抗戦派勢力が大きいですわ」

「・・・やはりか・・・」

キラが何をしたかと言うと・・・・・・・

キョウサイドアウト

キラサイド

アラスカ

此処では激しい戦闘が繰り広げられていた
バクゥがジャンプをしミサイルを撃ちそれを食らったリニアガン・タンクは炎上し爆発
あるいはザウートがキャタピラ部分に食らい倒れる機体・・・
ディンやグゥルに乗ったジンやシグーと空中戦を行っている戦闘機
海の上では軍艦がグーンやゾノの攻撃を受けて爆発し沈んでいく
地球軍にはどう見て勝ち目はない
その中でもＺＡＦＴ軍の機体を撃墜し続け進む艦と2機のＭＳの姿があった
白亜の戦艦アークエンジェルとストライクと改造ジンである
彼らはアラスカ基地にサイクロプスが仕掛けれているのを知り離脱を試みていた
だがＺＡＦＴはその事を知らない
唯敵を撃つそれだけの作業を行うだけ

「くっそ！きりがない！」

毒ずきながらも敵機を次々を落としていく

「キラ！口より手を動かせ！」

「わかってます！」

ムウもジンを華麗に操り次々に落としていく

「艦長！ニコルさんに！」

「わかったわ！」

アラスカに着く前に以前無人島であったニコルさんと戦って僕達が勝ちニコルさんを捕虜にしたのだ

「ニコルさん！早速お願いします！」

『はい！こちらＺＡＦＴ軍クルーゼ隊所属！ニコル・アマルフィです！連合軍基地アラスカ基地はサイクロプスを使い自爆を図っている！直ちに撤退をしてください！繰り返します！！・・・』

ニコルさんの説得があっての事かＺＡＦＴ軍は撤退を始めたそして暫らくしたらアラスカ基地は自爆をした

僕達はなんとか撤退する事ができた

そして僕達はナンブ財団に向かうことにした

僕の腕前をキョウさんに見てもらいたいな

キラサイドアウト

キョウサイド

「キョウスケ様お願いをしてよろしいですか？」

「ん？なんだ？」

「実は私達和平派が何とかフリーダムを手に入れる事ができたのですがそれをキラに託して欲しいのです」

「よくフリーダムを手に入れることができたな・・・」

「ええとても大変でした」
「まあいいでしょうお受けしましょう」
「有難う御座います」

俺はラクスからフリーダムを受け取り財団に向かった

命を喰らう死神の機体　ベーオウルフの復活の予兆

キョウサイド

俺は物凄い勢いでキーボードを叩いている
キラから一方的ではあったが暗号通信が来たのだ

『脱出した、できれば受け入れてほしい　古しえの鉄の巨人の弟子』

と書かれた暗号通信が来た
とりあえず全部隊長および会長、社長と話し合いの結果
アークエンジェルを受け入れる事にした
といってもオーブ本土に行ってもらいそこのドックで俺達が作業を行うというものだ
話が終った後アエル、パルス、エビルにステラ達の訓練の相手を頼み
俺は自分の家でキーボードを叩き続ける
現在やっている作業は俺が封印した筈の機体
俺のもっとも大切であった財団の皆を傷つける恐れがある機体
ベーオウルフの新しい生体コンピュータのプログラム開発だ
現状としてはアルトは現在オーバーホール中
ソウルゲインは現在アエルの機体となっている
ヴァイサーガも俺が乗らないためアエルの部隊の機体となっている
だから俺の機体として・・・抵抗があるがベーオウルフを俺が完全に制御できる機体に改造し俺の機体とする事にした
正直きつい・・・
俺は三日間ぶっとうしで作業をしている
正直眠い・・・・・身体も辛くなってきた・・・・・・
流石に身体能力ＭＡＸでも不眠不休はきつい・・・
キラが来るまでには仕上げたい・・・

ああ・・・まずい・・・肩がとんでもない音を上げてる・・・

すると俺の目の前に光が見えた

光は収束し人間の姿になった

「お久しぶりです」

オーディンだった

「ああ久しぶりだな、だがここには監視カメラがあるぞ?」

「大丈夫です、お仕事をしているキョウスケ様の偽景を流してありますから大丈夫です」

「流石だな、はぁ～」

俺が自分の肩を揉む

「疲れてるみたいですね」

「ああ三日間不眠不休で仕事してるからな・・・」

「マッサージでもしましょうか?」

「いいのか?っていうかお前最高神だろう?」

「貴方だから・・・そのぉ・・・特別です／／／／／／」

「じゃあ頼む」

「は、はい／／／／／／／／」

オーディンは俺の後ろに回り肩を揉んでくれた

「はぁ～気持ち良いな～」

オーディンの手はとても柔らかい

にしても巧いな～

気持ち良いのもほどがある
眠りそうだ・・・

「ど、どうですか？／／／／／／／」
「ああ、最高だ」
「そ、そうですか／／／／／／／」
「ふぅ～ありがとうな随分ラクになったよ」

俺は立ち上がりながら礼を言う

「なんか礼をしたいな」
「そそんな！私はお礼がほしくてやったわけじゃなくて！」
「まあそう言うなそうだな・・・じゃあこれを受け取ってくれ」

俺は机の引き出しからネックレスを取り出し渡す

「そ、そんな！！こんなもの！！受け取れません！！！」
「良いから受け取ってくれ」

俺はさりげなくオーディンにネックレスをかける

「ふむ・・・やっぱり似合ってるな・・・美しさが際立ってるぞ」
「そそそそんな！／／／／／／／／／じゃ、じゃわたしはこれで～！！！！！」

オーディンは光になって去っていった
俺はオーディンのおかげで楽になったので作業を進めた
マッサージをしてもらったのでおかげで夜には終らせる事ができた
俺は早速極秘ブロックに向かいベーオウルフにインストールさせ俺の部屋に戻った

俺はベットに倒れこんだ
俺にとっては財団は家なのだ
だから社員のみんなは家族なのだ
これを女性陣に言ったら顔を赤くしたりため息を吐いたりしたなぜだ？

「はぁ～疲れた・・・ＺＺＺＺＺ・・・・・」

俺は直ぐに眠りについた

キョウスケサイドアウト

ステラサイド

ここ三日間はお兄ちゃんはステラの相手をしてくれないアエルお姉ちゃん達に聞いたら仕事で忙しいらしいでもステラはおにいちゃんと一緒に居たいお兄ちゃんはステラにとって王子様ステラはあの暗い所に居るのが辛かったうまくできなかったらお仕置き・・・嫌だったけどあの日お兄ちゃんがあの日そんな中から救い出してくれた最初ステラ達に酷い事をする人かと思ったけど違った今は凄く楽しい♪お兄ちゃんの近くに居るとなんか・・・胸がポカポカするステラはそんな事を思いながらキョウスケの部屋に向かうコンコンッ一応ノックするステラ

「お・に・い・ちゃ～ん♪」

・・・

「返事がない・・・お兄ちゃん？ステラ入るよ？」

ステラはカードキーを出してロックを開けて部屋に入る

「お兄ちゃん？」

お兄ちゃんが居ない・・・

ステラはベットルームに向かう

そこにはキョウスケが規則正しく息を吐き眠りについていた

「あ！いい事考えた♪」

ステラはベットに潜り込みキョウスケに抱きつく

キョウスケはよほど疲れているのかステラが抱きついている事に気が付かない

「おやすみ♪お兄ちゃん♪」

ステラそのまま眠りにつく

幸せそうな顔しながら

ステラサイドアウト

キョウサイド

俺が目覚めると何故か何故か起き上がれない

何故だ？
もう一度だ
・・・だめだ起き上がれない
よく見るとステラが俺に抱きついていた

「・・・何故こうなった？」
「う～ん・・・」

起こすのも悪いと思い
俺は再び眠りに付いた

命を喰らう死神の機体　ベーオウルフの復活の予兆（後書き）

作「なんか甘えん坊ですねステラ」

アークエンジェル　財団へ

キョウサイド

今日になってようやくベーオウルフの調整と稼動実験が終わった
ベーオウルフは命を吸わずに暴走する事もなく俺の機体になった
やはり特機はパワーが売りだな
ベーオウルフの場合は旋回の速度や出力もとんでもないので普通の特機より性能はいい
だが総合的に見たらアルトの方が上回っている
扱いはアルトより楽だがな
だが嫌なニュースもある
アークエンジェルを本土に行ってもらい俺達が本土で作業をする予定だったが
本土が拒否したため財団で受け入れる事になった
表向きはアークエンジェルが宇宙に行くとの物資の調達だ
まあいいかアークエンジェルが来ても財団の立場は悪くはならないっと思っていたらアークエンジェルが来たか・・・

艦長達、アークエンジェルのクルー達が降りてきた

「ようこそナンブ財団へ」

俺が挨拶したら皆が俺のほうに注目してきた

「お久しぶりですね、艦長？」
「え、ええ」

あれ？なんか戸惑ってる？

因みにステラ達も出迎えている

「ほんとに財団の創始者だったのね・・・」
「疑ってたのか・・・」
「キョウさん！」

キラが俺のほうに走ってきた

「おおキラ、にしてもなんだあの暗号通信？」
「あれしか思いつかなくて・・・」
「まあいい、とにかくここを家だと思って寛いでくれ！ここにはショッピングモールや娯楽施設もある！
のんびりしてくれ！整備は此方でやる！」

俺は大声で呼びかけクルーの皆様には案内をつけ財団の娯楽施設や買い物に向かった
艦長とムウ、キラは俺の執務室に案内した

「本当有難う御座います整備だけじゃなくて色んなこともしてもらっちゃって」
「気にしないでくれ」
「それにしても何処にそんな施設があるんだ？」
「地下だ、後温泉もあるぞ」
「凄いですね」
「まあなそれにしてもよくここに来れたな今ここも少し面倒な事になっている」
「もしかして・・・パナマが落ちたから圧力が？」
「ああ此処にはマスドライバーもあるし研究設備もあるおそらくオーブを落として此処を手に入れるつもるだろう」
「大丈夫なの？」

「大丈夫だ、例え地球軍太平洋艦隊が攻めてこようと問題はない
ここには戦闘部隊が１２部隊が存在している　１部隊の総員は約９５０名その部隊が全てこの島に集結している」
「だから地下なんですね」
「ああ後キラお前の新たな機体もある」
「さっき言ってたフリーダムって奴ですね」
「ああプラントのお姫様からの贈り物だ」
「お姫様？」

艦長が声を上げる

「ま、まさか！ラクスですか！！？」
「その通りだ、財団はプラントの和平派と秘密裏に繋がりがあるからな、さあ行くぞ艦長たちも疲れを癒すといい」

俺は艦長達に携帯型端末を渡してキラと共にドックに向かう

「どんな機体なんですか？」

俺はフリーダムについての資料を渡す

ＺＧＭＦ－Ｘ１０Ａフリーダム

パトリック・ザラの指示のもと、国力・物量に劣るザフトが、単機で多数の敵を相手に圧倒的戦闘力を示しうる
対地球連合の切り札として開発した、殲滅型対ＭＳ戦用機
奪取したＧ兵器のデータをも注ぎ込み完成された
　兄弟機であるＺＧＭＦ－Ｘ０９Ａと共にＣ．Ｅ．７１・４月１日にロールアウト
同日、プラント最高評議会議長に就任したパトリック・ザラにより、

「ナチュラルに“正義”の鉄槌を下し
コーディネイターの真の“自由”を勝ち取る」旗印として、ＺＧＭＦ－Ｘ０９Ａは「ジャスティス」
本機ＺＧＭＦ－Ｘ１０Ａは「フリーダム」と命名された
ところがフリーダムはプラント前最高評議会議長シーゲル・クラインの娘ラクス・クラインにより
キラ・ヤマトの手に渡り（フリーダム強奪事件）、以後、三隻同盟の中核戦力として活躍した
ジャスティスの搭乗者としてアスラン・ザラが予定されていたのに対して
フリーダムに誰が搭乗する予定となっていたのかは定かではないが、特務隊の人間か
ザラ派ナンバー2で国防委員長エザリア・ジュールの息子イザーク・ジュールが有力視されていたといわれ
頭部のＶ字型ブレードアンテナやデュアルセンサーなど、全体的な外見は従来のザフト機とは異なり、Ｇ兵器と似通っている
ＰＳ装甲起動時のカラーリングは白、黒（濃紺）、青を基調としたトリコロール
頬の装甲は、ジャスティスと同じくグレーにフェイズシフトするのが特徴。額にはイタリア語で１０を指す「ＤＩＥＣＩ」の文字がある（これはザフトにおける最初のＭＳ開発者が「ジャン・カルロ・マニアーニ」というイタリア系のコーディネイターであったため）
最大の特徴は、動力源として核エンジンを搭載している点である
事実上無限ともいえる、核エンジンからの電力供給は、兵装の大幅な出力向上と
従来機を遥かに上回る稼働時間延長を両立［6］し、ＰＳ装甲をダウンさせることは無い
（しかし、弾薬、推進剤、酸素などには限りが有るため、稼働時間を無制限とすることはできない
核エンジンの安定稼働を実現するため、Ｎジャマーの効果を打ち

消すNジャマーキャンセラーおよび、それらを制御する新型ＯＳ「Ｇ．Ｕ．Ｎ．Ｄ．Ａ．Ｍ．ＣＯＭＰＬＥＸ」（Ｇｅｎｅｒａｔｉｏｎ Ｕｎｓｕｂｄｕｅｄ Ｎｕｃｌｅａｒ Ｄｒｉｖｅ／Ａｓｓａｕｌｔ Ｍｏｄｕｌｅ Ｃｏｍｐｌｅｘ＝核駆動を使った世代の強襲モジュール複合体）が搭載されている
これはフリーダムのみならず、ジャスティスなどの同系列の機体の共通点である
本機は核エンジンのアドバンテージを最大限に生かすべく、大出力のプラズマ収束ビーム砲とレール砲を2門ずつ搭載しており
これに右手に装備されたビームライフルを加えたフルバーストは絶大な破壊力を有し
従来のＭＳからは考えられないほどの大火力を有する
これらの火器を統合管制する「マルチロックオンシステム」はパイロットの能力によって複数の敵機を同時且つ精密に狙い撃つことが可能で
４０機以上の目標に対する同時攻撃を可能としている。
背部のメインスラスターはその推力のみで大気圏内での高速・長距離飛行を可能とする大推力のもの［９］で
さらに背部に備えた計１０枚のウイングを広角展開することで
「ハイマット（Ｈｉｇｈ Ｍａｎｅｕｖｅｒ Ａｅｒｉａｌ Ｔａｃｔｉｃａｌ）モード」と呼ばれる高機動空戦形態を取る
これによって大気圏内では空力制御、無重力下では重心制御を行うことができ
スラスターの推力と合わせて驚異的な運動性能を発揮する
この翼状のデバイスは放熱板の役割も兼ね備えており
大出力の火砲を多数搭載するフリーダムの信頼性向上にも一役買っている
コックピットは機体の動きと連動して回転するものを採用
全周囲モニターとマルチロックオンシステム対応の球体型立体表示パネルが搭載され

機体のポテンシャルを最大限に発揮できるよう工夫されている
多数の新技術の投入によって、Ｃ．Ｅ．７１時点のＭＳでは最高級の性能を獲得した本機だが、その分制御も複雑になり
並みのコーディネイターでは扱いきれないほどの操縦難易度となったコーディネイターの中でも特別な操縦センスを持つパイロットが必要とされたが、本機を奪取したキラ・ヤマトの操縦により、その性能は最大限に発揮された

武装　［編集］

ＭＭＩ－ＧＡＵ２　ピクウス７６ｍｍ近接防御機関砲
マイウス・ミリタリー・インダストリー
ＭＭＩ社製
頭部に固定装備された対空防御用機関砲。その他の系列機やゲイツにも同型の装備が搭載されている
ピクウスはラテン語でキツツキの意

ＭＡ－Ｍ０１　ラケルタ・ビームサーベル
マティウス・アーセナリー
ＭＡ社製
ＧＡＴ－Ｘシリーズのデータを基に開発されたビームサーベルに、Ｘ０９Ａ・Ｘ１０Ａ用の兵装として改良を加えた物
核エンジンからのエネルギー供給により、原型機よりも遥かに出力が高く刃渡りの長いビーム刃を形成する
また２本のビームサーベルの柄同士を連結させ「アンビデクストラス・ハルバード」と呼ばれる両端からビーム刃を出力する形態で使用することも可能
接近戦における攻撃パターンの多様化に寄与している
ラケルタはラテン語でトカゲの意

ＭＡ－Ｍ２０　ルプス・ビームライフル
ＭＡ社製Ｘ０９Ａ、Ｘ１０Ａ共通の兵装として開発されたビームラ

イフル
機体より早く完成し、ザフト製ビームライフルとしては最も早期に制式化されたため他の機体にも搭載されている
Ｍ２１Ｇ、Ｍ２２Ｙ、Ｍ２２１も、このビームライフルから発展したものである
核エンジンからのエネルギー供給によってＧＡＴ－Ｘシリーズなどの同装備を凌駕する高出力を誇る
不使用時はリアスカートにマウント可能
ルプスはラテン語でオオカミの意

Ｍ１００　バラエーナ・プラズマ収束ビーム砲
背部ウイング内に計２門装備された高出力ビーム砲
１門でランチャーストライカーのアグニに匹敵する威力と射程距離を誇り、本機の火器の中では最大の破壊力を有する
こちらは機体の開発が始まるより早く完成しており、従来の機体による性能実験で破壊力は折り紙付きだったが、
その莫大なエネルギー消費量（２発実射しただけでゲイツのバッテリーが干上がる）
とサイズの大きさによる機体バランス悪化により実装は見送られていた。しかし核エンジンの採用とバインダー翼への収納によってそれを解決、この強力な火砲の搭載を実現した
バラエーナはラテン語でクジラの意

ＭＭＩ－Ｍ１５　クスィフィアス・レール砲
両サイドスカートに設置されたレール砲兼ＡＭＢＡＣユニット
小口径の弾丸を高速で射出することでランチャーストライク並の火力と携行弾数の多さを両立速射性も高く
マルチロックオンシステムとの連携により多数の敵を同時攻撃可能
砲撃時にのみ機体正面に展開され、普段は三つ折りの状態で腰部左右にＡＭＢＡＣユニットとして装備されており

機体の姿勢制御に関わっている
下部にスラスター兼ダクトを備えており、推進器としての機能も持つ
サイドスカートはビームサーベルラックの機能も備え、ラケルタ・
ビームサーベルは、非使用時にはここにマウントされている
クスィフィアスはラテン語でメカジキの意

対ビームシールド
アークエンジェル級などの外装にも採用されているラミネート装甲
製［５］の対ビームシールド
ジャスティスに装備された同型の物がＧＡＴ－Ｘ１３１　カラミテ
ィの高出力ビーム砲「スキュラ」の直撃に耐え
尚且つそれを押し戻し砲口を破壊している
視察窓に加え、ビームライフルの防護の為にシールドを構えた状態
から銃口を覗かせるための銃窓がある
ビームライフルと同じく、ジャスティスの物との相違点はカラーリ
ングのみ

キラはフリーダムのに乗り込みシステムをチェックし始める
まるで新しい玩具を買って貰ったような笑顔をするキラ
言い忘れる所だったが二コルのブリッツも改造に入っている
ついでにストライクもだ
だが財団のパイロットは完全にＺＡＦＴの赤服を完全に凌駕してい
るのでムウが空気になるのは避けられないだろうな
部隊長は・・・３秒もしない内に戦艦を沈めてしまうだろう
ついでに臨時ではあるがステラ達の機体が決定した

スティング　アシュセイヴァー

アウル　ゲシュペンストＭｋ－？　タイプＳ

ステラ　ビルトシュバイン

となったが戦闘が近くこれがスティング達の機体に完全になるわけではない

そしてアークエンジェルが来てから一週間・・・地球軍から電報が来た

簡単な内容だ

コーディネーターを駆逐するためにマスドライバー及び研究施設を全て引き渡し

コーディネーターの社員を追い出せという事だ

もちろん即刻却下

俺達ナンブ財団はオーブ軍と共に地球軍を迎え撃つ事にした

第３、５、８、１０、１１部隊に財団の守りを任せ

第１，２，４，６、７，９，１２部隊を本土に配備した

徹底的に地球軍をフルボッコにするつもりだ

さてキラもいるし地球軍に多大な損害を与えてやるとするか

アークエンジェル　財団へ（後書き）

作「次回はオーブ軍＆ナンブ財団戦闘部隊ＶＳ地球軍太平洋艦隊です」

キョウ「何気にステラ達の機体も出たな」

作「今回の機体は一時的なものでこれで決定と言うわけではありません」キョウ「では変わるのだな？」

作「ええ今の所だとＲシリーズが一番有力ですね」

キョウ「そうかでは今回はここまで」

作、キョウ「「では次回またお会いしましょう！」」

決戦！ナンブ財団部隊ＶＳ地球軍太平洋艦隊（前書き）

キョウ「駄作者正確にはアークエンジェルとオーブ軍も入っているだろう？」

作「まあそうですけどほとんど財団の戦力で事足りるでしょ？」

キョウ「ああ十分すぎるぐらいにな」

作「「では！前書きはこのぐらいにして、本文にいきましょう！」

作、キョウ「「では本文をお楽しみください！」」

決戦！ナンブ財団部隊ＶＳ地球軍太平洋艦隊

キョウサイド

地球軍太平洋艦隊がオーブ近くの海上に展開している
俺も今は本土にいる
にしてもオーブは理念が大事とかほざいているけど国のほうが大事だろう
それにオーブは物量で遥かに劣る
すなわち勝利するには先手必勝だ
地球軍は船で来ている
つまり海中からの攻撃には弱い
海中でまともに戦闘できるのはフォビドゥン１機のみだろう
財団の機体はオールラウンダーつまりあらゆる環境で戦闘、活動が行う事ができる改造を施してある
艦を落とすとなればパワーがいる必然的に海中からの奇襲かけるのは特機部隊　第２部隊　エビル・サルムに頼んだ
だが何故かオーブの奴らはそれに大反対
オーブの奴らは卑怯だ！とかそれでもオーブに属するものか！！とかほざきやがった

「・・・貴様らはいったい何を守りたいんだ？」
「オーブを守りたいに決まっている！！」

無能が応えた

「だったらそれだけの覚悟を見せろ、それにナンブ財団は名目上はオーブに属している事になっている
だが実際は完全にオーブから独立した存在だ　嫌ならナンブ財団は

独自に戦線を張る」

結局話し合いは破綻し財団はオーブとは別に戦線を張った
キラ達も俺達の戦線に加わった
だがオーブを見捨てる気はない
オーブも守る
そして第2部隊が一気に奇襲を掛け艦艇を沈め始め戦闘が開始した
特機部隊が艦艇を沈めたが流石に全ては沈めきれない
さすがは太平洋艦隊という所だ
ストライクダガーが出てきた

「さぁてキラ、ラクスの思いを持つ自由で力で押さえつけようとする奴らをあっと言わせてやれ」
「はい！」

すでにフリーダムは発進シークエンスにはいっている

「ニコル君、新生ブリッツの調子はどうだい？」
「ええ！最高です！出力がこんな高くてこんなに扱いやすいなんて！」
「では頑張ってくれよ」
「はい！ニコル・アマルフィ！ブリッツ！行きます！」
「キラ・ヤマト！フリーダム！行きます！」

二人は発進しストライクダガーの殲滅に入った
俺もハッチから地上に上がっていく
地上に着き戦闘が目に入ってきた

「ベーオウルフ！キョウスケ・ナンブ！行くぞ！」

ベーオウルフを走らせ戦闘エリアに向かう
ざっと数えて・・・２０機・・・
ベーオウルフの馴らしにはいい数だ
ストライクダガーはどんどん撃って来るが単に狙いを付けずに乱れ撃ちにしてくる
俺はベーオウルフを走らせ手で機体を切り裂いていく
とんでもないパワーだ
肩のクレイモアと胸部にある砲を展開し撃つ
一気に敵を殲滅する事ができた
・・・そろそろシンを守ってやるか
俺はバーニアを吹かしシンのいる方向に向かう
にしても妙な気分だ
キョウスケが嫌うはずの機体に俺が乗っているとはな・・・
！まずい！遅かったか！！
シン一家を発見したが爆発してしまった・・・
助ける事ができなかったか・・・！
あれは！
木に潰されている女の子がいる！あの子は・・・マユ・アスカ！
俺は機体で木を退け機体を降りマユちゃんを抱き上げる

「大丈夫か！？」
「ううう・・・あ、貴方は・・・」
「喋るな！怪我をしている！」
「わ・・・たし・・・より・・・お・・・にい・・ちゃ・・・んは・・・？」

「君のお兄さんなら親の腕を君と間違えて絶望している所をオーブ軍人に保護されたさ」
「そう・・・で・・・すか・・・」

マユちゃん気絶してしまった

「お、おい！」
「すぅ～すぅ～・・・」
「な、なんだ眠っただけか・・・」

マユちゃんを抱っこしベーオウルフに乗り財団に向かう

「こちらベーオウルフキョウスケ・ナンブだ、怪我をした女の子を保護したそちらはどうだ？」
『こちらアエルです、こちらは敵は来ていますが全く問題ありません被害０です』
「女の子を連れてそちらに行くからな」
『医療設備の準備をしておきます』
「頼むぞ」

財団に向かうが目の前にレイダーが躍り出てきた

「くっ！こんな時に！」
「デカ～イ奴じゃないか！」

レイダーは破砕球（ミョルニル）を撃って来る
俺はぎりぎりで避ける

「くっ！ここで戦うとマユちゃんに負担が・・・！！！」
「でっや～！！必殺！」

レイダーは顔面の開口部より１００ｍｍエネルギー砲「ツォーン」を撃って来る
だが目の前にオレンジ色の機体がツォーンを防ぐ

「あん！？」
「こ、これは・・・・」
『大丈夫か？キョウスケ？』
「ミゲルか！？」

ツォーンを防いでくれたのはグルンガスト壱式だったのか

「こんの～！！なんだよてぇ～は！！？」

レイダーは破砕球をグルンガストに向かって撃つが両手で止める

『こいつは俺が引き受ける！』
「すまん！」

スラスターを吹かし財団に向かう

キョウスケサイドアウト

ミゲルサイド

キョウスケを迎えに来たら連合の新型が攻撃を仕掛けられていたからキョウスケを財団に向かわせ俺は新型に迎え合った

「さぁ～て俺が相手してやるぜ！」
「はぁ～！抹殺！」

破砕球を撃って来るが避ける

「食らえ！ブーストナックル！！」

拳を固め、肘から先を射出し相手ぶつけて体制を崩す

「てめぇ～！！！」

「くらえ！！ファイナルビーム！！！」

胸部からビームを発射し右腕を飲み込む

「ぐぅ～！！！」

「こいつで止めだ！！」

計都羅?剣(けいとらごうけん)を抜き放つ

「計都羅?剣！！暗剣殺！！！」（けいとらごうけん・あんけんさつ）

計都羅?剣で敵機を十文字に斬りつける

「がっ！！！」

新型機は爆発する

「新型機討ち取ったり！」

計都羅?剣をしまい次の敵機に向かう

ミゲルサイドアウト

キラサイド

僕はニコルさんと一緒にストライクダガーと言う機体を殲滅していく
僕はハイマットバーストで蹴散らし
ニコルさんは新たに追加されたビームマシンガンと強化されたグレイプニールで破壊していく

「ニコルさん調子よさそうですね」
「ええキョウスケさんの改造のおかげでかなりパワーアップしてるんですよ」

するとXナンバーの後継機のような機体が攻撃してきた
バスターの後継機のようなあきらかに大火力の武装を持っている機体だ
それと緑の甲羅のような装甲を背負った機体だ

「僕はあの馬鹿みたいに武装を持った奴の相手をします」
「はいじゃあ僕はあの甲羅を背負った奴を」

僕たちはそれぞれの機体に向かった

決戦！ナンブ財団部隊ＶＳ地球軍太平洋艦隊（後書き）

キョウ「おい、これってシンがマユが死んだと勘違いしているよな？」

作「ええ、デス種編で再開させてびっくりさせようと思ってます」

キョウ「そうか」

作「では今回の後書きはここまで！」

作、キョウ「「では次回またお会いしましょう！」」

決戦！ナンブ財団部隊ＶＳ地球軍太平洋艦隊　２（前書き）

作「さあ今回はキョウスケ以外の視点です」
キョウ「今回は出番なしか・・・」

決戦！ナンブ財団部隊ＶＳ地球軍太平洋艦隊　２

ニコルサイド

僕はキラ君と共にストライクダガーと言う機体の掃討にかかっていた
キョウさんの施した改造のおかげでブリッツは大気圏内でも飛行を
可能とし高機動戦闘か可能となった
武装もビームマシンガンが追加されグレイプニールも改造が施され
ビームを展開する事も可能となり
さらに相手も電撃を流す事も可能となった
僕はダガーを倒し終わったらＸナンバーの系統を受け継いだ機体が
目に入ってきた
１機はバスターの特徴である火力を強化を更に追求したような肩に
二つの砲塔を持っている青い機体と
もう１機はずんぐりとした緑の甲羅のような装甲を背負った機体だ
キラ君に青い機体を任せ僕は緑の機体に向かった
僕は先手必勝とばかりとマシンガンを撃つ、が驚きの事が起こった
ビームが曲がったのだ

「！？ビームが曲がる！？」

ビームは光と同じで一直線に進むはずだ
思考をめぐらせていると敵機が空中に行った
それを追いかけ追加されたウイングを展開し追いかける

「はぁ～！うざい！」

フォビドゥンは誘導プラズマ砲「フレスベルグ」を放つ
それも急激に向きを変えブリッツの横を捉えようとしたが急上昇し

たから回避ができた
あれは防御でだけじゃなくて攻撃にも応用できるのか！
でも攻略法はある！
僕は3連装超高速運動体貫徹弾「ランサーダート」を撃ち敵がシールドで防御しているうちに
ミラージュコロイドを展開する
だけど地上じゃ展開時間が短い
敵が戸惑った瞬間を付き敵の懐に飛び込みミラージュコロイドを解除する
そしてサーベルで両腕を切りコクピット部分に蹴りを決めグレイプニールにビームを展開し
コクピット部分に決めてそのまま電流を流す

「がぁ！！！！」

そのままこっちに引き寄せサーベルで一刀両断にする

「僕に断てない物はありません！ってキョウさんの台詞うつっちゃったでも言って気分良いんだよねこれ」

ニコルサイドアウト

キラサイド

僕はあきらかめっちゃめちゃ電力を喰いそうな機体の相手をしているやたら撃ってくるのでフリーダムの機動性で全て避けるていうか狙いが凄く甘い当たる訳がない

「くそぉ！当たれよ！」
「射撃はこうやるんだよ！」

ライフルで正確に肩の砲塔、バズーカを撃ち抜く

「な！！」

畳み掛けるようにバラエーナで脚部を狙うがジャンプして避けられる

「へっ！当たるかよ！」

「そんなの予想済みだ！」

サーベルを繋げアンビデクストラス・ハルバード」にし腕部、脚部を切断する

「うおおお！！！」

コクピットを一文字切りにし斜めに切り裂く

「がぁぁぁぁ！！！！」

カラミティは炎上し爆発した

サーベルを切り離し空中に投げ再びキャッチし戻す

「自由を止める事はできない・・・」

なんかキラも色々染まってきてますな

キラサイドアウト

ステラ、アウル、スティングサイド

三人はオーブ防衛線の最前線で戦っている
地球軍が上陸できない理由はほとんどの奴等はステラ達が沈めるからだ

「ソードブレイカー！いけぇ！！」

スティンブのアシュセイバーからソードブレイカーが放たれ
生きているように自由自在に動きまわりビームを放ちストライクダガーを沈めていく

「行くぜぇ！！！整備員泣かせのゲシュペンスト究極奥儀！！！！」

アウルはポーズをとり後ろに回転ジャンプし横回転をかける

「きゅう～きょ～く！！！ゲシュペ～ンスト～キィィィィィィクゥゥゥゥゥゥ！！！！！！！！」

そのまま加速しキックを決める

「いっけぇ～！！！！！！」

1機、2機、3機、4機、5機を一気に貫いた

「どんな強固な装甲であろうとも・・・唯蹴り破るのみ・・・」
「アウル・・・それお兄ちゃんのパクリ・・・」

ステラが突っ込みをいれる
突っ込みをいれながらサークル・ザンバーで敵を切り刻む

「ステラ！アウル！行くぞぉ！」

「うん！」
「おう！」

アウルが再び究極奥儀の体制に入り
ステラは敵の動きを封じ
スティングはソードブレイカーをゲシュペンストの周りに展開する

「いくぜぇ！ゲシュペンスト究極奥儀！！！きゅうきょ～くぅ！！
ゲシュペ～ンスト！！キィィクゥゥ！！！！」

敵機の大群に突っ込みながらソードブレイカーはビームを放ち敵機を貫き
アウルは7機を突き破る

「やっぱコンビネーション技は燃えるぜぇ！」
「もう少し落ち着いてやれ」
「ステラ、お兄ちゃんとやりたい」

すると空に花火のような光が打ち上がった

「綺麗・・・」
「たま～や～！かぎ～や～！」
「花火じゃないぞ、地球軍の信号弾だ」
「じゃあ帰ろうぜ」
「ステラ・・・お腹すいた・・・」
「おまえらなぁ・・・」

ステラ達は財団に向かった

決戦！ナンブ財団部隊ＶＳ地球軍太平洋艦隊　２（後書き）

キョウ「今回は出番がなしか・・・」
作「まあ今度はちゃんと出しますから」
キョウ「頼むぞ」
作「では今回の後書きはここまで！」
作、キョウ「「では次回またお会いしましょう！」」

これからの戦いに備えて・・・（前書き）

作「今回は出番がありますよ」
キョウ「ってか俺この作品の主人公なのに出番ないって言うのはないだろう？」
作「それはすみませんでした」
キョウ「で？今回はどんな話だ？」
作「ここでネタバレはしません前書きはこのぐらいにして、本文にいきましょう！」
作、キョウ「「では本文をお楽しみください！」」

これからの戦いに備えて・・・

キョウサイド

地球軍は俺が財団に帰った後に俺が海上で大暴れし地球軍に途轍もない被害を与えたから
もう来ないだろう
船だけで３０以上も沈めたからな俺だけで
もうオーブには来ないだろう
それとマユちゃんは怪我も擦り傷程度だった
そして今は財団の全員を地下５階のホールに集めパーティを開こうとしている
因みに財団には自給自足できるように食糧生産プラントが存在している
そこで食材を製造して全て最高級品だ
しかも作るのは全く費用がかからない
転生前の俺はいったい何者なんだ？

『では！ここで我らの創始者様！キョウスケ様に始まりのご挨拶をしていただきましょう！』
「「「「「わぁぁぁぁ！！！」」」」」

何故そんなにテンションが高い？
俺はステージの上に上がりマイクを取る

「あ～・・・皆今回のオーブ防衛戦はご苦労だった
ささやかだが祝いの席を用意させてもらったそして俺達ナンブ財団はこれから宇宙に行き
ザフトの大量殺戮兵器の破壊に向かう

これは完全に地球軍とＺＡＦＴを完全に敵に回すという事だ抜けたいものは申し出てくれ」

・・・手を上がる気配はない

「皆こんな情けない俺についてくれる事を感謝するそれでは皆！グラスを持ってくれ！」

皆はいっせいにグラスを持つ

「それでは乾杯！」

「「「「「乾杯！！！！！」」」」」

パーティが始まり俺はステージを降りた

俺はワインの入ったグラスを片手にチーズを口に入れる

うん美味い

ステラはローストビーフを食べているオレンジジュース片手に

俺に気付くとこっちに走ってきた

「おふぃふぁん！ほふぉふぉいしいよ！」

「ステラ口に物を入れて喋っちゃダメだ」

「もうステラちゃんったら・・・あ！キョウさん！」

ステラと一緒に来たのはマユちゃんだ

「マユちゃんもういいのか？」

「は、はい！おかげさまでもう元気いっぱいです」

「それは良かった」

「マユ、お兄ちゃんって呼べば良いのに」

「そ、そんな・・・」

「別にかまないぞ」
「それじゃあ・・・お、お兄ちゃん／／／／／／」
「なんだ？マユ？」
「／／／／／／ス、ステラちゃんい、行こう！」
「あ～！引っ張らないで～！」

マユがステラを引っ張って何処かに行ってしまった
俺は再びテーブルを回り食べ歩きをすることにした
すると男性部隊長
ガイ　ガウル　ヴァルが此方に来た

「どうも！キョウさん！」
「おいガウル少し飲みすぎだぞ」
「硬いこというなよヴァル」
「まあ今日は折角の宴会なんだから良いじゃないか」
「ガイ甘いこと言うとこいつは直ぐに調子のるからダメだ」
「エビル、クリン、ミハエルはどうした？」
「あの３人なら酒を無理やり酒飲まされてのびてますよ」
「そういえばあの３人は酒に弱かったな」
「あいつらの酒の弱さは異常ですよ」
「ははは・・・まあ一杯でトマトみたいに真っ赤になるからな」
「あ！キョウさ～ん！」

会話をしているとキラと二コル君がこっちに来た
俺は部隊長との話を切り上げキラ達の方に向かった

「楽しんでるか？」
「はい！楽しんでます！」
「僕はこんな立派パーティは初めて少し緊張してます・・・」

「まあ楽にして堪能してくれ」
「あっそうだキョウさん聞きたい事があるんですが・・・」
「ん？なんだニコル君？」

俺はワインを口に含む

「キョウさんって好きな人いるんでか？」
「！？」

むせそうになった

「なんだ！いきなり！」
「いやだって財団にも女性部隊長も女の人もいっぱいいるし好きな人居るのかなぁ～って」
「なんか・・・一気に女性陣の視線を集めた気が・・・」
「気のせいですよキラ君」

嫌気のせいじゃないと思いますよ・・・↑男性部隊長と財団の男性陣の心の声

「・・・今のところは居ないな」
「そうなんですか？」
「ああ」
「「「「「（やった！チャンスある！）」」」」」↑財団の女性陣
「（やっぱり積極的にアプローチしたほうが良いかしら？）」↑サニー
「（むぅ～最近はステラちゃん達が居るからアプローチしにくいのに・・・もっとグイっていこう！）」↑アエル
「（キョウ様・・・貴方の心絶対に射止めて見せます）」↑パルス
「（お兄ちゃん経由でキョウさんと・・・／／／）」↑サエル

「（私の思い絶対に届かせて見せます！）」↑ファエリナ
「（お兄ちゃんのお嫁さんは私がなる！）」↑ステラ
「（・・・負けない！）」↑マユ
「（貴方の全てを私のものにして見せます！）」↑何故か居るオーディン
「ブルッ！！」
「どうかしましたか？」
「なんか悪寒が・・・俺は他の所に行くからな」

俺はキラと二コル君と別れ食べ歩きを再開
ムウはなんか飲み比べしてるな
あれ・・・ウオッカか
大丈夫か？相手はガウルだ
あいつはとんでもないぐらい酒に強いからな
一日中飲んでても二日酔いしないからな
俺は近くのテーブルで再びワインを淹れ飲む
はあ・・・美味い・・・

これからの戦いに備えて・・・（後書き）

作「新たに争奪戦介入者登場」
キョウ「・・・」
作「あの・・・その・・・」
キョウ「・・・消えろ！！！クレイモア！！！！」
肩のクレイモアのハッチ解放
ガシャン！！！
ドガガガガガ！！！！！
作「のわぉ～！！！！！」
ドゴ～ン！！！！！
キョウ「では今回はここまで次回またお会いしましょう！」

キャラ紹介（前書き）

作「今回はキャラ紹介です」
キョウ「こいつはネタに困るとキャラ紹介にするのか？」
作「失礼な！キャラ紹介は改めてそのキャラの設定を見ることもできるしお話を振り返ることもできるんですよ！」
キョウ「はいはいやるならさっさとしろ」
作「・・・では本文をお楽しみください」

キャラ紹介

転生前　南武恭介　　転生後　キョウスケ・ナンブ

性別　男

年齢　転生前　１８歳　転生後　２１歳

身長　１９５センチ

体重　６２キロ

容姿　キョウスケ・ナンブ

本作の主人公でありナンブ財団の創始者
最高神たるオーディンによってＳＥＥＤの世界に転生する
財団の全１２部隊を統括する第１部隊の隊長でもある
現在はキラの師匠でもあり多数の女性から好意を寄せなれている
最近の悩みは無能と自分がいない間にロールアウトされていた機体について
Ｒシリーズに何故かサイバスターがあるという混沌（カオス）な事になっている
最近ではステラ、スティング、アウル、マユと本当の兄妹弟のように接している

キラ・ヤマト

年齢：１６歳

趣味：プログラミング、コーヒー作り

もう一人の主人公
フリーダムを手に入れ更に強さに磨きがかかった
コーヒーの腕も上がり財団の中でも人気が高くキラブランドという
言われるほど
それでもキョウスケには届かない
現在は第１部隊隊長補佐の地位についている
因みに財団に着てからはちょくちょくラクスと連絡を取っており関
係は良好

ミゲル・アイマン

元々はザフト軍クルーゼ隊所属エースパイロットだったが
キョウスケに敗れ捕虜となりその後財団のパイロットになる
第１部隊隊長補佐の地位についている
家族は財団に呼び病気であった弟の治療をしてもらいキョウスケに
多大な恩を感じている
以前はナチュラルを見下す考えを持っていたが現在は良好な考えに
変わっている
搭乗機はグルンガスト壱式　（オレンジ）

ニコル・アマルフィ

年齢　１５歳

趣味　ピアノ演奏

元クルーゼ隊の一員だったがキラに敗れ捕虜になりアラスカでは一
役かった
この戦争に疑問を感じコーディネーターとナチュナルが共存できる

世界を目指している
ピアノ演奏が巧く財団では昼食時や夕食時にピアノを弾いている
キラとも仲が良く親友というポジションに立っている
第1部隊に所属
搭乗機はブリッツ

偽り続けた心　傷ついた戦神

キョウサイド

・・・皆楽しそうだな
それぞれの時間を過ごしている
ステラは俺の隣で口いっぱいに食事を頬張り
アウルとスティングは大食い勝負をし
キラは俺の近くで二コル君と話をしている
マユはステラを見て半場呆れている
だが・・・可笑しい
俺はこの状況をまったく楽しめない心の中で何かが引っかかるような感覚だ
これから俺達は闘いに向かうそれは人の命を奪う事・・・
解ってはいるが・・・今までも我慢していたがここまで来ると・・・・
呼吸するのが辛くなってきた・・・
ガシャン！
俺は持っていたグラスを落としてしまった
入っていたワインが床に零れる

「！？キョウさん！？」
「どうしたんですか！？」
「お兄ちゃん？」
「大丈夫！？お兄ちゃん！」
「兄さん！」
「兄ちゃん！大丈夫か！？」

皆が心配し俺に近寄る

「大丈夫だ・・・」
「でも汗だくですよ!?」

俺も気付かなかったがかなりの汗をかいていた

「どうやら・・・飲みすぎたようだ・・・俺は部屋に戻っているぞ」

俺は会場から出て自分の部屋に戻った
俺はベランダに出て風に当たっている
どうやら会場にいた間に夜になってしまった

「ハアハア・・・だんだん呼吸するのが辛くなってきたなんだこの重圧感は・・・・・・」

全身が震えているのが解る

「キョウスケ様・・・」

後ろから来たのはオーディンだ

「ハアハア・・・オーディン・・・か・・・何のようだ・・・」
「やはり今までずっと自分の心を偽っていたのですね」
「何の事だ・・・」
「嘘をつかないでください私は情けありませんが最高神です」

オーディンは今まで見た事がないようなまっすぐとした瞳で俺を見つめる

「・・・ばれていたか・・・」
「はい」

「そうだ俺は今まで自分の心を偽り死の恐怖を無理やり封じ込めていた」
「・・・」
「だがもう無理だ・・・俺は恐い・・・」
「・・・」
「俺はどうしたいい・・・これからどうやって皆を守ればいい・・・俺は・・・俺は・・・どうかしてしまったのか？」
「それが正解ですよキョウスケ様」
「え？」

今までに聞いた事のないオーディンの声が響く
そして俺を途轍もない暖かな温もりで抱きしてくれた
俺はオーディンの腕の中で呆然としている

「人を殺したという責任などが感じなければ無理やりにでも神界に連れて行こうと思っていました
でも貴方にはその自覚がありました私が惚れただけの事はあります」
「それ関係あるのか？」
「あなたは昔から正義感が強い人でした」
「まあ神だから俺の昔を知っていても可笑しくないか」
「いえそうではありません私達は幼いころに出会っています」
「なに？」
「私は貴方が5歳のころに人間界で下見に行った時に付き人とはぐれてしまい
公園で泣いていた時に幼い貴方が声をかけてくれたんです」

・・・そういえば昔に可愛いな女の子と公園で会ったな

「あなたは見ず知らずの私のために走り回って付き人を探してくれました」

「・・・そして俺は毎日毎日その公園に通い続けたもしかしたらまた会えるのかもしれないと思って今言われるまですっかり忘れていた・・・」
「・・・キョウスケ様貴方に私の本当の名を教えます」
「オーディンというのは偽名と言うのか？」
「正確に言えば役職名です、私は7代目の最高神です私の本当の名はエクナです」
「エクナ・・・」
「キョウスケ様・・・私の真名・・・受け取ってください」
「ああ確かに受け取った、ありがとう楽に・・なった・・・よ」

俺は眠気にまけ眠ってしまった

キョウサイド

オーディン改めエクナサイド

私はキョウスケ様をベットルームに寝かせてあげましたキョウスケ様規則正しく寝息を吐いている

「キョウスケ様・・・」

私はキョウスケ様の唇に自分の唇を重ねた

「ん・・・」

キョウスケは変わらずに寝息を立てる

「キョウスケ様／／／・・・」

私は再び唇を重ねた
今度は長く濃厚なキスをした
キョウスケ様は神界でも人気が高い
これで差が作れるといいけど
私はキョウスケ様の頭をなで神界へと戻った

いざ行かん！舞台は宇宙へ！

キョウサイド

さてオーディン改めエクナに慰められ何故かベットで寝ていたキョウスケだ
俺は起きたら昨日心配をかけた皆に謝罪をしさっそく部隊長を招集した

「さてマスドライバーの準備はどうだ？サニー？」
「いつでもＯＫです」
「戦艦はどうだ？」
「現在使用可能となっているのはシロガネ、ハガネ、クロガネ、ヒリュウ改、ハルバードです」
「・・・またハルバードってなんだ？俺は知らんぞ？」
「これですよ」

ガイが手元のパネルを操作しモニターにハルバードをだした
ズサァ～！
見た瞬間に俺は座っていた椅子から落ちた

「「「

「キョウさんがヘリオポリスに行ってからですよ」

ガウルが言う

「・・・どうやって作った・・・？」

「それは企業秘密です」

「それを財団の創始者に言うか・・・」

「それより今回はアークエンジェルもいますけど全１２部隊で行くわけには行きませんよ？」

「行こうと思ったらいけるけどなだがそれだととんでもない大艦隊になってしまう」

「宇宙で合流する和平派のエターナルを入れて７隻

だがエターナルはフリーダムの専用運用艦、機体を乗せなれるのは全部で６隻」

「なんかオーブもイズモ級を出すとか言ってますけど数に入れないほうがいいし」

そんなに？

そんなにでかいのか？

「それに此処（財団）が狙われる可能性も否定できない何部隊は此処（財団）に居てもらなければ」

「では我々第１０部隊は残ろう」

「ヴァルいいのか？」

「ええ守る事も戦いですから」

「では第１１部隊も残ろう」

「大丈夫かよ？ミハエル？」

「ガウル、お調子者のお前に言われたくはない」

「大丈夫だよ、僕も残ろう」

「ガイ、お前宇宙に出るのが大好きだろう？」

「今は好きとか言ってる場合じゃないだろ?戦いが終ったら行くさ」
「わかった戦いが終ったら休暇をとらせよう」
「有難う御座いますキョウさん」
「では残るのは3，10，11部隊だな?」
「いえそれなら私も」
「俺も」

さらにクリン、ガウルも手をあげる

「じゃあ行くのは・・・1、2、5，6、9，11の中から選出する事になるな」
「（女性部隊長が大半だな）」
「では選出は任せるがいいか?」
「「「「「かまいません」」」」」
「では会議は此処まで明朝0090時に宇宙に向かう」
「「「「「了解!!!!!」」」」」

解散し俺はミゲル達を呼び出した

「なんだ?キョウスケ?」
「とりあえず座ってくれ」

皆に椅子に座りように指示し座ったことを確認すると口を開いた

「明日の午前9時に宇宙に向かう」
「!ついに行くんですね?」
「ああ、そこでお前達は第1部隊として来て貰いたい」
「愚問を言うなよ兄ちゃん」
「アウル?」
「俺は兄ちゃんの為に戦う覚悟は何時でも出来てるぜ!」

「俺もですよ兄さん」
「スティング？」
「何の為に今まで訓練してきたと思ってるんです？」
「そうだぜキョウスケ」
「キョウさん僕は行きますからね」
「ミゲル・・・キラ・・・」
「ステラも行くからね！」
「私も行きます！」
「ステラ・・・マユ・・・」

皆はまっすぐと俺を見ている

「ふ・・・確かにアウルの言う通り愚問だったなでは皆頼むぞ！」
「「「「「「はい！（おう！）」」」」」」

皆の意識を確認し皆が出て行くとエクナが現れた

「キョウスケ様私も行きますよ」
「なに！？お前最高神だろう！？」
「大丈夫です暫らく休暇貰いましたから」
「・・・だがな・・・」
「あ！データなら私は第１部隊の副隊長でライン・ヴァイスのパイロットになってます」
「・・・手回しが早いと言うかなんと言うか・・・」

そして何故かエクナの参戦が決定した

そして・・・明朝００９０時
俺たちは宇宙へと旅立った

エターナルと合流（前書き）

作「今回エターナルとお姫様と合流です」
キョウ「ハルバードが出てくるのは予想外だったぞ」
作「いや咄嗟に思いついたのがハルバードだったんです」
キョウ「勢いはやめろそろそろ前書きは終わりにします、では本文をお楽しみください」
作「あ！存在をスルーされた！」

エターナルと合流

キョウサイド

俺達は財団のマスドライバーで宇宙に上がりエターナルとの合流ポイントである
コロニーメンデルに向かった
シロガネ、ハガネ、クロガネ、ヒリュウ改、ハルバード、アークエンジェル
数に入れないがオーブ軍のイズモ級　クサナギ
これが俺達の艦隊・・・と言えるかわからんが・・・
因み俺はクロガネに搭乗している
・・・しばらくするとコロニーメンデルが見えてきた

「キョウスケ様、、エターナルより入電
『長旅ご苦労様でした　これからゆっくりとお話をいたしましょう
美味しいコーヒーもご馳走いたします』

最後の一文はあきらかにバルドフェルドさんだな
解り安すぎだろう
兎も角艦をメンデルに入れエターナルの面々と会談に入った

「それでラクス嬢プラントの方は？」
「いよいよジェネシスを使いそうな雰囲気が出てきました」
「・・・そうか・・・」
「まったく困ったもんだよ」
「そうねアンディ」
「それともう一つ最悪に悪いにニュースが・・・」
「最悪に？」

キラが疑問の声を上げる

「じ、実は・・・あのホモが・・・プラントにいるんです・・・」

「「な!!」」

俺とキラは驚いた

「なんで!?あいつは最前線の激戦区に送られたはずなのに!?」

その最前線に行く直前まで一緒にいたニコル君が声をあげる

「ああ間違いなく最前線に送られたよだけどその最前線でとんでもない位の機体を落としてその働きが認められちゃって今はフリーダムと同じ時期に作られたジャスティスに乗ってるよ」

「・・・キラ・・・すまんあの時俺が止めをさしていれば・・・」

「いえキョウさん今度は僕がこの手で奴の・・・命の鼓動を止めます!」

キラはまっすぐとした目で言った

「ご安心ください八つ裂きにしますから」

さらっとおっそろしい事満面の笑みで言うキラ

「ああキラに任せる」

「ははは少年も成長したもんだ」

「成長期ですから」

「ふふふそうね」

「「「「「「ははははははは！！！！！！」」」」」」

声を合わせて笑う

「さてここにはちゃんと重力発生装置があるからコーヒーは飲めるよ」

「ではいただこう」

「僕はブラックで」

「お！少年、大人の味がわかってきたのか！？」

「はいっていうか僕はコーヒーはブラックと決めてますから」

俺達はバルドフェルド特製のコーヒーをご馳走になった

キョウサイドアウト

ステラサイド

今日やっと私達の機体最終調整が済んだ

「これが俺達の機体か・・・」

「にしてすごいな・・・合体もできるだろ？」

「ステラ巧くできるかなぁ？」

「大丈夫だよステラちゃん」

私達の機体はＲシリーズっと呼ばれている

アウルがＲ－１

スティングがＲ－２

ステラがＲ－３

マユがＲ－ＧＵＮパワード

お兄ちゃんはＴ－・・・何とかシステムが搭載されていると言って

いた
ステラには良くわからない

「とりあえずこの機体で兄ちゃんの期待に応えようぜ！」
「あたりまえだ！」
「ステラ！お兄ちゃんの為に頑張る！」
「私だって！」

エターナルと合流（後書き）

作「今回でホモランの生存が明らかになりキラが叩きのめす方向性で行きます」
キョウ「っていうかステラ達にＴ－ＬＩＮＫシステムが使えるのか？」
作「使えなかったら乗せませんって！」
キョウ「まあ確かに・・・」
作「後ジェネシスはステラ達で壊したいです」
キョウ「何を使って？」
作「『天上天下一撃必殺砲』を使って」
キョウ「？ああハイパー・トロニウム・バスターキャノンか」
作「はいそうです！では今回はこれまで！」
作、キョウスケ「「では次回またお会いしましょう！」」

ヤキン・ドゥーエ　キラ対アスラン

キラサイド

僕達はメンデルで入念な会議を行いヤキン・ドゥーエに向かっている地球軍及びザフト軍に対し
攻撃をする事を決定した
今回の作戦は危険が付き纏う
だから必要がないとされていた
Ｒ－２，３にプラスパーツを付ける事になった
スティングとステラは新しくパーツが付くのに関らずあっという間に物にした
技量は完全にＺＡＦＴの隊長クラスだろう
僕はフリーダムに乗り込み出撃の時を待っている

『こちらキョウスケ・ナンブだ』

キョウさんが通信を始めた

キラサイドアウト

キョウサイド

俺はアルトから全員に通信回線を開いている

「これから俺達は最大の戦いに挑む事になる　ＺＡＦＴのジェネシス　地球軍の核ミサイル
これらの大量虐殺が可能な兵器を完全破壊が目的だ
皆　俺に命を預けてくれた事に感謝する

では行くぞ！皆！各機発進！」

皆は一斉に発進しステラ達はジェネシスへ
キラも発進しミーティアとドッキングし加速し敵に向かった
エクナも発進し後は俺と艦の守りの舞台のみとなった
アルトはハッチから艦上に出た
コクピットから爆発の光が見える

「・・・いくぞアルト・・・レイン・・・」
『はい！」
「アルトアイゼン・リーゼ、キョウスケ・ナンブ出る！」

レバーを押し込み一気に加速し戦場に向かう
ジ・インスペクターのＯＰを想像して頂ければ・・・

ジンやゲイツが躍り出てくる

「伊達や酔狂でこんな頭をしているわけだはないぞ！！」

プラズマホーンを出力し一気に敵機を貫く

キョウサイドアウト

キラサイド

核ミサイルを迎撃しつつ一気にフルバーストで敵を一掃する
途轍もない火力だ

「アウル！先に行って！ジェネシスを！」
「了解！行こうぜ！スティング！ステラ！マユ！」

「ああ！」
「うん！」
「はい！」
「チェ～ンジ！Ｒーウイング！」

アウルは変形しジェネシスに向かう
僕もフルバーストの続きをする
すると

「キィィィィラァァァァァーーー！！！」

やっときたか・・・
凹凸ハゲド変態ホモ虫野郎・・・ホモラン・ザラ・・・
まってたよ・・・君の心臓の鼓動を止めるこの時をね！
ジャスティスに機体を向けミーティアをパージする
流石に核搭載型との戦闘では機動性を考えたほうがいい

「キラ！今こそお前を救う！」
「救う？」
「そうだ！あの赤い破壊神からお前を救い出すんだ！
あの忌まわしいキョウスケ・ナンブから！！！！！」

ああ・・・僕は何でこんなのと友達だったんだろう・・・
僕の敬愛するキョウさんのことを破壊神？忌まわしい？
どっちかといえばキョウさんは戦神だ
大事な人を守る事だけで戦う戦神
忌まわしい？
何処が忌まわしいんだ？
キョウさんはとても優しくて強くて気高いけど弱い人だ
僕はあの人の右腕になる

「はあ・・・黙ってくれよそれ以上貴様の声を聞くと耳が腐る・・・
」
「!!?キラ何を言っているんだ!?お前はアイツに!」
「僕はあの人の弟子だ」
「!!!で・・・し・・・?」
「そう・・・僕は自分の情けなさを悔やんでキョウさんに弟子入りした!貴様を討つためにね!!!!」
「キラ!!!?こうなったら力ずくにでも!」
「我が名はキラ　キラ・ヤマト!キョウスケ・ナンブの弟子なり!」
(アンタは親分かウォーダンですか・・・(「Д|||;;;)

一気にスラスターを吹かし接近しサーベルで斬り合う

「キラァァア!!!!正気になれぇ!!!!!」
「元より正気!!」

もう一本のサーベルを抜き放ち更に圧倒する

「くっ!」

ホモはライフルを構えようとするがコクピットに蹴りをくわえライフルを斬る

「なに!?」

バラエーナで両足を撃ち抜く

「そ、そんなばかなぁぁぁぁ!!!!!!」
「これで・・・終りだぁぁぁぁぁ!!!!!!」

サーベルをアンビデクストラス・ハルバードにしコクピットに串刺しし
素早く離れジャスティスは核爆発を起こしホモもこの世から消えた・・・

「・・・喜びに浸るはこの戦闘が終わってからだ」

僕は再びミーティアとドッキングし殲滅タイムを再開した

ヤキン・ドゥーエ　赤い戦神対ラウ・ル・クルーゼ

キョウサイド

戦況的には此方側財団が押している
財団の機体には対ビームコーティングを施している
パイロットも部隊長に各部隊が選りすぐった精鋭達
俺はアウル達と合流しジェネシスに向かっている　が後少しで到達という所で
四方八方からビームの雨にあった
俺達は機体をひねり回避する

「おわわわ！？」
「なにこれ！？」
「何時の間に包囲されたの！？」
「いや・・・これは・・・」
「！そこだ！ハイゾルランチャー！シュ～！！」

スティングは持ち前の空間認識を駆使し敵の位置を察知し両肩に５連装・２門が装備される重金属粒子エネルギー砲
ハイゾルランチャーを放つ
避わされるが敵の正体がわかった　プロヴィデンス
最後の核搭載機
やはり先程のビームはドラグーンにより物か

「アウル、スティング、ステラ、マユ、奴の相手は俺がする！
ジェネシスに到達しだい破壊するんだ！ヴァリアブル・フォーメーションを許可する！いけぇ！」
「「「「了解！！！！」」」」

アウル達を先に行かせ俺はプロヴィデンスに向かった
ライフルを握り撃つ
が簡単に避けられる簡単にはやらせてくれんか！

「厄介な奴だよ！君は！」

クルーゼはドラグーンを展開し此方に撃って来る
機体を動かしビームが描く光を避ける

「貴様は！」

斬艦刀を抜き放ち接近する
クルーゼもサーベルを展開し鍔迫り合いをする

「他者より強く、他者より先へ、他者より上へ！競い、妬む、憎んでその身を喰い合う！
君とて同じであろう！？」
「下らん事をぉ！貴様の描いたレールの上を走らせん！」

プロヴィデンスはいったん離れる

「既に遅いさ、私は結果だよだから知る！！自ら育てた闇に喰われて人は滅ぶとな！！」

プロヴィデンスはドラグーンとライフルでコクピットを一点集中攻撃をしてきた
Ｉフィールドで防御されるはずだったが完全には防ぎきれずコクピットで小規模の爆発が起きる

「くっ！」
『キョウスケ様ぁ！！！』
「くっ・・・レインまだ行けるか・・・」
『はい！大丈夫です！』
「そうか・・・アルト・・・レイン付き合ってくれ！」
『何処までもキョウスケ様について行きます！』
「私を忘れないでください！」

気付くとエクナが近くにいた

「エクナか・・・連携攻撃を仕掛けるぞ！」
「はい！」

ヴァイスと共ブーストを掛けクルーゼに向かう

「クルーゼェ！！！エクナ！一気に蹴りをつけるぞ！」
「正念場ってやつですね！」

ヴァイスはハウリング・ランチャーでの一斉射撃を開始する
まるで何十機ものヴァイスが射撃を行っているかのように
俺は一気にブーストを更び掛けプラズマホーンを展開し突撃する
クルーゼは当るまいと必死にヴァイスが放ったビームを避けるがド
ラグーンは破壊されてしまう
プラズマホーンはプロヴィデンスのライフルごと機体を捕られ弾き
飛ばす
ヴァイスは圧倒的な加速を使いプロヴィデンスの後方に回り込む

「なに！？」
「はぁい！そちらに！」

ハウリング・ランチャーBモードでプロヴィデンスの後ろに直撃し吹き飛ばす

「読みどおりだ！！」

アルトをプロヴィデンスの吹き飛ばすされるところを予想し周り込みアヴァランチ・クレイモアを浴びせる

「ぐぉぉ！！」

ヴァイスはプロヴィデンスの上を取りハウリング・ランチャーXモードで
プロヴィデンスを狙う
アルトはリボルビング・バンカーでプロヴィデンスを捕らえ一発打ち込む

「仕上げるぞ！」
「ＯＫ！」

そのままプロヴィデンスを持ち上げる
ヴァイスはXモードを発射しアルトの上のプロヴィデンスに直撃させる
下手をすればアルトさえも撃ち貫きかねない
完全にお互いを信頼していなければできない芸当である
上空のライン・ヴァイスリッターが発射するビームに向かって
バンカーで突き上げた敵機とビームコートを盾にアルトが突っ込んでいく
そしてアルトとヴァイスが接触しようかという所でプロヴィデンスから離脱し核爆発を起こす

「これが俺達の・・・」
「本当の切り札です・・・！って感じですか？」

終戦

アウルサイド

兄ちゃんと別れた後ジェネシスに向かっているがＺＡＦＴの連中が邪魔してくる

「くらえ！Ｔ－ＬＩＮＫナッコォォ！！！」

拳に念動フィールドを集中させてＺＡＦＴの機体を粉々にしていく

「ハイゾルランチャー！シュ～！！」

スティングはハイゾルランチャーを放つが次々と敵が出てくる

「ええい！」

ステラはビームソードで敵を斬っていく

「もう！邪魔！」

マユはツイン・マグナライフルで敵を撃ち貫いていく

「これじゃあ合体できないぜ！」

「いそがないとジェネシスが地球を撃つ！」

「でもこれじゃあ！！」

「ファイナルビーム！！！！！」

目の前の敵が一機に一掃された

「おい！早く片をつけて来い！」
援護してくれたのはオレンジ色のグルンガスト壱式
「ミゲルのあんちゃん！」
「早く行け！」
「「「了解！」」」」
俺達はここをミゲルのあんちゃんに任せジェネシスに向かう
そしてようやくジェネシスに到達した
「行くぜ！ステラ！スティング！」
「うん！念動フィールドオン！」
「トロニウムエンジン！フルドライブ！」
「いくぜ！ヴァリアブル・フォーメーション！」
各機が位置につき念動フィールド内で変形と合体が行われる
Ｒ－１がＲ－２と合体し上半身となり
Ｒ－３が下半身となりハイゾルランチャーが腕と手となり頭部ゴーグルを連結させる
「天下無敵のスーパーロボット！ここに見参！！」
「行くよ！ステラ！」
「うん！」
「「Ｔ－ＬＩＮＫ！ツインコンタクト！」」
「メタルジェノサイダーモード！機動！」
Ｒ－ＧＵＮパワードは砲塔のような形に変形する
それをしっかりと握る

「トロニウムエンジン！オーバードライブ！」
「アウル！トリガーを！」
「まかせとけ！」

ジェネシスに狙いを定めターゲットをロックする

「くらえ！天上天下一撃必殺砲！！バスター！キャノ～ン！！！」

Ｒ－ＧＵＮパワードが変形したＨＴＢキャノンにＳＲＸ側のトロニウムエネルギーを加えて
爆発的なエネルギーをジェネシスに向かって放つ
放った一撃はジェネシスに到達しジェネシスを貫きヤキンドゥーエにさえ到達する
ヤキンは大爆発を起こしジェネシスと共にこの世から消滅した

「おっしゃあ！！っておわぁ！」

爆発のエネルギーで大きく飛ばされる

「アウル！しっかり制御しろ！」
「ンなこと言ったってよ！」
「アウ～ル～！！！」
「のわぁぁ～！！！」

だがいきなり機体が止まった

「アウル！出来るなら最初からやれ！」
「いや今のは俺じゃなくて・・・」
『まったく手のかかる弟と妹達だ』

「「「「この声は！！！？」」」」

画面を見るとアルトが腕を掴んでいるのが見えた

「「「「「お兄ちゃん！（兄さん！）（兄ちゃん！）」」」」」

「四人ともよくやったな」

「こんな俺にやらせたら朝飯前だよ！」

「ほう？それにしては先ほどは機体制御も出来ていなかっただろう」

「う・・・」

「アウル、お前は戻ったらまた特訓だ」

「そんな～！ステラ達もなんか言ってくれよ！」

「まあ頑張れよ」

「ご愁傷様」

「頑張ってね」

「ガ～ン！！！」

「ふ・・・皆この戦闘！」

俺は全周波数で通信を開く

「我らの勝ちだ！」

わぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！

この日長きに渡って続いた戦争に終止符が撃たれた

終戦（後書き）

第1部完結！

始まり　プラントにて（前書き）

作「読者の皆様作者のアルトアイゼン・リーゼです」
キョウ「今作の主人公をやらせて貰っていますキョウスケ・ナンブです」
作「さあ！今回から機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　古しえの鉄の巨人に乗る介入者は新章突入！ＤＥＳＴＩＮＹとなります」
キョウ「よくここまでこの作品がきたな駄作者による駄文、駄作品なのに」
作「相変わらずきっついね～」
キョウ「当たり前だ小説内ではすでに２年の歳月が経過しているんだぞ」
作「マジで？じゃあ早く書いちゃおう！では！今回の前書きはここまで！」
作、キョウ「「では本文をお楽しみください！」」

始まり　プラントにて

キョウサイド

机には社員達によって考え出された新たな商品のデータ
最近の世界情勢やニュースがパソコンに映し出されている
・・・ふむ・・・財団の株価は上がっているな
俺は立ち上がりベランダに出て風に当たる

「・・・あれから2年か・・・」

ヤキン宙域での戦闘から2年・・・
俺は相変わらず世間には顔を出さずに財団にいる
あの後地球軍とプラントは和平しプラントは完全に独立を果たした
俺の弟子キラはラクス共に孤児院で子供達の世話をしながら暮らしている
財団に来るのはまだ後のようだ
あの無能だが戦いが終ったらお仕置き・・・もとい教育し（と言う名の調教である）
今では少しはまともになりオーブの首長をやっている
任せて良いか不安だがな
さて財団でも変化はそれほど起きていない
ステラ達は訓練に励みたまに街に出て遊んだり
ニコル君は財団のパイロットをやりつつピアニストとして活躍中
ミゲルは最近本土に出向き誰かと会っているとか
2年の間にギルと交友関係持ったりだとかぐらいかな？
♪～♪～
パソコンからメールの着信音が聞こえ
メールを開くとギルからだ

内容は簡単に言えば
ミネルバが完成したから来てくれ

っという物だ
プラントに行くのも悪くはないな
だが護衛は連れて行く
護衛はマユ、ミゲルを連れ
アルトをコンテナに入れプラントに向かった

「・・・着いたな」
「「展開はやっ！！！！！」」
「駄作者の力量不足だ」
「「納得」」

いや・・・あの納得されても・・・困るんですけど・・・

「さあ行くぞ」

俺達はギルが待っているミネルバに歩き出した
・・・

「やあ久しぶりだねネメシス」
「ああ久しいな」

ブリッジでギルと握手を交わす
ネメシスというのは俺の偽名だ

「ああ艦長紹介しておくよこちらは・・・」
「ネメシス・アサルトだ」
「私はミネルバ艦長のタリア・グラディスです」

握手を交わす

「彼はミネルバに大きく係わっている人物でね完成したミネルバを見に来てくれたんだよ」

良くそんな嘘八百出てくるものだ

すると爆発が起こり3機のモビルスーツが暴れ始めた

「ギルあれは・・・Xナンバーか?」

「ああ新たに開発した機体だよ」

「それがおもや俺達に牙をむくとは・・・」

「ネメシスすまんが」

「解ってるアルトは持ってきている」

「すまないね」

「はあ・・・だがこっちも何か出せよ?」

「解ってるよ艦長発進できるのは?」

「え!?あ・・・インパルスのみですけど・・・」

「じゃあ俺が持ってきたコンテナ開けて発進するぞギル」

「ああ頼むよ」

俺が行こうとするとマユが寄ってきた

「行ってらっしゃい」

「ああミゲルマユの事頼むぞ」

「ああまかせろ」

俺はさっさとドッグに行きアルトに乗り込んだ

『システム起動を確認　全システムオールグリーン』

コクピットに響くレインの声・・・

「アルトアイゼン・リーゼ、キョウスケ・ナンブ出る！」

俺は一気にスラスターを開き新型に向かう

一方ブリッジでは・・・・・・

「か、艦長！あ、あの赤い機体は！」

「間違いないわね、前大戦で圧倒的な強さを見せ伝説はたまた空想の産物レベルになってる機体ね・・・・・・・・議長彼はいったい？」

「彼はキョウスケ・ナンブ、ナンブ財団の創始者をしているものだよ」

「「（言っていいのか？（かなぁ？））」」

キョウスケ視点

さて本題に戻ろうか

目の前にはカオス、ガイア、アビスがいる

本来はこいつらがステラ達の機体になるはずだったするとあるとの横にインパルスが降ってきた

「また戦争がしたのか！？あんた達は！？」

俺はインパルスを無視し加速しオルゴン・クラウドで瞬間移動し斬艦刀で腕足を切り戦闘不能にする

「ギル、終ったぞ」
『さすがだねネメシス、いやキョウスケ』
「やはりばらしたのか・・・」
『アルトの時点で気がつくよ』
「まあそうだなこれから戻るから誘導頼むぞ」
俺はミネルバに向かった

転生者アムロ・レイ？　やっぱガンダムって言ったらアムロなのね

俺はアルトから降り何故か格納庫にいるギルに近づく

「おいギルばらす必要があったのか？」

「いや嘘言うより良いと思ってね」

「はあ・・・」

俺と議長であるギルと会話しているのが不思議なのか周りはポカンとしている

「だがキョウスケ実はXナンバーはもう一機ずつあったんだ」

「なに？」

原作と違うな

「君が破壊したのはオリジナル奪われたのは言わば偽者（レプリカ）」

「なるほどな・・・おいそこのお前アルトに触るな」

赤服を着たやつが勝手にアルトに触れようとしていたので釘を刺すって顔がアムロだ・・・なんで？

あれか転生者か？

俺のほかに？

「す、すみません・・・」

「次は容赦せんからな」

俺はレインにプロテクトをかけさせマユ、ミゲルと合流しブリーフィングルームに入り椅子に腰掛ける

マユは俺の膝の上　ミゲルは俺の隣

「ふう、久しぶりの戦闘の雰囲気だったよ」
「本当に2年ぶりかよ?戦闘?」
「ああ2年ぶりだ」
「お兄ちゃんカッコ良かった♪」
「ふふふありがとな」

俺はマユの頭を撫でる
そこに赤服を着た4人がこちらに来た

「まさかこんな所で幻の創始者様に会えるなんてね」
「・・・君達は?」
「私はルナマリア・ホークです」
「自分はレイ・ザ・バレルです」
「自分はシン・アスカです」
「アムロ・レイです」
「そうか・・・此方も自己紹介しよう
俺はネメシス・アサルト・・・いやキョウスケ・ナンブだ」
「ミゲル・アイマンだ」
「マユです」
「え!?マユなのか!?」

シンはマユの顔を見るなる大声を上げる

「?なんだシンさんじゃん」
「!??なに言ってんだよ!俺はお前に兄貴だろ!?」
「はあ?私には親の腕を私の腕と間違えて絶望している所をオーブ軍人に保護された兄なんていませんけど?」

「細か！」

この後シンは魂が抜けたようにどこかに消えていった
レイとは少しばかり面識がある
ギル関係でね♪
この後アムロと名乗る青年と話しをするため彼の部屋に行く

「（エクナ、聞きたい事事があるがいいか？）」

念話でエクナに聞く

「（何ですか？）」
「（俺も目の前にアムロと名乗る奴がいるだが）」
「（ああなんかハデスさんの息子さんがミスって死んだ人が来たのかもしれませんね）」
「（よりにもよってハデスかよ・・・ありがとうサンキュ）」

ブツッ
念話の切れる音
さて彼の部屋に着いたな

「・・・単刀直入に聞くぞあんた誰だ？」
「名乗ったはずだが？それとも原作に居ない奴がいるから混乱デモしているのかな？
連邦の白い悪魔アムロ・レイ君？」
「！！あんたは・・・」
「転生者だ、お前よりずっと早くから居る転生者だ」
「やっぱりてかなんだよ！あの機体！あんなのＳＥＥＤにもデス種にも出てこないぞ！？」
「・・・はあ？君が知っているのは何処までだ？」

「どこまでって・・・ファーストにＳＥＥＤとデス種だけだよ」
「スパロボは？」
「んだそりゃ？」

知らないか

「いやなんでもないってかなんでアムロ？」
「ガンダムって言ったらアムロだって言われたから」
「・・・因みなんか特典貰った？」
「ああもちだ　ＳＥＥＤにハーレムだぜ！」

うわぁ・・・くだらね・・・

「ああそうかい」

おれはさっさと部屋を出てマユ達と話すのであった

ちょこっと外伝　夏祭り（前書き）

これはＳＥＥＤ編とＤＥＳＴＩＮＹ編の２年の間の物語

ちょこっと外伝　夏祭り

「夏祭り？」

俺のそんな声が執務室に響いた
俺の目の前にはアウル、ステラ、スティング、マユがいる

「うん！なあ兄ちゃん！行ってみようぜ！」
「ステラも行きたい！」
「兄さん俺も行きたいです」
「私も！」
「行くのは良いが宿題は終ったのか？」
「「「「う！！！」」」」

こいつ等はまだ子供、だから俺達部隊長が交代で先生をやって勉強を教えている
大丈夫だ、ちゃんと教員免許は持っている
今世間は夏休み　この世界にもちゃんと夏休みぐらいはある
それに合わせて宿題を出している

「え～っと皆の達成率は・・・アウルは４０％」
「う！」
「ステラは６４％」
「う～」

ステラは頬を膨らませている

「スティングは７９％」
「あと少しなんだけどな・・・」

「マユは７５％」
「ふにゃ～」
「全員まだ終ってないって言うかアウルお前だけ半分もやってないぞポケモンやりすぎだ」
「だって・・・あと少しでピチュー進化するんだもん・・・」

元々この世界にポケモンはなかったが俺が作って販売してみたら大ブーム！！
今はプラチナまで出している
かなり自由度が高くて自分で好きなキャラを作りそのキャラで遊ぶか元々作ってあるキャラを使うかの２択になっている

「言い訳は許さんとにかく全員の宿題が８０％を超えたら連れて行っても良いぞ」
「「「ほんとう！！？」」」「８，８０！！？」

あと少し頑張ればいいステラ、スティング、マユは喜ぶがアウルはがっくりとしている
４人は執務室を出ていった
すると入れ違いにエクナが入ってきた

「ふふふ意地悪しないで連れて行ったらどうですか？」
「勉強はして貰わんと困る、あいつらが真剣に勉強する姿勢さえ見せれば連れて行ってやるつもりさ」
「甘いと言うかなんというか」
「そういうなエクナ、お前も行くか？」
「はいもちろんです」
「そうかでは浴衣の準備をしなくてはな」

俺は皆の分の浴衣を準備するために部屋を出た

・・・・・・・7時間後・・・・・・・・・・・・

「「「「宿題８０％!!終りました!!」」」」　「はあはあはあ・・・

お　終りました・・・」

アウルは文字通り灰になりかけている

「・・・よし合格だ約束どおり祭りに行くぞ」

「「「「よっしゃあ!!!!!」」」」

「よかったですね」

「おう!ありがとエクナ姉ちゃん!!」

因みにエクナは姉さんと呼ばれている

「さて行くのは明日だ」

「「「「は～い」」」」

そして翌日の夜

俺達は本土で行われる夏祭りに来ていた

俺は赤色ベースの浴衣

エクナは白がベース

マユとステラはピンク

アウルとスティングは青と緑だ

「ほら皆小遣いだ有意義に使うんだぞ?」

「「「「は～い」」」」

皆に小遣いとして日本円で3万を渡した

ついつい多く渡してしまったが良いだろう

皆は散って行った

「さあ行きましょうよ、雲を食べに行きましょうよ！」
「エクナ、それは綿飴だ」
エクナは顔を赤くした
「と、とにかく祭りです！祭りですよ！！？
無駄に高い焼きそば食べて！牛に追われて！高いところから飛び降りましょう！」
っと言ってエクナは行ってしまった
「何処の祭りだそれは？」
俺はエクナの後を追った
追っていたらアウルが焼きそばとカキ氷とフランクフルトを食べていた
「おいおい食いすぎだろう？」
「あ！ふぃいちゃん！たふぇる！？」
「ちゃんと飲み込め」
「ん！兄ちゃんも食うかい？」
「いやいいあんまり調子に乗って食うなよ」
「う～す」
アウルと別れ祭りを回っている
するとマユとステラが金魚すくいをしている
「どうだ？巧くできてるか？」
「あ！お兄ちゃん♪」

「ううん・・・巧くできない・・・」
「どれ俺がやろう、親父さん俺の分も頼む」
「あいよ妹さんに良い所見せてやりな」

親父さんにポイを貰い気を集中し一気に４匹すくう

「わぁ～！！凄い凄い！！」
「凄いよ！お兄ちゃん！！」

ステラは俺に抱きついてくる

「ははははやるなぁあんちゃん」
「それはどうもじゃあなマユ、ステラ」
「うん」
「またね」
「あんちゃん楽しんでいきなよ」
「ありがとう、親父さん」

二人と別れ他の屋台に向かった
射撃の所でスティングがいた

「おおいスティングどうだ？」
「ああ兄さんううんだめだあれが欲しいのに・・・」

スティングが指差すのはお菓子詰め合わせ
ふっなんだ子供っぽいとこがあるんだな

「俺が取ってやるよ、お願いします」
「はいどうぞ」

俺はライフルを渡され片手で構える
そして一発で撃ち落とす

「すごい！」
「ほらぁ」
「ありがと兄さん！」
「あんたやるねぇあれはなかなか落ちないように置いたんだけどなぁ」
「じゃあな」

俺はスティングと別れぶらぶらと歩き始めた
俺は誰もいない噴水の近くのベンチに座っていたエクナの隣に座った

「エクナどうしたんだ？」
「あ、いえたこ焼きを買ったのでここで買おうと思いまして」
「そうか」

エクナはたこ焼きを食べ始めた

「う～ん♪美味しい♪」
「楽しそうだな」
「ええキョウスケ様は楽しんでいますか？」
「それなりにな」
「本当に？」
「そう見えないか？」

笑顔をエクナに向ける

「／／／／／／み、見えます／／／／／／

すると花火が上がり始めた

「わぁ・・・」

俺はエクナの肩に手を回した

「綺麗だな」

「ええ／／／／／」

「これからもよろしく頼むぞエクナ」

「はい／／／キョウスケ様／／／」

俺達は花火を流れ続けた

アンケート　１００万アクセス達成！

「はい！ここで再びアンケートです！」

「またか」

「今度は何をする気ですか？」

「何気に弟子のキラが出てきたな」

「なんか面白そうなんで着ました」

「実はですね・・・なんと！今作品！機動戦士ガンダムＳＥＥＤ
古しえの鉄の巨人に乗る介入者
が１００万アクセスを達成いたしました！」

「マジですか！？」

「こんな駄作品が・・・信じられん・・・」

「私も信じられません！それで今回は次作のアンケートをしたいと
思います」

「次作？」

「どういう事だ？」

「第一話でエクナと一緒に暮らすって言ったじゃないですか」

「ああ神化するってやつですね」

「ああ言ったな」

「それでキョウスケはあらゆる世界でバグを修正する神として生きるって事を考えてます」

「何ですかそれ？」

「いわゆる面倒役だな」

「その言い方は酷いな・・・それでその世界を募集したいと思います！」

「キョウさんこの駄作者読者様に頼ってますね」

「いやいや！違うからね！キラ君！これはストーリーの柔軟性をあげるためで！」

「まあそういう事にしときましょう」

「「なんでも皆様に頼ってしまって申し訳ありません、主人公としてお詫び申し上げます」」

「では！宜しくお願いします！」

「「少しは精進しろ！！！」」

ユニウスセブン

現在ミネルバは奪われた機体奪還もしくは破壊の任務のため
宇宙にいる
俺はマユ自身の希望で膝に乗せて隣でミゲルがボディーガードしてる状況だ
ブリッジで
ギルの要請もあり俺はミネルバに残っている
面倒だがな
ブルブルッ
俺の端末にメールが来た
財団からだ

『観測ポイントより通達ユニウスセブンが移動開始
地球までの到達時間約４８時間ハガネを迎えに出します』

・・・ついに来たか・・・

「艦長、財団から緊急通達が来た」
「通達？」
「ああユニウスセブンが地球に向かっている」
「「「「ええ！？」」」」
「ユニウスセブンの破砕作業をお勧めするぞ」

ミネルバはすぐさまユニウスセブンに向かった
ほどなくして

「艦長！所属不明の艦が此方に接近しています！」
「モニターに出して！」

モニターに映ったのは・・・ああハガネだ

「ああ、財団の艦だ」
「そうなの？」
「ああ俺達も破砕作業をするからなでは俺たち3人は移らせて貰う」

二人を連れアルトに乗りハガネに着艦する
降りると

「おにいちゃ～ん！！！！」
「ぐはぁ！！」

ステラが抱きついてきたと言うかタックルに近いが

「お兄ちゃん♪♪すりすり」
「ちょっとステラちゃん！」
「おいおい兄ちゃん大丈夫か？」
「兄さん大丈夫？」
「おいおいキョウスケ生きてるか？」
「ミゲルのあんちゃん不吉なこというなよ！」
「ってかさっさと準備しろユニウスセブン粉々するぞ」
「「「「了解！！！！」」」」

アウル、スティング、ステラ、マユは自分の機体に乗り込んだ
ミゲルには艦の指示を頼んだ
さて俺も機体に乗るかな
今回はアルトではなくサイバスターだ
なぜかって？今回の任務にはサイバスターが向いてると思ったからだ
俺はサイバスターに乗り込んだ

「ニャ！キョウスケ遅いニャ！」
「待ってたニャ」
「すまんなシロ、クロ」

エクナがサイバスターだったらシロちゃんとクロちゃん居ないとっという事でシロ、クロ出してくれました

「さあいくぞ！サイバスター　キョウスケ・ナンブ出る！」

サイバスターは宇宙に躍り出た
すでにステラ達は発進しユニウスセブンに向かっている

「キョウスケ敵が居たニャ」
「ジンみたいだニャ」
「そうかではいくか」

ディスカッターでジンを手当たり次第に切り刻んでいく
ザフトの連中も順調にメテオブレイカーでユニウスセブンを割っていく
半分が割れた所で行動に出る

「アウル、スティング、ステラ、マユ、ヴァリアブル・フォーメーションを許可する！」
「「「了解！！！！」」」」」
「行くぜ！ステラ！スティング！」
「うん！念動フィールドオン！」
「トロニウムエンジン！フルドライブ！」
「いくぜ！ヴァリアブル・フォーメーション！」

各機が位置につき念動フィールド内で変形と合体が行われる
Ｒ－１がＲ－２と合体し上半身となり
Ｒ－３が下半身となりハイゾルランチャーが腕と手となり頭部ゴーグルを連結させる

「天下無敵のスーパーロボット！ここに見参！！」
「行くよ！ステラ！」
「うん！」
「「Ｔ－ＬＩＮＫ！ツインコンタクト！」」
「メタルジェノサイダーモード！起動！」

Ｒ－ＧＵＮパワードは砲塔のような形に変形する
それをしっかりと握る

「トロニウムエンジン！オーバードライブ！」
「アウル！トリガーを！」
「まかせとけ！」

狙いを定めターゲットをロックする

「くらえ！天上天下一撃必殺砲！！バスター！キャノ～ン！！！」

放った一撃は割れた半分を飲み込み塵とかした

「さてシロ、クロ俺もやるぞ」
「「お任せニャ！！」」

両手を挙げ、両手が光を放ち
サイバスターの上に４つの魔方陣を形成する

そして腕をクロスさせ魔方陣を一つにする

「コスモノヴァ！！」

魔方陣から４つの光が放たれ残りの半分を粉粉にする

流石コスモノヴァだ

ユニウスセブン（後書き）

キョウ「俺がサイバスター乗って良いのか？」
作「いいんですよキョウスケの予備機なんですから」
キョウ「魔装機神が予備機でいいのか？」
作「まあまあこまかいことはいいの今回の後書きはここまで！」
作、キョウ「「では次回またお会いしましょう！」」

キョウスケの異変!?

俺はハガネに着艦しハガネの部屋で大気圏突入が終るのを待っている
シロとクロと一緒だ
シロとクロは俺の膝の上で丸まって眠っている
二匹の暖かな感触が膝に伝わってくる
・・・ユニウスセブンのことについては既に財団が手を廻し
事を知らせてある
コーディネーターによる反感は抑えられた

『大気圏突破、まもなく財団に到着します』

そうか・・・もう着くのか・・・
俺はクロとシロの頭を撫でる
財団に着くまで俺はシロとクロを撫でていた
そして・・・財団に着いた

「シロ、クロ着いたぞ」
「ん～・・・にゃい・・・着いたのにゃ？」

シロとクロは欠伸をして起きる

「あにゃ？キョウスケなんか変にゃ」

シロが言う

「？」
「そうにゃにゃんか疲れて感じにゃ」
「にゃれにゃいサイバスターの操縦とコスモノヴァで疲れが出たん

じゃにゃい？」
「大丈夫だ・・・先に俺は行くからな」
俺はハガネから降りた
「お兄ちゃん！」
ステラ達が此方に走ってきた
俺は歩き出そうとしたが・・・
全身に力を入れる事ができずその場で両膝をついた
皆は近寄ってくるが声はよく聞こえない
意識が激しく朦朧としている
「ごほごほ！！」
咳をする
手で口を押さえたが
手には血がベッタリと付いていた
「な、なんだ・・・これは・・・」
キョウスケは倒れ周りの人達によって医務室に運ばれた

キョウスケの異変！？（後書き）

次回キョウスケの身に起きた事の原因が明らかに

傷ついた戦神

キラサイド

僕は久しぶりにナンブ財団を訪れていた
僕特製のコーヒーを持参してきている
もちろんキョウさんに味を見てもらうためだ
でも・・・キョウさんが倒れたと言う事を聞いて医務室に直行した
医務室に着くとマユちゃん達に見守られ点滴と輸血をし
呼吸器を付けているキョウさんの姿があった

「ア、アウル、キョウさんはなんで・・・」
「それが分からないだよ、ユニウスセブンの破砕作業を終えて
帰ってきてハガネから降りてきて俺達が近づいていったら急に膝を
ついちまって
それで・・・血を吐いて倒れたんだ・・・」
「そ、そんな・・・」
「検査もしたけど原因がまだ特定できてないんだ」

キョウさんは少し苦しそうな顔をしている
するとキョウさんが着けていて机の上においてあった指輪が光始めた

「なんだなんだぁ!?」
「光ってる・・・」

そして指輪から光が伸び
皆は光を避けそして壁に到達すると少し透明なキョウさんの姿が映
し出された

「!?に、兄ちゃん!?」
『私は創造者(クリエイター)によって作り出されたプログラム
創造者になんらかの問題が発生したときに起動するように作られた』
「な、何のため?」
『君達の質問に受け答えをするためだただし質問は正確に言え』
「じゃあ!」
「あんたは!本当に兄ちゃん!じゃなくてキョウスケ・ナンブによって作られたのか?」
『ＹＥＳ』
「何でキョウスケ・ナンブは倒れたんだ!?」
『その質問の答えはアルトアイゼン・リーゼにある』
「アルトに!!?なんで!?」
『質問は正確に頼む』

手を上げ注意する

「ええとどんな問題が・・・?」
『知っての通りアルトアイゼン・リーゼのコアユニットには複数の動力源が
搭載されている、その動力源のお陰でその攻撃力、スピードが保持されている
その時に発生するGはオルゴンクラウドによって軽減されていたが
徐々に自分の反応速度にアルトが追いつかなくなっていった
財団のパイロットはまだ発展途中だ
財団の皆を守るためにオルゴンクラウドのG緩和力を出力に回したんだ
そのためにGによるダメージが蓄積されそして今血を吐くまでのダメージとなった』
「「「「「・・・・・・」」」」」

ステラ達は黙ってしまった

「もういいです・・・」

『私は何時もここにいる何か聞きたいことがあるのなら聞け』

プログラムは消えた

皆の視線はキョウさんに向いていた

「ステラ達を守るために・・・」

ステラは涙を浮かべながら言った

そして皆は自分の訓練に一層力を入れた

キョウさんに負担をかけないために

傷ついた戦神（後書き）

スパロボＪを参考にしました

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8366u/

機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　古しえの鉄の巨人に乗る介入者

2011年10月19日09時16分発行